特215
841

岩波文庫・教科書版

13

枕草子

（抄　曙　春）

卷　中

池田亀鑑校訂

岩波書店

始

358

特215
841

岩波文庫・教科書版
13

秋草子

（春曙抄）

巻中

池田亀鑑校訂

岩波書店

昭和七年三月

目次

七七 めでたきもの……七
七八 なまめかしきもの……一二
七九 宮の五節……一五
八〇 無名といふ琵琶……二三
八一 上の御局の……二六
八二 御めのとの太夫の……二七
八三 ねたきもの……二八
八四 かたはらいたきもの……三三
八五 あさましきもの……三五
八六 くちをしきもの……三六
八七 五月の御精進のほど……三八
八八 御かたがた、君達……五一
八九 中納言殿まゐらせ給ひて……五三

巻五

九〇 雨のうちはへ降るころ……五四
九一 はやうおほささいの宮に……五五

巻六

九二 作物所に別當する比……五七
九三 淑景舎東宮に參り給ふ……五八
九四 殿上より梅の花の……六九
九五 二月つごもり……六九
九六 はるかなる物……七一
九七 方弘は……七三
九八 關は……七五
九九 森は……七六
一〇〇 卯月の晦日に……七七
一〇一 湯は……七八
一〇二 常よりもことに聞ゆる物……七八

一〇三　綿に書きて劣る物……七八
一〇四　書きまさりするもの……七九
一〇五　あはれなる物……七九
一〇六　正月に寺に……八三
一〇七　心づきなき物……九二
一〇八　わびしげに見ゆる物……九二
一〇九　暑げなるもの……九三
一一〇　恥しきもの……九四

卷七

一一一　むとくなる物……九八
一一二　修法は……九九
一一三　はしたなきもの……九九
一一四　關白殿の……一〇二
一一五　九月ばかり……一〇四
一一六　七日の若菜を……一〇五
一一七　二月官のつかさに……一〇六
一一八　頭の辨の御許より……一〇八
一一九　などてつかさ得はじめたる……一一
一一〇　故殿の御ために……一一三
一一一　頭の辨の……一一五
一一二　五月ばかりに……一一九
一一三　圓融院の……一二三
一一四　つれ〴〵なるもの……一二六
一一五　つれ〴〵慰むる物……一二六
一一六　取り所なきもの……一二七
一一七　なほ世にめでたき物……一二八
一一八　故殿など……一三五
一一九　正月十日……一四二
一二〇　清げなる男の……一四三
一二一　おそろしきもの……一四五
一二二　清しと見ゆる物……一四五
一二三　汚げなる物……一四五

卷八

一二四　いやしげなる物……一四七
一二五　胸つぶるる物……一四八
一二六　うつくしき物……一四九

一二七　人ばへする物……一五一
一二八　名おそろしき物……一五二
一二九　見るに異る事なさ物の文字に書きて事々しき物……一五三
一三〇　むつかしげなる物……一五四
一三一　えせものの所得る折の事……一五四
一三二　苦しげなる物……一五九
一三三　羨しきもの……一六〇
一三四　疾くゆかしき物……一六三
一三五　心もとなき物……一六三
一三六　故殿の御服の頃……一六六
一三七　宰相中將齊信……一六九
一三八　此三月三十日……一七〇
一三九　弘徽殿とは……一七六
一四〇　昔覺えて不用なる物……一七八
一四一　頼もしげなき物……一七九
一四二　近くて遠き物……一八〇
一四三　遠くて近き物……一八〇
一四四　井は……一八一
一四五　受領は……一八二
一四六　やどりのつかさの權の守は……一八二
一四七　大夫は……一八三
一四八　女の獨り住む家などは……一八四
一四九　宮仕へ人の……一八五
一五〇　雪のいと高くは……一八八
一五一　村上の御時……一八九
一五二　御形の宣旨……一九一

卷九

一五三　宮に初めて……一九二
一五四　したり顔なる物……二〇二
一五五　風は……二〇五
一五六　野分の又の日こそ……二〇六
一五七　心憎き物……二〇八
一五八　島は……二〇九
一五九　濱は……二一〇
一六〇　浦は……二一一
一六一　寺は……二一二

一七二 經は……二二三
一七三 文は……二二四
一七四 佛は……二二五
一七五 物語は……二二七
一七六 野は……二二八
一七七 陀羅尼は……二二九
一七八 讀經は……二三〇
一七九 遊びは……二三〇
一八〇 遊び事は……二三〇
一八一 舞は……二三〇
一八二 引ものは……二三二
一八三 調は……二三二
一八四 笛は……二三三
一八五 見る物は……二三五
一八六 五月ばかり……二三〇
一八七 いみじう暑き比……二三一
一八八 五日の菖蒲の……二三一
一八九 よくたきしめたる薫物の……二三二
一九〇 月のいとあかきに……二三三
一九一 おほきにてよき物……二三三
一九二 短くてありぬべき物……二三四
一九三 人の家につき〴〵しき物……二三四
一九四 物へ行く道に……二三五
一九五 行幸はめでたき物……二三六
一九六 萬の事よりも……二三六
一九七 細殿に便なき人……二三八
一九八 三條の宮に……二四〇
一九九 十月十餘日の月……二四一
二〇〇 成信の中將こそ……二四二
二〇一 大藏卿ばかり……二四二
二〇二 硯きたなげに……二四三
二〇三 珍しと言ふべき……二四五

343-606

枕草子春曙抄　巻五

七十七

めでたきもの　唐錦、餝太刀、造佛のもく、色合よく花房長く咲きたる藤の松にかかりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれどもえしも着給はぬ綾織物を心にまかせてきたる。青色姿などいとめでたきなり。所の衆、雜色、たゞの人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位六位もつかさあるが下にうちゐて、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨もてまゐり、大饗の甘栗の使などにまゐりたるを、もてなし饗應し給ふさま、いづこなりし天下り人ならんとこそおぼゆれ。御むすめの女御后におはします。まだ姫君など聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文取り入るゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖ぐちなど、あけくれ見し物ともおぼえず。下襲のしりひきちらして衛府なるはいま少しをかしう見ゆ。自ら盃さしなどし給ふを我心にもおぼゆらん。いみじうかしこまり、べちにゐし家の君達をもけしきばかりこそかしこまりたれ。おなじやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへ

一 桐櫻沈香等の木像の木目也
二 麴塵の袍鈍青色文桐竹鳳凰と桃華等葉に有り
三 藏人所衆也、前註
四 藏人にならぬ間は是らの官位の人の下座に居て物の數とも見えざりしも藏人になれはめでたきと也
五 あまりにめでたきをいはんとて也
六 甘栗使禁中よりたつ也

七 簪應也、主人藏人にあひて藏給ふ事あり。江次第委

八 天人にやさ也。

六位藏人事也

九 塩家大臣家の事也

一〇 人内なきほど也

一一 御使にまゐれる六位藏人への會釋也

一二 褥也

一三 衛府藏人にて衛門兵衛などか兼ねたる也

一四 塩家などにて也

一五 六位藏人が心にも也

一六 句

一七 日比地下にてありし間一所にも居す、畏まりたる人々にも藏人に成りては同じやうにつれあり

一八 句

一九 天子の藏人をめしつかはせ給ふ也

二〇 滑御書かゝせ給ふ也

二一 藏人也

二二 暑き比、侍臣など帯をあふぎ申さるれば藏人御扇給はりてあふぐ也

二三 六位藏人にて侍るはど也

二四 大かたなる心也、六位藏人にてある者は衣裳などきら〳〵しくてまじらへかしこ也

二五 地下になりては御前へ參る事もなくなれば也古今に命にもまさりてをしくある物はよめる詞也

二六 いと日

二七 藏人おりん事

二八 今はむかしのやうにはなき心也

二九 博士の才智ある也、花鳥云博士のざえあるはいとめでたしといふ

こそおぼゆれ。御文書かせ給へば、御硯の墨すり、御團扇などまゐり給へば、我つかうまつるに、三年四年ばかりの程を、なりあしく、物の色よろしうてまじろはんはいふかひなきものなり。かうぶりえておりん事近くならんだに、命よりはまさりてをしかるべき事を其御賜りなど申してまどひけるこそ口惜しけれ。昔の藏人は今年の春よりこそなきたちけれ。今の世にははしりくらべをなんする。

○めでたき物——見事なる也。

○からにしき——唐錦、蜀錦などなり。

○かざりだち——延喜式彈正云凡畫餝太刀五位以上聽レ之。桃華蘂葉云、餝劔三節會、内宴、御禊行幸等王卿用レ之云云。昔は二宮の大饗にも公卿以下餝劔を用ゐる。近代種螺劔を着すと江次第にあり。

○六位藏人——官位不審問答六位の時地下の者も藏人に補し候へば昇殿禁色をゆるされ候云云。

○ざふしき——藏人所雜色也。禁祕抄云本員八人。代々皆轉二藏人一、仍公卿子孫又可レ然諸太夫多補レ之。職原抄云良家子補レ之云云。

○せんじもてまゐり——内侍宣とて藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參する也。宣旨とはの給ふむねとよむ也。天子の仰せを藏人頭承りて其旨を直に宣下するを内侍宣とはいふ也。河海にあり。

○大饗のあまぐりのつかひ——大臣の大饗に蘇甘栗の使とてあるに、六位藏人參る事也。大臣大饗とは大臣に任ぜられたる人。大納言以下、辨、少納言、官外記史などまで饗應せらるゝ事也。江次第二曰、大臣家大饗正月四日ハ左大臣ノ饗五日ハ右大臣ノ饗藤氏一ノ大臣用二朱器・豪盤一。以二其日一可レ行由以二職事一達二天聽一。是非二式日一時依レ可レ遣二蘇甘栗使並饗祿樂部等事一歟。藏人到二中門一以二家司一令レ奉二蘇甘栗等一。盛二折櫃二合一一合蘇大二一合甘栗大小二一合八中八各居二土高坏一入二外居一荷一小舎人二人衣冠相具。仕丁二人着二蒐染一持レ之藏人着二青色袍一於對庇可レ進歟。

○御使にて——藏人のまゐる也。禁祕抄云、御使事、依レ人依レ事有二差別一。藏人頭、近衛將、五位藏人、六位藏人等也下略。

○御文とりいるゝより——女御后まだ姫君の方へ取りいるゝ也。禁祕抄云、御書事、后女御以下於二女房一無二定子細一勿論歟、料紙女房許多薄様、後々檀紙也上下略。

○かうぶりえておりん事近く——六位藏人巡爵とて五位に叙して、藏人をさりて、地下におるゝ事也前註。

○其御たまはりなど申して——御給也。巡爵のぬち受領など申す事也。

○博士のざえあるはいとめでたしといふもおろかなり。顔もいとにくげにげらふなれども、世にやんごとなき物に思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべき事な

士は博達の士といふ事也　二才智ゆゑに世にたふとまるゝ也　三禁裏春宮などをさしていふ也　四詩序など也　五至りてめでたき心也　六農朝日中などに經よむ事也　七讃經也　八才ある法師は猶と也　九たれなどいふ心也　一〇灯明おそしとの心也　一一行啓　一二是も中宮の御産也　一三作法がましき心也　一四御膳を据ゑる物也、桐壺卷に大床子のおものとあり　一五簾、御膳御飯のため也

と問はせ給ふ御文の師にてさぶらふはめてたくこそ覺ゆれ。願文もさるべきものの序つくり出して賞めらるゝいとめでたし。法師のざえあるすべていふべきにあらず。持經者の獨りして讀むよりも、あまたが中にて、時など定まりたる御讀經などに、猶いとめでたき也。暗うなりて「いづら御讀經油遲し」などといひて讀み止みたるほど忍びやかにつゞけゐたるよ。后のひるの行啓。御産屋。みやはじめの作法しく。狛犬。大しやうじなどもてまゐりて、御帳の前にしつらひ据ゑ、内膳、御竈わたし奉りなどしたる。姫君など聞えしたゞ人とこそ露見えさせ給はね。一の人の御あり き。春日詣。葡萄染の織物。すべて紫なるはなにも〳〵めでたくこそあれ。花も絲も紙も。紫の花の中には杜若ぞすこしにくき。色はめでたし。六位の宿直姿のをかしきにも紫のゆゑなめり。廣き庭に雪の降り敷きたる。今上一の宮まだ童にておはしますが御をぢに上達部などの若やかに清げなるに抱かれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬ひかせて御覽じあそばせ給へる、思ふ事おはせじと覺ゆる。

○はかせのざえある——儒家に紀傳明經などあり。環萃云、明經道は十三經を以て家業とす。紀傳道は三史史記漢書後漢書文選等を家業とす。

○下らふなれども——官位ひきき事也。文章博士は從五位下。大學博士は正六位下の相當也。官位令にあり。

一六句　一七人内以前の其人とも見えず嚴重なると也　一八攝政關白を申す也　一九藤原の祖神なれば必ず一の人參詣ある事也　二〇紅花染は紫なるにつけて也　二一花、糸、紙何も紫よしと也　二二句　二三花の形を云ふ也　二四是も色ぼ憎からぬと也　二五六位藏人の宿直姿也　二六禁色をゆるゆゑにと也

○御ふみの師にて——帝の御師範也。御侍讀とて候する也。禁祕抄云、紀傳御侍讀能々可レ有二清撰一世之所レ許明書也。

○願文——御祈禱追善等にかく文也。本朝文粹菅家文草などに願文數多有り。

○いづら御どきやうあぶらおそし——くらくて人はよみやみたるに才ある法師はそらに覺えて一人讀誦する也。

○后のひるのぎやうけい——畫行啓春宮后宮の御ありきを行啓といふ也。

○みやはじめのさほうしく——立后の作法禁中のごとく、狛犬、大床子などしつらふ事也。こゝは定子の皇后宮に立給ひしはじめの作法しき事にや。正曆元年六月一日なるべし。榮花物語かゞやく藤壺の卷に、上東門院立后の所云、此たびは藤壺の御しつらひ大床子たて、御帳の前のこま犬なども常の事ながらめとゞまりたり云云。

○内膳御へついわたし奉り——百寮訓要云、内膳司天子の供御を奉行する所也。たとへば膳部所など申す所と同事也。昔は内膳の御飯ならでは主上はきこしめさぬ事也。およそもろ〳〵の御膳の具は、此所におかる云云。立后有りては禁中の儀式をうつすさまなるべし。

○今上一の宮——キンジヤウイチノ或ハゴン上一條院の第一の皇子敦康親王の御事にや。御母は后宮定子なれば、御叔父に内大臣伊周、中納言隆家卿など上達部あり。

七十八

一 直衣着たる姿也
二 句
三 汗衫、前に註す
四 イうづちくすやまなど
五 高欄也、らんかんなり
六 顔にさしかざしたる也
七 若き女房也
八 かの女房の着たる物也
九 簾様にて書きし草紙也
一〇 村濃
一一 イもえ出たる
一二 三重
一三 五重
一四 厚也
一五 檜扇の手もと也
一六 檜皮瓶也

枕草子

なまめかしきもの　ほそやかにきよげなる公達の直衣姿、をかしげなる童女の表の袴などわざとにはあらで。綻びがちなる汗衫ばかり着て、薬王など長くつけて、かうらんのもとに扇さしかくしてゐたる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたちかけて、白き綾、二藍引襲ねて、手習ひしたる。薄様の草紙、村濃の絲してをかしくとぢたる。柳の萠えたるに、青き薄様に書きたる文附けたる。髯籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重襲の扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげ也。よくしたる檜破籠。白き組の細き。あたらしくもなくていたくふりても なき檜皮屋に菖蒲うるはしくふきわたしたる。青やかなる御簾の下より朽木形のあざやかに紐いとつやゝかにてかゝりたる。紐の吹き靡かされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる簾の外のかうらんのわたりに、いとをかしげなる猫のありき、首綱に白き札つきて碇の緒食ひつきて引きありくもなまめいたり。五月の節のあやめの藏人。菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを領巾裙帶などして、薬王を、みこ達上達部などの立並み給へるに奉るもいみじうなまめかし。とりて腰にひきつけて舞踏し拜し給ふもいとをかし。ひとりの童小忌の君達もいとなまめかし。六位の青色の宿直姿。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。

一 組糸のほそき也
一一 檜皮屋也
一二 菖蒲
一三 イ几帳のくちきかたのトアリ可用
一四 簾の外也
一五 首綱也、猫の引つな也
一六 猫の名など書きて札付けしにや
一七 領巾裙帶
一八 立並也、たちならび也
一九 王卿薬王をとりて也
二〇 舞踏也、前注
二一 拜也
二二 六位蔵人也、前注

枕草子

○なまめかしき物――優美なる心也。
○きんたち――公達とは攝家の子息、清華などを申す也。
○うへのはかま――表袴。
○夏のきちやう――几帳の帷、夏は生絹を用ゐる。したうちかけてとは、几帳のかたびらのすそを帳臺にうちかけたる也。
○ひげこのをかしうそめたる――髯籠の竹を綉の具などにてそめて五葉の松にゆひつけし也。
○みへがさねのあふぎ――河海抄云、檜扇の兩方の上三重づゝ薄様にてつゝみて、色々の絲にてとぢて、あはひむすびにしておきたる也。五重もおなじ風情なり。
○くちぎがたの――冬の几帳の綉也。禁祕抄清涼殿の所にいはく、四面有二几帳一帷夏生以二胡粉一畫二莘雀一冬朽木形云云。
○いかりのを――猫の綱に碇をつけて物にかけて猫を引とゞめんためにしたる也。其緒を猫の食ひたれたるさま也。
○五月のせちのあやめの藏人――五月五日の節に内侍女藏人續命縷を群臣に給ふと花鳥餘情にあり。前注。是をあやめの藏人といふにや。
○あかひもの色にはあらぬ――赤紐は五節などの時、紗をたゝみてあふひむす

びをして泥繪など書きて、右の肩に二筋つくる事あり。菖蒲のかづらは其赤紐の色ならであをきをいふ也。

○ひれくたいなどして——領巾、裙帶也。順和名云領巾、日本紀私記云比禮婦人項上飾也。裙帶。和名云、白氏文集云青羅裙帶裙帶此間云如レ字。

○ひとりのわらは——五節の舞姫まゐる時、薫爐をもつ童女也。江次第十云、舞姫等次第參入。先童女一人持二火取一次童女一人持レ茵五節調臺試、并御前試の所にもあり。

○をみの君達——是豐明の節會に小忌衣着したる君達也。江次第に小忌王卿。小忌大夫などいへるこれ也。幻の卷五せちの比の所に、頭中將藏人少將などをみにあをずりのすがたきよげにめやすくてとあり。河海云、小忌青摺山藍摺也。花鳥云、十一月中卯日新嘗會辰日豐明節會には、山あゐにてすれる小忌といふ物を着する也。一代一度の大嘗會にもかくのごとし云云。

○りんじのまつりの舞人——賀茂八幡などの臨時の祭に舞人あり。前註。江次第等委シ。

○五せちのわらは——五節の舞妓の童也。善相公異見曰、五節舞妓者大嘗會時五人、皆預二叙位一、其後年々新嘗會時四人。又曰擇二良家女未レ嫁者一置爲二五節妓一云云。

一句
二イ女御みやす所の
三女院の御方の人と淑景舍の御方の人と兄弟也
四舞妓かしづきなどの也
五赤紐、前ニ注ス
六樣子したる也
七小忌のさま也
八樫木也
九唐衣のうへにかの小忌を着たるなるべし
一〇イニからきぬうへに
一一舞妓也
一二両シモヅカヘ江次第によめり十二人のかしづきにや
一三隱してし給へ

七十九

宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人。こと所には御息所の人出すをば、わろき事にぞするときくに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今ふたりは女院淑景舍の人やがてはらからなりけり。辰の日の青摺の唐衣汗衫を着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじうかくして、皆裝束したちて、暗うなりたる程にもてきて着す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣にかた木のかた、繪に書きたる。織物の唐衣の上に着たるは誠にめづらしき中に、わらははいま少しなまめきたり。下仕へまでつゞきたちすゐたる。上達部殿上人おどろき興じて、をみの女房とつけたり。をみの君達は外にゐて、ものいひなどす。五節の局をみなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いと異樣なり。其夜まではなほうるはしくこそあらめと宣はせて、さもまどはさず、几帳どもの綻結ひつゝ、こぼれ出でたり。小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、これを結ばばやといへば、實方の中將よりてつくろふにたゞならず。

あし引の山ゐの水はこほれるをいかなる紐の解くるなるらん。

といひかく。

○宮の五せち出させ給ふに——后宮定子の御方より也。常は公卿受領より出す

事なれども、又かやうの御方よりも取持ち給ふ事にや。少女卷に源氏の五節を出し給ひし事あり。

○かしづき十二人。少女卷にもかしづきなどとあり。抄かいしやくの人をいふべし云々。江次第十五節の所に、童女傳といへる是也。

○みやす所の人を——源氏に桐壺更衣光君をうみ給うて後、御息所といへり。細流云、御子を生み奉りて後、御息所と號するやうに此物語にはいづくにもいへり。一條禪閤御說云、又東宮の正室は必ず御息所といふ。是后がね也云云。然らば、此草紙のみやす所は御子うみ給ふ說によらば、定子の御事にや。又東宮の正室とならば、淑景舍なるべけれど、此草紙の趣は定子の御事可然也。

○女院——東三條院詮子也。一條院の母后。法興院攝政兼家公の御女、河海云、東三條院正曆二年七月一日院號依爲二國母一也。定子の伯母也。

○しげいさ——三條院の女御。中關白道隆公の御むすめ。母高内侍。淸少納言も後は此御かたに候するよし榮花物語に見ゆ。定子の御妹也。淑景舍は桐壺の事也。五間四面の御殿也。

○たつの日の青ずりのからぎぬかざみ——花鳥餘情云、舞妓の裝束丑日は赤色の唐衣、寅日は青色唐衣、辰日青摺唐衣、赤紐、日蔭蘰等也。あをずりは小忌の事也云云。雲圖抄云、十一月五節事丑日帳臺試、寅日淵醉丼御前試、卯日

は也
一四小忌の君達といふになぞらへて名付けたるなるべし
一五外也
一六舞妓どもを也
一七つくろふさま也
一八袖口などなるべし
一九イ少辨とあり然れども千載集にも此本のごとし
二〇心けさうし給へるに也
二一實方の歌也

童御覽。辰日節會云云。公事根源にも粗しるさる。

○しろききぬにかた木のかた——一條禪閤宗祇に御傳授の大嘗會の說云云、小忌といふは神事の衣服也。白き布を張りて、山あゐといふ草にて樫木を摺れる物也。大かた狩衣のごとし云云。こゝには白き絹とあり。女房の服には絹を用ゐるにや。

○五せちのつぼねをみなこぼちすかして——辰日の儀式事はての事なるべし。

○其夜まではなほうるはしくこそあらめとのたまはせて——此儀式を猶あかずおぼす故に、局などこぼちても、猶夜迄は舞妓のさまやつさでうるはしくてあれとて、さもいたくしなさせ給はぬと也。后宮の御はからひなるべし。

○小兵衞といふが——是后宮の女房也。前に常陸介が事を右近内侍にまねばせし人也。かしづき十人の内にや。

○さねかたの中將——勘物云、實方正曆二年九月右中將元右馬頭五年九月八日左中將。

○あし引の山井の歌——足引は山の枕詞也。我思ひのむすぼほれたるを山井の氷にそへたり。下句は彼赤紐のとけしを、氷をひもといふによせてよめり。此歌後拾遺集雜五に實方の歌也。彼集にては雜のうたなれど、此草紙にはたゞなら

一小兵衛が事也
二顯證、あらはに晴れがましき所なれば恥しきにやとの心也
三おとなしき女はうたち也
四此歌の返しにとりあへぬ也
五中宮太夫貞下の宮司也
六返歌なくて笑止さに人の見ぬかたより入りて清少などに返歌を宮司のそゝのかす也
七宮司の詞也、いかでかく返歌し給はぬぞと也
八是より清少の心也
九實方をさして也
一〇大かたならぬうたにはと也
一一にはといふ心

枕草子

ずとあれば慧にや。

年わかき人のさる顯證の程なれば、いひにくきにやあらん、返しもせず、そのかたはらなるおきな人たちもうちすてつゝともかくもいはぬを、宮司などは耳止めて聞きけるに、久しくなりにけるかたはらいたきに、ことかたより入りて、女房のもとによりて、「などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりを隔ててゐたれば、よく思ひ得たらんにもいひにくし。まして歌よむと知りたらん人の、おぼろげならざらんは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ。よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ねたふとこそはいへ」と爪はじきをしてありくも、いとをかしければ、

薄氷泡に結べる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりを

と辨のおとどといふにつたへさすれば、消え入りつゝ得もいひやらず。「などか〳〵」と耳を傾けて問ふに、すこしことどもりする人のいみじうつくろひ、めでたしと聞かせんと思ひければ、得も云ひつゞけずなりぬるこそ、なか〳〵はぢかくす心地してよかりしか。おりのぼるおくりなどに惱ましといひいれぬる人をも、この給はせしかば、有る限むれたちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなンめれ。舞姫はすけまさのむまのかみの女、染殿の式部卿の宮の御おとうとの四の君の御はら十二にていとをかしげなり。果ての夜もおひかづきいくもさわかず。やがて仁壽殿より通りて、

枕草子

也
一三宮司の清少などにはゆましいへる詞也
二清少返歌、千載集にはうはごほりあはにとあり
三くくる心也
四千載にはぞトアリ
五是も后宮の女房也
六辨恥ぢたるさま也
七宮司えきかぬ也、又實方の聞きとり給はぬにてもあらんにや
八辨のおとゞもある人と也
九こゑをつくろふ也
一〇かの返歌をよくいひきかせざりしは清少のはぢをかくすなりしと皇下の詞也

清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにて、上の御局へ參りし程をかしかりき。

○四人ばかりをへだててゐたれば――清少は小兵衛とのあはひ四人ほど隔てたれば、たとひよき返歌を思ひえたりとても人をさしこえては返歌いひにくしと也。

○歌よむとしりたらん人の――歌よみと知りたる實方の、大かたならぬ此歌には、いかでか卒爾に返歌すべきと清少もつゝましく憶せしこそ折節わろかれと也。

○よむ人はさやはある――歌よむ人はさやうに返歌せずやはあらんとはげますことば也。

○いとめでたからねど――たとひめでたからぬ歌にも返歌せぬは妬くあるとこそいふ習ひなれ、まして是程の歌に返しし給はぬはいかゞとはぢしめはげます也。

○つまはじきをして――人を拒み恥ぢしむるさま也。帚木卷に、むくつけき事とつまはじきをしてとあり。空蟬卷にもあり。

○うす氷あわに歌――彼實方の山井は氷るに、いかでとくる紐ぞととがめしをうけて泡に結べるはかなき氷なれば日影にゆるびとくるぞと理りたる也。是も紐に氷をそへ、日蔭のかづらを日の影にそへたり。此歌千載集にはうは氷とあ

三三后宮の御せつけられしかはと也
三四こと所の五節に似ずと也
三五后宮の五節也
三六進と夫勅
三七是后宮の五節助正のむすめの母也
三八助正の女也
三九容儀なをはむる也
四〇仁壽殿也
四一此五節の道筋、雲圖抄に圖有り
四二后宮の上局也是も清涼殿の事なるべし

枕草子

一紫紙の文なるべし
二封也
三是より又五節の事を立ちかへりいふ也
四細工せし物にや

り尤可然也。とまりも斗ぞとあり。畢竟同心なるべし。

○ことどもりする人――瘂コトドモリ法華經譬喩品云若得レ爲二人聾盲瘖瘂一誘二斯經一故獲レ罪如レ是中略。

○おりのぼるおくりなどに――五節の帳臺の試、御前の試などに下り上る其送りに、或は所勞など申し入りし女房をも、后宮の懇にの給ひしかば、各のこらず群立ちて女房おほくあまりうるさきまで有りしと也。

○そめどのの式部卿――紹運錄村上天皇の皇子爲平親王を染殿式部卿と號す云云。

○はての夜もおひかづきいくにもさわがず――助正のむすめの十二歳なるを負ひかづき打ちつれ行くにも、うちしづまりておとなしくをかしき人と也。はての夜とは辰日節會の時にや。但し卯日童御覽の事にや。公事根源に卯日は童御覽ず云云。

清涼殿に召して御覽ず。

細劒の平緒つけて、清げなるをのこのもてわたるもいとなまめかし。紫の紙をつゝみて封じて、房長き藤につけたるもいとをかし。内裏は五節の程こそすゞろに只ならで見る人もをかしう覺ゆれ。主殿司などの、色々の細工を物忌のやうにて、彩色つけたるなども珍しく見ゆ。清涼殿のそりはしにもとゆひの村濃いとけざやかにていでゐたるも、さま〳〵につけてをかしうのみ、上雜仕、童ども、いみじき色ふし

五物忌つけたるやうにせしにや
六彩色付けたるにや
七鬢行濃、女蝶などのさまなるべし
八柳筥
九冠
一〇あふぎ拍子筋ひやうしなどして也
一一うたひ物なるべし
一二乘波也
一三五節にそひたるかしづき也
一四心ときめきする也
一五助字也
一六瓶也
一七あまたのこゑなれば也
一八擬練重さうぞく也
一九萬物よりことなる也
二〇藏人が褒貶する也

枕草子

と思ひたるいと理也。山蔭、日蔭など柳筥に入れて、冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇や何やと拍子にして、「つかさまされどしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どものまへわたる程はいみじく、そひたちたらん人の心誕ぎぬべしかし。まして、さと、一度に笑ひなどしたるいと恐し。

行事の藏人の擬練重、物よりことに清らに見ゆ。褥など敷きたれど、なか〳〵えもの夜、行事の藏人いときびしうもてなして「かいつくろひ二人、童より外は入るまじ」とおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、猶これひとりばかりはなどの給ふ。「うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人ばかり押しこりて、こと〳〵しういひたる藏人なにともせず、戸を押し明けて、さゞめきいれば、呆れて、いとこはすぢなき世かなとてたてるもをかし。それにつきてぞ、かしづきどももみないるけしきいとねたげなり。上もおはしまして、いとをかしと御覽じおはしますらんかし。童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顏どもいとらうたげにをかしかりき。

○ほそだちのひらを――細劒平緒、此一節と次の段も五節の事に連續せず。只なまめかしき物をいふなるべし。

○とのもりづかさなどのいろ〳〵のさいくを――雲圖抄裏書に御前の試みの

夜、主殿の官人庭中に列立ちて、炬火を擧ぐる事あり。又辰日の節會に、舞姫參上シテ於二第三間一列舞。主殿女孺四人秉レ燭照レ舞云云。此時主殿の女孺のいでたちに、さやうの事あるなるべし。未レ及二管見一追而可レ考。

○うへざふしわらはべ——上雜仕童にや。

○いみじき色ふしと——五節の比の事を面白き事に思ふさま也。

○山あゐ目かげなと——山藍にてすれる物や、日蔭の糸など、五節の用意に柳筥にいれありくにや。

○やないばこ——柳筥、公家衆の冠者短冊など萬の物をすゑる物也。今僧家の送り經をのする物也。

○なほしぬぎたれ——脱垂、脱亂、兩義也。

○行事の藏人——雲圖抄十一月五節事云、一藏人爲二行事一有二故障一之時二三藏人とは舞の間亂人を禁ずる奉行也。江次第有り。

○しとねなどしきたれど——女中より行事の藏人のために茵をさし出せど憚りたるさま也。

○ちやうだいの夜——公事根源云中丑日をば五節の帳臺試と云ふ。常寧殿にて主上御覽あり。五節の舞姫は五人也。まゐりの儀式あり。内に參るをば曉座といふ、皆まゐり調りて帳臺に出御なる。殿上人ども脂燭に侍ふ。主上御直

三五節の沙汰はかり也
三帳臺試
三是江次第にいへる童女なるべし、寫燈前など持つもの也
三あまりきびしくてつらにくき也
三藏人が詞也、一人をいるれは他のうらやみあれば、いかで一人もゆるさんと也
三后宮也
三押凝りてさゝめきいれはとつゞけて見るべし
三后宮の御威光をおそる、也
三藏人がさま也
三是は也
三主上一條院也
三卯日堂御覽の夜の事にや
三五節の童のかほ也

衣に指貫にて御沓を召さる。主上御指貫をめさるゝ事此時の外はなし。但御鞠の時は帳臺試に准じて召さるゝ也。帳臺におはしますほど龍舞あり。びんたゝちなどうたふ。大歌小歌などいふにあり下略猶江次第委し。圖は雲圖抄にあり。

○行事の藏人いときびしうもてなして——物見る人などの亂入を禁ずるさま也。江次第帳臺試云藏人頭行事藏人立二舞殿東戸下一開闔舞間禁二亂入一理髮童女陪從下仕之外不レ可レ入。頭若行事藏人外不レ能レ伺二戸外一上下略。

○かいつくろひ二人——五節のかしづきのたぐひ也。後拾遺の詞書に一條院御時、皇后宮五節奉り給ひけるに、かいつくろひつかうまつりける人の、つけて侍りけるあか紐のとけて云云。これ江次第に理髮一人とある物なるべし。

○猶これひとりはなどの給ふ——殿上人の物見る人を具しきたりて是一人はいれよと佗ぶるさまなり

○こと〳〵しくいひつる藏人——殿上人などにはきびしくいひし藏人の、后宮の御かたの人々には何ともえいはざりしと也。

八十

無名といふ琵琶の御ことを、上のもてわたらせ給へるを見なとして搔き鳴らしなどすといへば、引くにはあらず、緒などを手まさぐりにして「これが名よ、いかにとかや」なッど聞えさするに、たゞいとはかなく名もなしとのたまはせたるは猶いとめ

一無名といふ琵琶なれはも也
二無名と名をのたまはんよりは猶さも也

三 后宮の御かたへ也
四 しゆいさの詞也
五 笙也
六 僧都の詞也
七 我にたべよと也
八 琴也
九 しけいさ同心ならぬさま也
一〇 いひまぎらはす也
一一 僧都のしひて望む心はへ也
一二 しけいさの猶同心ならぬさま也
一三 后宮のしゆいさの心を察して
一四 笙の事也、管の類を皆ふえと云ふ也
一五 禁中の御事也、是いなかへ上の事を釋する詞也

枕草子

てたくこそ覺えしか。淑景舍などわたり給ひて御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都のきみの「それは隆圓にたうべ。おのれがもとにめでたき琴侍り。それにかへさせ給へ」と申給ふを、聞きも入れ給はで、猶こと事をの給ふに、いらへさせ奉らんとあまたたび聞え給ふに、猶物のたまはねば、宮の御まへのいなかへじとおぼいたる物をとの給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限りなき。此御笛の名を僧都の君も得知り給はざりければ、たゞうらめしとぞおぼしたゝめる。これは職の御曹司におはしましゝときのことなり。上の御前にいな替へじといふ御笛の候ふなり。御前に候ふものどもは、琴も笛もみなめづらしき名つきてこそあれ。琵琶は玄象、牧馬、みゝへ、渭橋、無名など、又和琴なども、朽目、鹽竈、二貫などぞ聞ゆ。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二つ、何くれとおぼく聞えしかど忘れにけり、「宜陽殿の一の棚に」といふことぐさは、頭中將こそし給ひしか。

○むみやうといふびはの——無名、拾芥云、東門院名物也、或說蟬丸琵琶、上東門院令レ坐二濟時亭一之時爲二回祿一燒失�。愚案せみ丸のといふ說もあれば、むかしより禁中に有りしゆゑ、定子の御方へももてわたらせ給へるなるべし。

○しけいさ——淑景舍女御也。后宮の御いもうと也。

枕草子

一六 玄上、又玄象
一七 牧馬
一八 イニゐて
一九 渭橋
二〇 無名、前ニ注ス
二一 和琴
二二 朽目
二三 鹽竈
二四 是よりさまざまの樂器をいふ也
二五 字多法師
二六 釘打
二七 葉二
二八 何やかやと也
二九 宜陽殿也
三〇 齊信卿にや

○ことのゝえさせ給へり——故殿とはかくれ給へる父君の御事也。中關白のしげいさへまゐらさせ給ふ也。

○僧都のきみ——勘物云、隆圓、隆家兄弟正曆四年權少僧都十五不レ經二律師一。寛弘八年四月權大僧都卌二長和四年二月卒卌七。

○いなかへじとおぼい——其笙を琴にはかへまじきとしげいしやのおぼしたる物をと也。江談云、不不レ替、是笙名也。唐人賣レ之、千石ニ買ハント云フ。イナカヘジト云ヒケレバ、以レ之爲レ名云云拾芥名物部にもあり。

○此御ふゑの名を——此不不レ替といふ笙の名を隆圓知り給はれば、此后宮の御詞の秀句をしらで、只御あいさつなきと恨み給ふ也。

○びははげんじやう——古今著聞云、玄象が撥面の繪はきえて久しく成りにたればしれる人なし。二條殿教通公仰せられけるは、玄象が撥面の繪やうは、馬上にてたまをうつ物、腰にたまをさして舞ひたる姿也下略禁祕抄云、或曰玄象呑二青鉢之水一所レ謂號二玄象一。又玄上宰相献二延喜帝一仍號二玄上一。但妙音院入道付二玄上說一歟。

○ぼくば——拾芥云牧馬與二玄上一一雙名物也下略。

○みゝへ——井上は拾芥に和琴の名也。老及翁の勘物に井手とあり。拾芥に在二宇治寶藏一云云琵琶也。

○ゐきやう――拾芥云、渭橋、三條式部卿琵琶、一名爲亮。
○くちめ――拾芥、和琴部云朽目或朽部。
○しほがま――老及勘物云、鹽竈和琴云云。　但拾芥名物部ニハ箏の名也。和琴にも此名あるか。可尋之。
○二貫――勘物、和琴云云。
○すゐろうこすゐろう――水龍、拾芥名物笛部云大水龍、江記云天曆御宇寶物小水龍同。
○うたのほうし――拾芥和琴部云、宇多法師寛平法皇貴重餘有二此名一。河海云宇多法師和琴名物也。以レ檜作レ之。一條院御時内裏燒亡之時燒失云云。
○くぎうち――拾芥笛部釘打。
○はふたつ――拾芥笛部葉二、江談曰號二朱雀門鬼笛一又號二青葉一歟。江談委。
○ぎやうでんの一のたな――よき樂器をほむる詞に頭中將のいへるなるべし。源氏若菜上云、此御琴宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴云云。細流云、宜陽殿昔は樂器、書籍等をおかるゝ所也。河海云　西宮抄云納殿累代御物在二宜陽殿一、恒例御物納二藏人所一。

八十一

一是より別の物
二がたり也
三退出也、かうろさぬ也
四みじかき灯臺也
五イとりいれ
六后宮の琵琶彈きておはせしがあらはなれ侵彈きやみて只にもたせ給ふ也
七后宮の御裝束也
八句
九紅の御衣にまた張りたる物なぞめしたる也
一〇髭琵琶也
一一傍也
一二ゐざやかなる也
一三かたはらよりほのかに見え給へる也
一四淸少のほそりちかき女房に也
一五淸少のいふ詞也、琵琶行の詞也、かしら書に有り
一六倡家のむすめなれば也、これは后宮なればいふ也

上の御局のみすの前にて、殿上人、日一日、琴笛ふきあそびくらしてまかゝて別るゝ程、まだ格子を參らぬに、大殿油をさし出てたれば、外のあきたるがあらはなれば、琵琶の御ことを、たゞざまにもたせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる。袿、又はりたるもあまた奉りて、いと黑くつやゝかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけてとらへさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、わづかに見えさせ給へるは、譬ふべきかたなくめでたし。近く居給へる人にさしよりて「なかば隱したりけんも得かうはあらざりけんかし。それは唯人にこそありけめ」といふを聞きて心地もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、「我は知りたりや」となん仰せらるゝと傳ふるもをかし。

○なかばかくしたりけんも――琵琶行云、千呼萬喚始出來。猶抱二琵琶一半遮レ面云云。　是かの倡家のむすめのありさま也。それをおもひよせていへるなるべし。

八十二

御めのとの太夫の今日日向へ下るに給はする扇どもの中に、片つ方は、日いと花やかにさし出てて旅人のある所、井手の中將の館などいふさまいとをかしう書きて、いま片つ方には京の方、雨いみじうふりたるに、眺めたる人など書きたるに

一 彼女房は髪色行をきゝしらざる也
二 中宮に直に中すにはあらず、人して申せしなるべし
三 彼の取次の人の也、清少に傳ふる也
一 是より別のものがたり也
二 目向
三 誰としらず
四 所也
五 后宮の御うた也
六 歌のやうにもあらず、后宮の自筆にあらはせし也
七 さやうの君を也
八 此乳母の目向へゆくをあやしみとがめたる詞也
一 歌の事也
二 てにをはなど也

酉さす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと

詞に御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそ得行くまじけれ。

○御めのとの大輔――后宮の御乳はなるべし。道隆公隱れ給ひ、伊周公左遷などの比、心みじかきめのとにて見捨てまゐらするにや。

○たまはする扇ども――むかしは餞別に扇をつかはせしにや。うちの隆家つくしへ下向の餞に扇をつかはして枇杷の皇太后宮

「涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」

新古今にあり。源氏夕顔卷にも、空蟬が伊豫へ下るに源氏君より扇をつかはされし事あり。

○あかねさす日に歌――赤根さすとは、日出づるに、赤き光さすをいふ也。日に向うてもといふに、日向をよみ給へり。ながめは長雨をそへて也。日向に行きても、我が都にて思ひ晴らすかたなく詠むる事を思ひ出でよと也。詞花集ニ入ル。

八十三

ねたきもの

「これより遣るも、人のいひたる返しも、書きて遣りつるのち、文字一つ二つなど思ひなほしたる。とみの物縫ふに、縫ひ果てつと思ひて、針を引き抜きたれば、はやう尻を結ばざりけり。又かへざまに縫ひたるもいとねたし。

○人のいひたる返しも――人の歌いひおこせしに返歌する事也。

○おもひなほしたる――かやうによむべきものをと思ひ出でたる也。

南の院におはします比、西の對に殿のおはしますかたに宮もおはしませば、寢殿に集りゐて、さうゞしければ、ふれあそびをし、渡殿に集りゐなどしてあるに、「これ只今、とみの物なり。誰も誰も集りて、時かはさず縫ひて參らせよ」とて、平ぬきの御衣を給はせたれば、南表に集りゐて、御衣片身づゝ、誰かとく縫ひ出づるといどみつゝ、近くも向はず縫ふさまもいと物ぐるほし。命婦の乳母、いととく縫ひ果ててうち置きつる、ゆだけのかたの御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへずまどひ置きて立ちぬるに、御せあはせんとすれば、はやう違ひにけり。笑ひ罵りて「これ縫ひたほせ」といふを「誰が、あしう縫ひたりと知りてかなほさん。綾などならばこそ、裏を見ざらん。縫ひたがへの人の、げになほさめ。無紋の御衣なり。なにをしるしにてか、なほす人誰かあらん。たゞまだ縫ひ給はざらん人になほさせよ」とて、聞きも入れねば、「さいひてあらんや」とて、源少納言、新中納言などいひなほし給ひし顏、見やりてゐたりしこそをかしかりしか。これは夜さりのぼらせ給はんとて、「とく縫ひたらん人を思ふと知らん」と仰せられし

三 急ぎる心也
四 もとより也

一 是よりかへさまにぬひたる物がたり也
二 西對也
三 みられたか公也
四 定子也
五 后宮よりのおほせ也、急に御用の衣裳ぞ也
六 平絹ヒラヌキにや
七 片身
八 弓長の方也、左のかたをいふ也
九 ぬひたがへたる也
一〇 はやくさしおきし也
一一 命婦のめのと陣していへる詞也

三手綱とあり
三命婦まけず口にいふ詞也
四命婦がさま也
五命婦があやまりをさまゝ〳〵いひなほしあいさつし給ふ也
六今夜参内あるべき其御料のぬひ物と也

か。

○みなみのゐんに――南院は四條の北壬生の西に有り。是忠親王の家なりし、又六條の北、烏丸の西にもあり。小一條院の御館と拾芥にあり。此草紙にいへるは、中關白道隆公の家ときこゆ。奥に道隆公の積善寺にて一切經供養の所にも出づ。

○ふれあそびをし――女房達立ちそひあそぶことなり。

○時かはさず――不二時替一時をかへず也。時をうつさずのこゝろ也。

○ちかくもむかはず――女房めん〳〵にはなれゐて縫ふさま也。人に見合させまじきのため也。

○命婦のめのと――后宮の御かたの人なるべし。

○御せあはせん――衣の背を合はせんとするなり。

○あやなどならばこそ、うらを見ざらん。ぬひたがへの人のげになほさめ――綾は紋あり、うらおもても見分けやすき物なれば、ぬひたがへたる人のあやまりにて、ぬひなほすべき事と也。

○ききもいれねば――ぬひなほせといふをききもいれぬ命婦のめのとのさま也

○源少納言、新中納言――此兩人系圖等考へがたし。

○かほ見やりて――兩人のいひなほさるる顔を清少の見やる也。下心命婦をあ

一是より又ねたきもの也
二はしり出でてたたきたきと也
三鋤
四提也
五制すべき男などのある折はさやうにほりてもえいなぬと也
六受領、國司の事也
七外よりきたる文をほひとりて也
八立也
九句

ざわらふ心あり。

見すまじき人に、ほかへ遣りたる文とりたがへてもて行きたるねたし。「げにあやまちてけり」とはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はずは、走りもうちつべし。おもしろき萩、薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたる者、鋤などひきさげて、たゞ掘りに掘りていぬるこそ、わびしうねたかりけれ。よろしき人などのある折はさもせぬものを、いみじう制すれど、「たゞ少し」などいひていぬる、いふかひなくねたし。受領などのきて、なめげに物いひ、さりとて我をばいかゞと思ひたるけはひにいひ出でたるいとねたげ也。見すまじき人の、文をひき取りて、庭におりて見たてる、いとわびしうねたく、追ひて行けど。すのもとにとまりて見るこそ、飛びもいでぬべき心地すれ。

○げにあやまちてけりとはいはで――使のあやまりて、こと所へもてゆきて、我あやまりたるとはいはで、清少のそこへもてゆけといひ付け給ひしと口かたくあらがふさま也。

○ながびつもたる者――萩などほりうゑんとてなるべし。爲仲朝臣、陸奥の任果てて、上洛の時、宮城野の萩を長櫃十二合にいれて入京の事。長明無名抄に有り。

○いみじくせいすれど――清少などやうの女どち有りて、いみじくせいしいへ

枕草子

一させる事なき事を女のはらだちて也
二女のさま也
三身じろき出づる也
四イしるて最可用
五女の同心せぬ也
六怨也
七ふすまなど身にまとひたる也
八女のさま也、漸くさむくなり

ども、おぢざるさま也。

○なめげに物いひ――受領の身のいきほひにおごりて無禮なる心也。

○さりとて我をばいかゞと――さやうに無禮にいふとも我を何とせんとおごりたるけしき也。清少は后宮の御方の人にて、受領をいやしむる事勿論也。されども受領はいきほひあれば也。

○おもひてゆけど――句、文をとりかへさまほしくて、追ひて行けども簾の外までは出でねば、すのもとに立ちどまりて飛びも出でまほしくて見ゐたるさま也。

すゞろなる事腹立ちて、同じ所にも寝ず、身じくり出づるを、忍びて引き寄すれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も「さはよかゝなり」と怨じて、かいくゝみて臥しぬるのち、いと寒き折などに、只一重ぎぬばかりにて、あやにくがりて。大かた皆人も寝たるに、さすがに起きゐらんあやしくて。夜の更くるまゝにねたく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも物うち鳴りなどして恐ろしければ、やをらまろびよりて、衣引きあぐるに、空寝したるこそいとねたけれ。「なほこそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

○しのびて引きよすれど――イしひて引よすれと、最可然也。夫の女を引きよすれど也。

枕草子

一くりごとをいふ也
二何ほどのはゞかりもあるまじき心なり
三さまなるべし
四句
五下々なさはねたる也
六句
七女のかたより忍びきたる人なるべし
八外也
九物の音しておそろしき也
十女のさま也
十一をゝこのふすまなど引きあゆよる也
十二男のさま也
十三男の詞
十四ねたき心をふくめたり

○人もさはよかッなりとえじて――あまり女の心こはければ、男もはらだちて、さあらば、よし〳〵と怨じうらみて衾など引きかづきて臥したる也。

○あやにくがりて――同所ながらに別々にそむきゐて、あやにくに寒くなりたれば也。

○さすがにおきゐらんあやしくて――人は皆ねたるに女一人おきゐたらんもさすがにあやしければ、其まゝふしたるさま也。ゐらんは居たらん也。「春たてば花とや見らん」も見たるらんの心也。其詞と同じ。

○やをらまろびより――寒く物おそろしさに念じ侘びてやがてそろりと男の方へころびよりて也。

○なほこそこはがり給はめなど――此上にも猶心こはくし給はんよと女をこらしめいふ也。

八十四

かたはらいたきもの　客人などにあひて、物いふに、奥の方にうち解けごと人のいふを、制せで聞く心地、思ふ人のいたく酔ひて、同じ事したる。聞きゐたるをもしらで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、傍いたし。旅たちたる所、近き所などにて下衆どものざれかはしたる。にくげなるちごを、おのれが

三 其兒のこゑをにせて也
四 其子のいひし事也
五 才智ある也
六 古人の名也
七 起也
八 琴の調子よく知りたる人也
九 いいたとう、最も早く也
一〇 句
一一 むすめのもとにかよはぬむこ也

心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲のまねにて、いひける事などかたりたる。才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえ顔に人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬ我が歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふも、傍いたし。人の起きて物語などする傍に、あさましううちとけて寢たる人、まだねも彈きとゝのへぬ琴を、心一つやりてさやうのかた知りつる人の前にて彈く、いとどしう。住まぬ婿の、さるべき所にて見に逢ひたる。

○かたはらいたき——はづかしくをかしく氣味あしき心也。

○せいせできく——客あるにないひそともいはで也。客の前にてはしからればば也。

○きゝゐたるをもしらで——其ぬしのききゐるをしらでうはさを陰ごとする也。

○旅だちたる所ちかき所——旅宿又は我がきく近所にて、下人のおのが同志男女ざれかはす也。

○おのれが心にかなしとおもふ——いとほしく思ふ心なり。伊勢物語に、ひとつごにさへありければ、いとかなしうし給ひけり云云。

○ことによしともおぼえぬわがうた——きく人はよしともおぼえぬおのが歌を也。又の義さのみよしともおぼえぬ清少のうたを、友達のあいさつに、人のほめしなど人にかたる也。但し初の義可然なり。

○まだねもひきととのへぬ琴——よくしらべとゝのへぬこと也。

○心ひとつをやりて——人もゆるさぬ不堪の所作を、おのが心ひとつにまんじて彈ずる也。

○いとどしう——前々のかたはらいたき物の品々をうけて、是らさへあるに、ましてなどいふこゝろ也。

一 さはりて也
二 くつがへりたる也
三 八雪抄云ゆたかにしづかなりといふ心也
四 つゝしみもなく也
五 兒にてもおとなにても也
六 イわすられて
七 双六也、前註
八 重目うちて人に筒をさられし也

八十五

あさましきもの　さし櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらんとこそ思ひしか。只夢の心ちして淺ましうあやなし。人のために恥づかしき事、つゝみもなく、ちごも大人もいひたる、かたらず來なんと思ふ人を待ちあかして、嘘、方にたゞいさゝか忘れて寢入りたるに、烏のいと近くかうと鳴くに、うち見上げたれば、晝になりたる、いとあさまし。てうばみに、どう取られたる。無下に知らず見ず聞かぬ事を人のさし向ひて、あらがはすべくもなく言ひたる。物うちこぼしたるもあさまし。「睹弓にわなくゝ久しうありて、外したる矢の、もて離れてことかたへ行きたる。

○さしぐしみがくほど——白氏文集樂府云、石上磨三玉簪八玉簪欲レ成　中

九 無實をしひていひおはする也
一〇賭弓、正月十八日也
一一ふるひ〳〵射たる也
一二しはしたもちてはなつ也

央折。

○ところせく久しくなどや――車などのゆたかなる物はくつがへるも、所狹く物につかへなどして、しづかにほどへてこそたふれめと思ひしに急にたふれて夢のやうにあさましと也。

○からすのいとちかくかうと鳴く――讀詞花集二十戲咲部

大僧正覺忠

「逢ふことはかたおとりする山がらす今はかうとぞねはなかれける」

○のり弓――河海抄云、賭射、清和天皇の貞觀二年正月十八日始レ之。賭弓は天子弓場殿に幸して弓を御覽ずる也。仲春の月弓を見る事禮記より出でたり。四府左右近衛左右兵衛の舍人射レ之、左右の大將射手の奏をとる。事果てて、饗を給ふ也。近衛の管領なる故也。猶江次第ニ委シ。雲圖抄に圖あり。

八十六

一其他可然儀式の折也
二かねて經營していつか其時なんどまちまうくる心也

くちをしきもの　節會、佛名に雪降らで雨のかき暮らし降りたる。節會、さるべき折の御物忌にあたりたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはること出できて俄にとまりたる。いみじうする人の子生まで年頃具したる。遊をもし、見すべき事もあるに、必ずきなんと思ひて呼びにやりつる人の、「さはる事有りて」などいひて

三面憂する女也
四相そふ也
五音樂也
六衣などの好ましう車よりこぼれ出でし也
七用意ありさま長閑に優なる也
八よき人也
九此方の優たるさまを見せまほしきに見ぬが口をしき也
一〇人にもかたらん物にもがな見せまはしきこと也

こぬ、くちをし。男も女も宮仕へ所などに、同じやうなる人もろともに寺へ詣で、物へも行くに、このもしうこぼれ出でて、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の馬にても車にても行きあひ、見ずなりぬるいと口をし。わびてはすき〳〵しからん下衆などにても、人にかたりつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

○せちゑ――正月の三節會、十一月豐明の節會など也。

○佛名――前ニ註ス。

○御物いみにあたりたる――御物忌には四方拜などの外は、主上出御なければ也。禁祕抄云、御物忌之時惣不レ出ニ御他殿舍中一。諸事於ニ簾中一有レ之。或出ニ御廣廂一不レ固之時例也。凡如ニ四方拜一者雖ニ御物忌一或出ニ御東庭一於ニ小朝拜一不ニ出御一。是匡房卿申。依レ敬ニ神明天道一也。然者如ニ御禊一多出ニ御廣廂一也。同記云元三御物忌如ニ女官後取等一參籠。他人外宿候ニ殿上一。不レ參ニ御前一也下略。

○みやづかへ所などにおなじやうなる人――宮仕する所などにて位おとらぬ人なり。

○わびては――あまり見せまほしきにうち侘びてはの心也。

○すき〳〵しからんげすなどにても――物ずきなる下種などにても見せまほしきと也。下種に見せんは本意ならねど、さるべき人の見ざりしが口をしさにう

ち佗びていふ詞也。

八十七

五月の御精進のほど、職におはしますに塗籠のまへ、二間なる所をことにしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて暮らす。つれ〴〵なるを、郭公の聲尋ねありかばやといふを聞きて、我も〳〵と出てたつ。賀茂の奥に某とかや、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし、「そのわたりになん、日毎に鳴く」と人のいへば、「それは日ぐらしなり」といらふる人もあり。そこへとて五日のあした、宮づかさ車のことひて、北の陣より、五月雨はとがめなき物ぞとて、さしよせて四人ばかりぞのりて行く。羨しがりて、「いま一つして同じくは」などいへば、「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、情なきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人多く騒ぐ。「何事するぞ」と問へば、「てつがひにて眞弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて車とゞめたり。右近の中將みなつき給へるといへど、さる人も見えず。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやくすぎよ」とて、行きもて行けば、道も祭の頃思ひ出てられてをかし。

○五月の御さうじのほど――年三とて正五九月には精進などする事也。河海云、長齋經云若有二善男女等一修二年三之齋戒一忽脫二諸難等一獲二殊勝福利一。又曰天帝

一是より清少の郭公聞きに行きし物語也
二后宮職也
三塗籠
四細流云、二間本尊など安置する所なるべし。猶禁錄抄に委し
五例のやうならでめづらしと也
六五月朔日也、さみだれなるべし
七普都に郭公大切なりしにやハ清少に催されて也
九何どやらんと也
一〇郭公なくと也
一一郭公にはあらで蝉にこそあれとこたふる人も

枕草子

有りしと也
一二后宮職の太夫以下車を仰せ付くると也
一三大内裏の朔平門也
一四女房の乘車五月雨にはとがめなしと也
一五車今一つして也
一六我らもゆかさほしきと也
一七后宮の御ゆるしなきにや
一八清少のさま也
一九馬場
二〇車副などのこたへし詞也
二一左近にや不審
二二皆也
二三乙殿屋に中少將着座の事にや
二四中將めきし人もなしと也

以二正月五月九月一巡二向南列一註二記衆生作業一云云。

○ぬりごめの――稱名院云、塗籠は帳臺のやうにしておく所也。文庫などのやうなる體也。柳卷にあり。

○にくき名ぞきこえし――かささぎの橋などやさしき名にもあらで聞きにくき名の橋ありしと也。

○北のぢん――拾芥云、縫殿陣朔平門云二北陣一。

○さみだれはとがめなき物ぞ――よのつねは乘車の法度あれども、五月の雨中にはとがめなしと也。延喜式云、凡乘車出二入宮城門一者妃以下大臣嫡妻已上限二宮外一四位已下及內侍者聽レ出二入一土門一但不レ得レ至二陣下一云云。この式を見れば北の陣より乘車つねはゆるさざるなるべし。

○むまばといふ所――河海云、左近馬場は一條西洞院、右近馬場一條大宮也。

○てつがひにてま弓いる也――花鳥餘情云、手結は左近の直手結也。五月五日にあたれり。又云、てつがひは馬弓の時二人づゝつがひて射る事歟。但未レ考レ之云云。猶伊勢物語ひをりの註諸抄に委し。袖中抄云、後頼朝臣法性寺入道殿にて、五月五日の心を詠みけるに「長き根も花の袂にかほる也けふや眞弓のひをりなるらん」。

○右近の中將みなつき給へり――花鳥云、乙殿屋とて左右近の馬場にあり。五

枕　草　子

一 明順にや、高階成忠の男、后宮定子の御母、高内侍の兄也
二 田舎めきたる也
三 省略したる也
四 實九里、簾にや、其製可尋之
五 わざとめきたる也
六 家也
七 はかなくそさうたる心也
八 イニらうめきてはしちかなれど
九 后宮にきかせまゐらせぬ事と彼のうらやましがりし人々にもきかせぬをおもふと也
一〇 田舎めきし所にしたがひてはと也

月の騎射の時、中少將着座す云云。

かういふ所にはあきのぶの朝臣家あり。そこもやがて見んと云ひて、車よせて降りぬ。田舎たち、事そぎて、馬のかた書きたる障子、網代屏風、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出てたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに鳴き合ひたるほととぎすの聲を、口をしう御前に聞し召さず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。所につけては、かゝる事をなん見るべき」とて、稲といふもの多く取り出でて、若き女どものきたなげならぬ、其わたりの家のむすめ女など率て來て、五六人してこかせ、見も知らぬ綠るべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふに郭公の歌よまんなどしつる忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして、物食はせたるを、見入るゝ人なければ、家あるじ「いとわろく鄙びたり、かゝる所にきぬる人は、ようせずは、あるもなど責めいだしてこそまゐるべけれ。むげにかくては其人ならず」などいひて、とりはやし「此下蔵は手づから摘みつる」などいへば、「いかで、女官などのやうにつき並みてはあらん」などいへば、取り下して「例の這臥にならはせ給へる御前達なれば」とて、とりおろしまかなひ騒ぐほどに「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車に乘るに「さてこの歌はこゝにてこそよまめ」といへば「さばれみちにても」などいひて、卯花いみじく咲きたるを折りつゝ、車の簾

枕　草　子

一 將の字也、誘引する也
二 紐絲などを繰引かせて見するなるべし
三 誰くはざる也
四 あきのぶの詞也
五 あしくしては也、若は也
六 イなを最可然
七 無下にかやうにおくしては也
八 人とは見えぬ心也
九 清少の詞也
一〇 着並也
一一 蔵を取りおろしまかなふさま也
一二 這臥也、身を自由にありならふ心也
一三 車ぞひなどのおごろかす詞也
一四 前に催しし郭公のうた也

そばなどに長き枝を賛きさしたれば、たゞ卯の花がさねを、こゝにかけたるやうに見えける。供なるをのこどももいみじう笑ひつゝ、網代をさへ突きうがちつゝ、こまだし〳〵と插し集むなり。人も逢はなん」と思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。

○馬のかたかきたるさうし――禁中の下侍、豪盤所などに馬形の障子あり。禁秘抄に馬形號二波爾馬一也とある是也。かやうの事をなぞらへたる障子なるべし。

○あじろ屏風――椎本卷に、山里びたるあじろ屏風と有り。河海云、普通の網代にて張りたる屏風也。昔は山莊などの古めかしき調度には定る事也。漆骨片面を張りて、細組にて閉合せたる物也。還屏風といふ也。

○はしちかくあさはかなれど――端近く淺くはかなき住居なるべし。イ本ニらうめきてはしちかなれどとは廊などのやうにて、奥ふかからねど面白き家居とも也。

○いねといふ物――清少などへ馳走に去年の稲取出しこかせて見する也。源氏の須磨の卷に、三月ばかりに、馬に稲を飼ひし事あり。古は秋の稲を其まゝ置きしとみゆ。

○からゑにあるやうなる――唐繪などに書きたるごとくうるはしき懸盤なるべし。

三此所にてよみてこそ規模ならめと也
四かたはら也
五葉指也
六車の綱代なり
七突鬢
八此うの花車を見せたき心也
九いやしゆかなる也
一〇心もなゆかなる者ども也、藏人には行き逢はざる也
一一行きあふ心也

○ひなびたり――田舍ものめきたる心也。憶してくはざるをいさむる詞也。
○あるものなどせめ出して――ある物を何にても出せとせめ出でてもこそくひ給はめと也。イなをもとは猶も出せと也。可然か。
○とりはやし――とりもてはやす也。馳走するさまなるべし。
○つきなみてはあらん――着竝也。女官などの豪盤につきならびてくふやうにはいかでかあらんと也。行儀うるはしくはえくふまじきと也。恥ぢたる心にや。
○さばれみちにても――さもあらばあれ、歸る道すがらもよむべしと也。
○うのはながさね――卯花重。おもて白くうら青き夏の衣也。
○こゝまだし〳〵とさしあつむ――こゝにまだ挿したらず〳〵と卯花をひしとさしたる也。
○たまさかに見ゆるいと口をし――前にさるべき人の馬にてもくるまにても行きあひ見ずなりぬるいとくちをしと、此段の題の下にていひし首尾なるべし。
一一近う來ぬれば、さりともいとかうてやまんやは、此車のさまをだに人に語らせてこそやまめとて、一條殿のもとにとゞめて、「侍從殿やおはします。郭公の聲聞きて、今なんかへり侍る」といはせたる。使、「只今まゐる。あが君〳〵」となんの給へる。さぶらひにまひろげて、指貫奉りつ」といふに、待つべきにもあらずとて、走らせて土御門さまへやらするに、一二いつのまにか裝束しつらん。帶は道のまゝに結ひて、「しば、〳〵」と追ひ來る。供に、侍、雜色、物はかで走るめる。とくやれどいとゞいそがしくて、土御門にきつきぬるにぞ、嘲き盛ひておはして、まづ此車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝの人の乘りたるとなんさらに見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもも興じ笑ふ。「歌はいかにか。それ聞かん」との給へば「今御前に御覽ぜさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「などか、こと御門のやうにあらで、此土御門しも、うへもなく造りそめけんと、今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らんずらん。こなたざまは、たゞ後れじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを、あういかんこそいとすさまじけれ」との給へば「いざ給へかし。內へ」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか。」「取りにやり給へ」などいふにまめやかに降れば、笠なきをのこども、只ひきに引きいれつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見返りうち見返り、此度はゆる〳〵と物うげにて、卯花ばかりを取りおはするもをかし。

○此車のさまをだに人に――歌よみて人に語り傳へさせむと思ひしに、よまざれば、此車の卯花の風流をだにと也。前に人にかたりつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりといひし首尾なるべし。

○一條院のもと――拾芥云、一條院、一條南大宮東二町、爲二法住寺大臣爲光家一。この爲光を恒德公と云ふ。

一一公信也
一二清少の使が侍從どのの返事を云ふ也
一三我君〳〵まら給へとの心也
一四殿上などなるべし
一五問撿
一六侍從どのに指貫をきせ申すこと也
一七侍從殿の事也
一八雜也、急々に追ひ來る也
一九供也
二〇鐵色
二一清少の車を也
二二侍從どの也
二三卯花さしたるゆゑ也
二四侍從の詞也、物くるほしきさまとの心也
二五侍從の供の人々也
二六侍從のこひ給ふ也、うたはい

かゞよみ給へるぞと也
二清少のこたへ也
三侍從の詞也
四助字也
五是も侍從の詞
六清少の詞、いざおはせよかし
七參内あれと也
八侍從の詞也
九句
一〇清少の詞也、冠袍などとりにと也
一一まことに雨いたくふる也
一二侍從の家より也
一三侍從のさま也
一四清少に別れがたゆなるさま也

○侍從殿――勘物云、公信恒德公六男、母謙德公女、長德元年九月十九日侍從。
○つちみかどざまへ――土御門の方へ也。正親町の南。鷹司の北にて、東西の小路也。四位以下内侍など乘車して出入する門也。延喜式前ニ注ス。
○あへぎまどひて――喘息迷也。いきもつぎあへず急ぎ來給ふ也。
○猶おりて見よ――我かく笑ふゆゑを、清少も下りて見よと也。
○いまおまへに御覽ぜさせて――清少の歌はよまざりし事をかくしあざむきていへる也。先いま后宮に見せ申してこそ、侍從殿にも見すべけれと也。
○こと御門のやうにあらで――他の御門には屋根有るに、此土御門にしも屋根もなく作りけんと也。けふ雨宿りすべきやうもなくてにくきとなるべし。
○こなたざまはたゝおくれじ――こゝへ追ひ來るは、追ひつかんと思ふばかりにて、人目も思はず走りきたると也。
○あういかんこそいとすさまじけれ――あうは噫と嘆じたる詞也。すゞ〳〵と歸りいなむこそ無興ならめと也。
○ゑぼうしにてはいかゞ――侍臣の參内は、衣冠か、儀式の折は束帶なるべし。今侍從どのは直衣烏帽子なり、下は指貫也。
○かさなきをのこどもは――清少の供なる笠もたぬ男ども、雨をいとひて車を急ぎて土御門を引きいれし也。

一后宮の御前へ清少のかへりまゐりし也
二怨也
三歌は何としたると后宮の問ひ給ふ也
四后宮の御詞也
五殿上人などもきかんにおもしろき歌なくては無興と也
六清少の心也
七歌の談合也、かの諸共にゆきし人々となるべし
八おもてしろくうち青き紙にや、又卯の花をゑがきし也
九侍從歌
一〇便の返歌をまたんと也
一一后宮の御詞なり
一二清少の詞也、是も智茂へ行き

さて參りたれば、有樣など問はせ給ふ。恨みつる人々怨じ心うがりながら、藤侍從、一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「さていづら、歌は」と問はせ給ふ。「かう〳〵と啓すれば、口惜しの事や。うへ人などの聞かんに、いかでかをかしきなくてあらん。其聞きつらん所にてふとこそ詠ましかし。あまり儀式事さめつらんぞあやしきや。こゝにても詠め。いふかひなし」などの給はすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合はせなどする程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて、卯花の薄樣に、

「ほととぎす鳴く音たづねに君行くと聞かばこゝろをそへもしてまし」

返し待つらんなど、局へ硯取りにやれば「只これしてとくいへ」とて御硯の蓋に、紙など入れて賜はせたれば、「宰相の君書き給へ」といふを、「なほそこに」などいふほどに、掻きくらし雨降りて、かみもおどろ〳〵しう鳴りたれば、物も覺えず、たゞおろしにおろす。職の御曹司は、しとみをぞ御格子にまゐり渡し惑ひしほどに、歌の返事も忘れぬ。いと久しく鳴りて、少し止む程は暗くなりぬ。唯今なほ其御返事奉らんとて、取りかゝるほどに、人々上達部などかみの事申しにまゐり給ひつれば、「西表に出でて、物など聞ゆるほどにまぎれぬ。人はた、さして得たらん人こそ知らめとて止みぬ。大方此事に宿世なき日なり、どうじて」「今はいかでさなんいきたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなど、それいきたりし人どもの云

し人なれば也
一三宰相こそ也
一四鬱々しく也、おそろしき也
一五御格子をおろすなるべし
一六神鳴のやむと也
一七清少も人々あへしらふ也
一八返事のこと也
一九將也
二〇歌に縁なき目こと也、賀茂にてもよまざれば也
二一后宮の御心なるべし
二二歌よむまじと思ふにこそと也
二三后宮の無興に思し召す也
二四清少の詞也
二五時過ぎたる心也、當座にこそよまゝよみてめこの心也
二六后宮御詞也、さやうに時過すべき事ならじと也

ほざらん。されどもさせじと思ふにこそあらめ」と物しけに思召したるもいとをかし。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」などの給はせしかば、やみにき。

○うらみつる人々——前にいま一つしておなじくはなどうらやみたる女房達也。

○えじこゝろうがりながら——清少の引具しゆかざりしを怨じながら也。

○かう〳〵とけいすれば——かやう〳〵の首尾にて歌はよみ侍らずと申しあぐる也。

○其きゝつらん所にてふとこそ——歌よまば當座こそよかるべけれと也。其郭公きゝたる所にてこそよむべけれと也。

○あまりぎしき事さめつらん——儀式也。あまり儀式めきてよまんとするによりて歌のおそければ興さめつらんと也。

○ありつるうの花に——前に卯花ばかりをとりおはするとありし首尾也。

○ほととぎすなくね歌——清少の郭公尋ねゆくととく聞きたらば、我心をそへ事つけてやるべき物をと也。

○宰相のきみ——后宮の女房也。おくに北野の三位のむすめとあり。輔正卿の女にや。

○そこに——足下なり。猶清少に返し書き給へとなり。

○しとみをぞみかうしにまゐりわたし——格子のうへにしとみをおろしたる也和名云、蔀、周禮注云、蔀、音部字亦作レ部、覆レ暖障レ光者也。

○神の事申しにまゐり——雷の御見まひに參り給へると也。

○人はた、さしてえたらん人こそしらめとて——清少ならぬ人は又、其歌を得たる清少などこそ返歌のことはしるべけれ。こなたはしらずとて返歌もせざりし也。

○どうじて——動也。動轉しての心也。

○いまはいかでさなんいきたりしとだに人にきかせじ——今はさやうに郭公ききにゆきしといふ事をだに沙汰せじと也

○などそれいきたりし人どものいはざらん——今とてもいかでか賀茂へ行きし人々の歌よまであらん。詠むべき事と也。

○すさまじかるべき事かは——かやうに時過すべき事かは、當座によまで無念の由をの給へば、いまおくれてよむべきにもあらでやみたると也。

一賀茂へゆきし事也
二賀茂の家あるじの云ひたる事也
三后宮の御詞也
四后宮

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君「いかにぞ、手づから折りたるといひし下蔵は。」との給ふを聞かせ給うて「おもひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙の散りたるに、

下蔵こそ戀しかりけれ

五 上句を申せと也
六 清少納言
七 后宮の御詞也
八 是ほど郭公を思ひすてし事よと也
九 清少の詞也
一〇 其座には侍らじとおもふと也
一一 此人の歌こそよけれと也
一二 末々とはいへど元輔が女なれば也
一三 さしてひいでたる事もなくて也、清少の卑下也
一四 最初也、人よりさきにさし出でたる心也
一五 元輔のためおもてぶせと也
一六 后宮也
一七 后宮の御ことば也、さやうならば、心次第也

と書かせ給ひて「本いへ」と仰らるゝもをかし。

郭公尋ねて聞きし聲よりも

と書きてまゐらせたれば、「いみじううけばりたりや。八かうまでだにいかで郭公のことをかけつらん」と笑はせ給ふも恥しながら、「何か。この歌すべてよみ侍らじとなん思ひ侍る物を。物の折など人のよみ侍るにも、『詠め』など仰せらるれば、得さぶらふまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌を詠み、秋は春のを詠み、梅の折は菊などを詠む事は侍らん。されど歌よむといはれ侍りし末々はすこし人にまさりて、『其折の歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子なれば』などいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。一二露取り分きたる方もなくて、さすがに歌がましく我はと思へるさまに、最初に詠み出て侍らんなん、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、一六笑はせ給ひて、「さらば、たゞ心にまかす。我はよめともいはじ」との給はすれば、「一八いと心やすく成り侍りぬ。今は歌の事思ひかけ侍らじ」などいひてある比、

○おもひ出づることのさまよ——郭公歌などの事はおもひも出でずして、只くひたりし物を思ひ出でしよと也。

○したわらびこそ——清少や宰相などの心ををしはかりて后宮の御たはぶれ也

○うけばりたりや——孟津抄に諾、承諾。はゞかる事もなきをいふ也云云。清

歌よみそゝと也
一八 清少の詞也

少のあまりはゞかりなく嶽をしたふ事をたはぶれての給ふ也。

○かけつらん——いひつらんといふとおなじ詞也。大和物語に「見きとないひそ人のきくに」とある歌を、源氏帚木卷には、見きとなかけそとかけり、同じ心なればなるべし。

○わらはせ給ふもはづかしながら何か——イ本もはづかしながら何かといふ詞なくて、わらはせ給ふ此うたすべてと有り。

○いかでもじかずしらず——卅一字のかずもしらず、時節たがふ事もしらぬやうに一向に此道しらぬにはあらねどもとの心也。

○うたよむといはれしすゑ〳〵——清少は彼深養父が曾孫元輔がむすめなれば也。

○なき人のためいとほしく——元輔さしもの歌仙なりしに、其むすめとして、ことなる事なくは父のおもてぶせなれば也。

一 庚申也
二 伊周公康申の御用意也
三 女房達歌よまんけしきに色めく也
四 清少也
五 清少のうたよまんともせぬ也

康申せさせ給ひて、内大臣殿いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くるほどに、題出して、女房に歌よませ給へば、みなけしきだちゆるがし出すに、宮の御前に近く候ひて、物啓しなど、こと事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌は詠まで離れゐたる。題とれ」との給ふを、「さる事承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず。」「ことやうなる事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給

六内大臣伊周也
七詞也
八清少の詞也
九伊周公の詞也、格別なる事と也
一〇皆に御ゆるしにやと后宮へ問ひ給ふ詞也
一一是より清少に伊周の詞也
一二清少のありさま也
一三后宮より清少に御文也
一四后宮の御うた
一五伊周公の問ひ給ふ也
一六清少御返し也
一七つゝしむ心也、元輔の名ををしむ心なるべし
一八よみ出しまるり来んと也
一九后宮へ申上ぐる也

ふ。いとあるまじき事也。」「よしこと時は知らず、今宵は詠めしなと責めさせ給へと、けぎよう聞きも入れでさぶらふに、こと人とも詠み出して、よしあしなど定めらるゝほどに、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

元輔が後といはるゝ君しもや今宵の歌に外れては居る

とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや。いみじく笑へば「何事ぞ〳〵」と大臣もの給ふ。

「その人の後といはれぬ身なりせば、今宵の歌はまづぞよまましつゝむ事さぶらはずは、千歌なりとも、是よりぞ出てまうで来まし」と啓しつ。

○かうしんせさせ給ひて――庚申を守る事也。庚申の夜ねれば三尸とて悪しき蟲、人の身中に入りて、疵瘵の病をなす也。其故に今宵ねざる事、古今醫統にもあり。拾芥云、庚申夜誦、彭侯子彭常子命兒子、悉入幽冥之中、去離我身。袋双紙云、庚申せで寢ル誦文「しゃ蟲はいねや去りねや我床をねたれどねぬぞねゝどねたるぞ」

○さる事うけ給はりて――前に后宮のさらば心にまかす。我はよめともいはじとのたまひし事也。さやうの御詞承りてと也。

○けぎようきゝもいれで――氣清也。いさゝかもうたよむべきけしきなく、潔白にとりあはざりし也。

一これより后宮の御前にて有りし市井のものがたり也
二清少也
三后宮の清少に也
四第一也
五是より第一ならずはここはせ給ふ心を註釋する詞也
六清少目比いひし詞也
七第一の人にてあらんと也
八紙也、清少に

○もとすけがのちと――清少は元輔がむすめとして今夜うたよまであるはいかゞとの心也。

○その人の後と――前に、なき人のためいとほしく侍るなどいへる所の心なり。

○是よりぞ出でまうでこまし――つゝしむ事なくばよめとの仰せなくとも此方よりさし出でて千首も讀み侍らんと也。

八十八

御かたゞ〳〵、君達、うへ人など、御前に人多くさぶらへば、廂の柱に寄りかゝりて、女房と物語してゐたるに、物を投げ給はせたる。あけて見れば、「思ふべしやいなや。第一ならずはいかゞ」と問はせ給へり。御前にて物語などするついでにも、「すべて人には、一に思はれずは、更に何にかせん。只いみじう憎まれあしうせられてあらん。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん」などいへば「一乘の法なり」と人々笑ふ事のすぢなンめり。筆、紙給はりたれば、「九品蓮臺の中には下品といふとも」と書きて參らせたれば「むげに思ひ屈じにけり。いとわろし。いひ初めつる事は、さてこそあらめ」との給はすれば、「人に從ひてこそ」と申す。「それがわろきぞかし。第一の人に、又一に思はれんとこそ思はめ」と仰せらるゝもいとをか

答させんと也
九名誉のこたへ也
一〇后宮の御詞
一一屈也、あまりおもひくづをれたる事と也
一二清少詞
一三后宮の御詞也
一四腑心は高くこそもつべけれと也

○御かた〳〵君達――后宮の御妹の御かた〳〵、伊周公等の君達なるべし。イ本しきにおはします比八月十四日の月あかき夜などいふ事此段の上に有り。

然れども語かさなりてよろしからねば今不レ用也。

○思ふべしやいなや――后宮よりなげて給へりし物に書き給へる詞也。清少我を思はんやとの戯也。

○だい一ならずはいかゞ――第一の人に清少をおもはずは、清少も相おもふまじくやとの心也。

○二三にては――第二第三に思はれては死すともあるまじきと也。

○一乗の法なりと――是方便品の文の心也。一乗の法とは、法華經の事也。最爲第一の經なれば、彼清少の第一に思はれん二三にてはあらじといふにつけて、人々なぞらへいひし事の筋を、今后宮の第一ならずは如何と仰せらるゝ也。法華經方便品云、十方佛土中唯有二一乗法一無レ二亦無レ三除二佛方便説一但説二無上道一

○九品蓮臺の中には――朗詠の詞也。后宮の御恵みにかゝらば、たとひ下品にても満足と也。極樂寺建立願文慶保胤「十方佛土之中以二西方一爲レ望、九品蓮臺之間雖二下品一應レ足。」極樂に生まるゝに、其人々によりて、上品上生に生まれ、或は上品中生上品下生、或は中品上生などすべて九品の淨土ある事、觀無

一是より別の事也、隆家の事也
二隆家のみづからの給ふ詞也
三扇の骨也
四大かたの心也
五かくよき骨に大かたの紙は張るまじければ然るべき紙を尋ぬると也
六后宮の御詞也
七隆家の詞也、見事なるほねと也
八かほどのほねはなしと也
九言高く也、高上の心也
一〇清少の詞也
一一海月の骨はまれなる心也
一二隆家の詞也、此清少の戯言の面白きをうらや

量壽經に委し。

○いひそめつる事はさてこそ――始め第一に思はれんといふほどならば、後まで其心をたがへずこそあるべけれと也。下品といふともといへるをとがめ給ふ御たはぶれ也。

○人にしたがひてこそ――なみ〳〵の人にこそ第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と也。后宮のいとも忝きをいはんとて也。

八十九

中納言殿まゐらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに「隆家こそいみじき骨を得て侍れ。それを張らせて參らせんとするを、おぼろげの紙は張るまじければ、もとめ侍る也」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。更にまだ見ぬ骨のさま也となん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と言高く申し給へば「さて扇のにはあらで海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家が言にしてん」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、傍いたき物のうちに入れつべけれど、人ごと「な落しそ」と侍れば、いかゞはせん。

○くらげのなり――増賀上人の歌「みつわさす八十餘りの老の波海月のほねにあひにけるかな」

枕草子

一是亦別の秀句のものがたり也　二中宮へ勅使にまゐりし也、藏人なれはも也　三いつも勅使にて褥を出さるれはも也　四信經憚りて褥にゐざる也　五清少の詞　六料也、信經をおかんための褥なるを誰がためぞと也　七是より信經が詞也　八しさねよゞれんと也　九清少の秀句をいへる詞也　一〇句　一一信經が詞也　一二自贊めきし事なれはも也　一三餘也　一四書落しそ也

○かたはらいたき物の内に――自贊めきたる事いふは此双紙のかたはら痛き物の中に入りて、こゝには書くまじけれど、人毎にな書落しそといへばせんかたなくて書きしと也。

九十

雨のうちはへ降るころ、今日も降るに、御使にて、式部の丞信經參りたり。例の褥さし出したるを、常よりも遠く押しやりて居たれば、「あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて、「かゝる雨にのぼり侍らば、足かたつきて、いとふびんにきたなげになり侍りなん」といへば「など。せんぞく料にこそはならめ」といふを、「これは御前にかしこうおほせらるゝにはあらず。信經が足かたの事を申さざましかば、えの給はざらまし」とて、返々いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身讃めかなと傍いたく。

○式部のぜうのぶつね――藤原信經は中納言兼輔の曾孫、雅正の孫、陸奥守爲長の子也。勘物云、信經長徳元年正月十一日藏人、三年正月式部丞云云。

○せんぞくれう――氈褥料にや。順和名云、褥氈海也。今案毛席也。俗獺の皮にて作ると云云中略記。

せんしよくを、せんぞくといひて、足のよごれし事をいふに付けて、洗足料に

枕草子

一是亦別段也、はやうは昔こいふにおなし　二時柄が詞也、是後の音にきこえしゑぬたきかと也　三名は珍しくて形はさも見えぬとの心也　四ゑぬたきが詞也　五めづらしく見ゆると也　六敵也、相手也　七撰也　八是より清少の時がらに此事をいふ詞也　九清少をさしていふ也、清少にも信經がいはせし事ぞと也　一〇前段も自讃の事此段もおなじく自讃なれはも也　一一例の書きのこしたる筆法也

こそならめと秀句に云ふ也。

○かたはらいたく――かたはら痛く人のいひしと含めし詞也。

九十一

はやうおほきさいの宮に、ゑぬたきといひて名高き下仕なんありける。美濃守にて失せにける藤原の時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて「これや此高名のゑぬたき。などさも見えぬ」といひける。返事に、「それはときがらも、さも見ゆる名也」といひたりけるなん、敵にえりても、いかでかさる事はあらん。殿上人、上達部までも興ある事にの給ひけける。又、「さりけるなめりと今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。「それ又、時がらがいはせたるなり。すべて題出しがらなん、ふみも歌もかしこき」といへば、「げにさる事ある事なり。さらば題出さん。歌よみ給へ」といふに、「いとよき事、一つはなにせん、おなじうは數多を仕ふまつらん」などいふ程に、御題は出でぬれば、「あな恐し。まかり出でぬ」とて立ちぬ。「手もいみじう、賃名も假名もあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなんある」といふもをかし。

○おほきさいのみや――勘物云、皇后宮安子康保元年四月廿四日崩卅八云云。村上の后、九條右大臣師輔の女。皇太后宮は贈官也。

枕草子

九 時柄が詞也、えぬたきが答も又時がらがいはせしと也
一〇 詩なり
一一 よき事也
一二 清少の詞也、題がらの理有ること也
一三 時柄が詞也
一四 一首にてはおかじと也
一五 后宮などの御出題にや
一六 時がらやがてにゆたる也
一七 是より時がらがにゆたることはりをいふ也
一八 かやうにまかりにゆてあると時がらがいひし也

○美濃守にてうせにける藤原のときがら――勘物云、時柄康保五年正月廿八日美濃守。長保二年五月三日藏人兵部丞、被レ補二作物所別當一。

○かたきにえりても――態と相手に撰ひ出でても、いかでさやうに珍名出で合ふべきぞと也。蒙求に陸機、荀隱に出で合ひて、雲間陸士龍と名のりしに、荀隱、日下荀鳴鶴と名のりしに似たり。

○又さりけるなンめりと今迄かくいひ傳ふるはと――今迄もかく世に云ひ傳ふるは、此兩人の珍名の問答、實にさやうに有りけるなるべしと也。

○それ又時がらが――此えぬたきが答へも、前段の清少の秀句を、のぶつねがいはせしといひしごとく、是も亦時がらがいはせしといふ也。

○ふみも歌もかしこきと――詩歌のよきも題次第なるがごとく、えぬたきが答へも時がらが詞によりてぞと利口するさま也。

○げにさる事ある事也――是は時がら歌えよまぬ人なれば、題出して歌よめとて物うがらせんとていへる詞也。

○手もいみじう――手跡いたく惡しき事也。

春曙抄五終

枕草子

一 是より時がらが手もいみじうあしくかく事の物がたり也
二 蛇繪のもやうのごとくせよと也
三 異名の樣也
四 文字也
五 あしき事也
六 清少の見付て也
七 ときがらが異名の傍に也
八 清少の書きし詞也
九 時柄大いに腹立ちて清少をうらみし也

枕草子春曙抄　卷六

九十二

作物所の別當するに比、誰がもとにやりけるにかあらん、物の繪樣やるとて「これがやうに仕るべし」と書きたる異名のやう、文字の世に知らずあやしきを見つけて、それが傍に「これがまゝにつかうまつらば、異やうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見て、いみじう笑ひけるに、大腹立ちてこそ怨みしか。

○つくも所――作物所、細流云、金銀細工の所なるべし。拾芥云、作物所在二進物所西一有二別當預熟食一。時がら此の別當に補せられし比の事也。勘物前ニ注ス。

○物のゑやうやるとて――細工人のかたへ時柄繪やうなどして仰せ付くる也。

○これがまゝにつかふまつらば――如此見苦しき手跡のまゝに細工せば、異風に惡しからんと也。時柄が手跡をわらはんとていへる也。

九十三

一これより別段也
二三條院の御事也
三いかなる事にかとの心也
四定子の御事也
五后宮へしゆいさのおはさんと也
六しゆいさのおはしたり
七いくばくもなく也
八十一日の也
九隔子あゆおれたす也
一〇職御書司也
一一あつたゝみなるべし
一二絵衣の比なれば也
一三まゐらせし也

枕草子

淑景舎東宮に參り給ふ程の事なゝど、いかゞはめでたからぬことなし。正月十日に參り給ひて、宮の御方に、御文などはしげう通へど、御對面などはなきを、二月十日宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房などもみな皆用意したり。夜中ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなくて明けぬ。登華殿の東の二間に御しつらひはしたり。つとめて、いととく御格子參り渡して曉、殿、うへ、一つ御車にて參り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東にへだてて、北西に立てて、御畳、褥、うち置きて、御火桶ばかり參りたり。御屏風の南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。

○しげいしや東宮に――中關道隆公の御むすめ、三條院の春宮にておはせしころまゐり給ひて、淑景舎におはする事也。榮花物語見はてぬ夢の卷に「かくて攝政殿をば帝おとなびさせ給ひぬれば、關白殿と聞えさす。中姫君十四五ばかりにならせ給ひぬ。東宮にまゐらせ奉り給ふありさま花々とめでたし。さてまゐらせ給ひぬれば、宣耀殿はまかで給ひぬ。淑景舎にぞすませ給ふ。何事もかゞやくやうなれば、いはむかたなくめでたし云云。是正暦三年の事也。

○とうくわでん――后宮の淑景舎に御對面の御しつらひの御殿なり。和名云、登花殿は弘徽殿の北にあり。

○殿うへひとつ事にて――殿は中關白道隆公也。うへは中關白殿の北方高内侍

一后宮の御髪なゞつくろふ事也
二后宮の清少に問ひ給ふ也
三清少の詞也
四句
五しゆいさのうしろはかり見しと也
六后宮の御詞也
七清少の心也
八いつか淑景舎を見奉らんと也
九后宮の御裝束也
一〇固紋
一一三重也
一二后宮の御ぞの色たてをの給ふ也
一三濃紅のきぬ也、紅梅のかさねにはこきぎぬよしと也
一四句
一五御裝束の色た

枕草子

也。貴子と號す。儀同三司母といふ是也。后宮淑景舎などの御親也。

こなたにて御髪なと參るほど、「淑景舎は見奉りしや」と問はせ給へば、「まだいかでか。積善寺、供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「其柱と屏風とのもとにより、我うしろより見よ。いと美しき君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣どもに、紅のうちたる御衣、三重が上に、只引き重ねて奉りたるに、紅梅には濃ききぬこそをかしけれ。今は紅梅は着てもありぬべし。されど、萌黄などのにくければ。紅にはあはぬなり」との給はすれど、只いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣にやがて御かたちの包ひ合はせ給ふぞ、猶ことよき人もかくやおはしますらんとぞゆかしき。さてゐざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきて覗くを、「悪しかめり。後めたきわざ」と聞えごつ人々もいとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。上は白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なゞめり、引きかけて、奥によりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北に少しよりて、南むきにおはす。紅梅ども數多濃く薄くて、濃きあやの御衣、少し赤き蘇枋の織物の袿、朽黄の固紋の、若やかなる御衣奉りて、扇をつとさし隠し給へり。いといみじく、げにめでたく美しと見え給ふ。殿に薄色の直衣、朽黄の織物の御指貫、紅の御衣ども。御紐さして、廂の柱に後をあてて、こなたざまに向きておはします。めでた

てはどもあれ后の御形はめでたきこと也

二異也、他の美人もかやうにやこと也、しゆいしやをさしていへるなるべし

七清少のしゆいさなのぞく也

八あしからんこと女房達の清少を嗣する也

九いひ事する也

十高内侍也

十一袋也

十二東むきに高内侍のゐ給ふ也

十三御かたらはろくに見えぬ也

十四しゆいさのいでたち也

十五濃く薄きをかさねて也

十六袿也

十七顔をおほひ給ふ也

十八中關白殿也

枕草子

き御有様どもを打ち笑みて、例の戯言をせさせ給ふ。淑景舎の繪に書きたるやうに美しげにてゐさせ給へるに、宮いと安らかに、いま少しおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひ合せ給ひて、猶たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

○まだいかでか——いまだ見奉り侍らず。いかでか見侍らんとの心也。

○しやくぜんじくやう——積善寺供養也。榮花物語四見はてぬ夢に云、かくて撫政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給ひて、積善寺と名付けさせ給ひて、其御堂供養いみじくぞいそがせ給ふ云云。　正暦三年の事也。中關白の父兼家公のために建立也。

○こうばいのかたもんうき紋——紅梅は表紅、裏紫、二月の衣也。固紋、浮紋いづれも胡曹抄にあり。或説に固紋は錦のやうに織付けし紋也。浮紋は唐織のごとしといへり。

○今は紅梅はきでも——紅梅は十一月より二月迄着用の衣也。もはや珍しからねば着ずしてもあらんと也。是二月十一日の比なれば也。

○もえぎなどのにくければ句——紅梅は珍しからねど、崩黄などは、みにくければ、紅梅をめすとふくめたる詞也。されど、紅梅は紅に重ねては似合はずと也。紅梅にはこききぬこそをかしけれといへる首尾也。こききぬは濃紅也。只紅とはうすき色なれば也。

枕草子

二十薄紫の直衣也

二一句

二二直衣のいれひもをさし給ふ御手すさびなるべし

二三よりかゝりて也

二四奥にもさるがう事をの給ふことあり

二五后宮也

二六おとなしき事也

二七いかでかあらんこと也

一十一日の朝の御手水を進むる也

一一しゆいしやの御手水をもてまゐるさま也

二登花殿に此方、候方の女房つやひたれば也

○さてゐざりいでさせ——御ぐしの事。御せうぞくなど事すみて后宮の出で給ふ也。

○女房のもなめり引きかけて——后宮への禮儀に高内侍のかりそめに裳をかけ給へり。さすがに御母なれば、態とはなくて女房の裳なめりといへるおもしろきにや。

○もえぎのかたもんのわかやかなる御ぞ奉りて——崩黄の固紋花やかに若きいでたちなるべし。

○げにめでたくうつくしと——前に后宮のうつくしき君なりとのたまひしをうけて、げにと清少の見たる心也。

○こなたにむきて——今清少ののぞく方にむきて、關白殿のおはす也。

○めでたき御ありさまどもをうちゑみて——后宮の淑景舎など御形を、關白殿よろこび見給ふさま也。

○しげいしやのゑにかきたるやうに——うるはしく行儀たゞしきさま也。源氏若紫に葵上のありさまを「只ゑにかきたる物の姫君のやうに」といへる同じ儀なるべし。

御手水まゐる。彼御方は、宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人してもて參るめり。唐庇のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。せばしとてかたへは御

四 女房のさうぞく也、前註
五 尻也、すそひく也
六 童、下仕などのもて來る手水を女房の取次ぐ也
七 前にもあり、未考
八 后宮の御方也
九 手水番
一〇 手水の役の番也
一一 青末濃裳背子
一二 袴帯
一三 領巾、前註
一四 けしやうせしさま也
一五 下仕手水を取次ぎて采女にわたす也
一六 將也
一七 公儀めきし也
一八 唐めきし也、めなれぬ心也

おくりして皆歸りにけり。櫻の汗衫、崩黄、紅梅などいみじく、汗衫長くしり引きて、取りつぎ參らす。いどなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ少將の君、北野の三位のむすめ宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水番の采女、青末濃の裳、唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎて參るほど、これはたおほやけしう、唐めいてをかし。

○せんようでんぢやうぐわ殿――これ淑景舍より登花殿へゆく道つゞきなり。宣耀殿和名云麗景殿の北にあり。貞觀殿和名云常寧殿の北にあり。これを御匣殿といふ云云。淑景舍は昭陽舍の北、麗景殿のうしとらにあれば、其西宣耀殿、其西貞觀殿をとほりて、其西登花殿に至るべし。今の御しつらひ登花殿の東の二間とあり。拾芥抄宮城の圖、順和名等にて勘ふべし。

○からきぬ――和名云、背子、形如二主臂一無レ腰襴之給衣也。楊子漢語抄云、背子婦人表衣以レ錦爲レ之。

○北野の三位――菅原輔正、勘解由長官在躬一男現レ神、北野殿是也。正暦三年二月十五日叙二三位一公卿補任大系圖等に在り。

○御手水番のうねめ――百寮訓要抄云、采女と申すは、國々より然る可き美女をえらびて天子へまゐらする也。御陪膳などをもゆるさるゝ女房也云云。御手

一 御膳也
二 女藏人也
三 役義の心也
四 清少ののぞきるしがかくれ所なきをいふ也
五 清少の入り居たる也
六 清少の衣也
七 關白殿清少ののぞくを見付け給ひし也
八 關白どのゝ詞也
九 后宮の御詞也
一〇 關白どのゝ詞也、清少ののぞくなの給ふ也
一一 句
一二 みにくき心ふ也、ざれての給ふ也
一三 御むすめを自慢し給ふ也
一四 后宮しやいさなゝ御勝まゐる也
一五 關白どのゝ詞也

枕草子

水の役をもつとむるなるべし。

御膳のをりになりて、みぐしあげまゐりて、藏人どもまかなひの髪あげてまゐらするほどに、隔てたりつる屏風も押しあけつれば、撞間見の人、隱裝取られたる心地して、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。きぬの裾裳など唐衣は、皆御簾の外に押し出されたれば、殿のはしのかたより御覽じ出して、「誰ぞや。霞の間より見ゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば、「あな恥し。彼はふるき得意を。いとにくげなるむすめども持ちたりともこそ見侍れ」などの給ふ。御けしき、いとしたり顔なり。あなたにもおもの參る。「うらやましくかたぐ〳〵のは、皆參りぬめり。とく聞し召して翁、女におろしをだに給へ」など、只日一日、さるがう事をし給ふほどに、大納言殿、三位の中將、松君も將て參り給へり。殿いつしかといだきとり給ひて、膝に据ゑ給へる、いと美し。せばき緣に、所せき日の御裝束の下襲など引き散らされたり。大納言殿は物々しう淸げに、中將殿はらう〳〵じう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、上の御宿世こそめでたけれ。御圓座など聞え給へど、「陣につき侍らん」とて急ぎ立ち給ひぬ。

○みくしあげまゐりて――河海云、昔は女御更衣以下常に髪を上ぐる事本義也。也足軒云、内の女房は晴の時は髪上とて裳などして、髪をいたゞきへ上ぐる

枕草子

一云關白どの北の方をぞれての給ふ也
二伊周の子也
三うと〳〵しき心也
四日裝束は束帯の事也
五裾也
六伊周隆家など也
七上臈しき也
八申すに及ばぬ心也
九北の方高内侍の事也
十云宿世也、前世の緣をほむる詞也
十一關白殿也
十二着陣あらんと也

也云云。　后宮の御ぐしを女藏人など役するさま也。

○かすみのまより——清少のほのかに見ゆるをの給ふ也。古今「やま櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ。」詞ばかりを用ゐて也。

○かれはふるきとくいを——古得意也。清少はもとよりの得意にてよくし給ひしものをとの心也。

○うらやましくかた〴〵のは——いまだ關白殿北の方などの御膳はまゐらざりしにや。

○さるがう事をし給ふ——猿樂言也。狂言のざれごとをの給ふ也。

○大納言殿——伊周公也。正暦三年に兄の道頼の中納言にこえて大納言になり給ふと榮花物語に在り。

○三位中將——隆家卿也。榮花物語四云、此御腹のあるが中の弟の君は三位中將になしきこえ給うつ云云。是も正暦三年の事也。

○松君——伊周公の男左京太夫道雅の童名也、榮花物語四云、小千世君は彼大納言殿重光の姫君いみじううつくしき若きみうみ給へれば、をば北の方貴子攝政殿道隆などいみじき物にもてかしづき給ふ。松君とぞきこゆめる云云。是正暦二年也。

○御わらうだなど聞え給へど——伊周隆家など緣に居給へば圓坐をと關白どの

枕草子

一前に式部丞のぶつね御使にまゐりしとは別人にや
二勅使也
三御膳をおく所也
四誰としらず
五登花殿にや
六使を賞歎也
七關白どの
八北方也
九后宮也
十關白殿詞
十一淑景舍のありさま也
十二母上也
十三しがいさ也
十四ちかよりへの緣也
十五ちかより緣を辭し侘びたるさま也
十六二藏ばかり也
十七關白どのゝ詞也
十八いかでか御產

仰せ給ふ也。

しばし有りて、式部の丞某とかや、御使に參りたれば、御膳宿の北によりたる間に褥さし出てて据ゑたり。御返は、今日はとく出たさせ給ひつ。また褥も取り入れぬほどに、東宮の御使にちかよりの少將參りたり。御文取り入れて、渡殿は細き緣なれば、こなたの緣に褥さし出てたり。御文取り入れて、殿、上、宮など御覽しわたす。「御返はや」などあれど、とみにも聞え給はぬを、「某が見侍れば、書き給はぬなンめり。さらぬ折は、まもなく是よりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御面は少し赤みながら、少しうちほゝゑみ給へる、いとめでたし。「とく」など、うへも聞え給へば、奥ざまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、諸共に書かせ奉り給へば、いとどつゝましげ也。宮の御方より、朽黄の織物の小袿、袴押し出されたれば、三位の中將かづけ給ふ。苦しげに思ひて立ちぬ。松君のをかしう物の給ふを誰も〳〵美しがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引出てたらんにわろくは侍らじかし」などの給はするを、げになどか今までさる事のとぞ心もとなき。

○御返はけふはとく——后宮の御返事けふはいつより早く出でたる也。

○東宮の御使に——三條院より淑景舍へ御使者也。

○わたどの——渡殿廊下也。

○御返はやなどあれど、とみにもきこえ給はぬ——關白殿御返事を早くと、し

げいさにすゝめ給へども、恥らひて、頓てにも出で給はぬ也。淑景舎はいま十五歳ばかりにや。

○さらぬ折はまもなくこなたよりぞ――關白どのなどおはさぬ折は、隙もなくしげいさよりも御文まゐらせ給ふものをと也。是も道隆公のたはぶれ詞也。

○いとゞつゝまし――しげいさのはぢ給へる心なるべし。

○宮の御子たちとてひき出でたらんにわろくは侍らじ――后宮の皇子うませ給はばとの心也。松君をかやうにもてあそぶやうに、皇子をさし出でたらばと也。これ正暦三年二月なれば、一品宮敦康親王などもいまだ生まれさせ給はぬほど也。

一帯也
二關白殿也
三殿上人も女房も也
四前に天子の御帳にいらせ給ふと有りし首尾也
五御簾にまゐる事也
六帯の御直衣也
七恐れてかかざると也

未の時ばかりに「筵道まゐる」といふほどもなく、うちぞよめき入らせ給へば、宮もこなたによらせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれは、女房南表にそよめき出てぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮づかさめして、菓子、肴めさす。

「人々醉はせ」などおほせらる。まことに皆醉ひて、女房と物言ひかはすほど、かたみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山井の大納言召し入れて、御うちぎ參らせ給ひて、歸らせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣の夕映なども、かしこければとゞめつ。山の井の大納言は入りたゝぬ御兄にても、いとよくおはすかし。匂ひやかなるかたは、此大納言にもまさり給へるものを、世の人はせちにい

八后宮などと別腹の兄なれはしたしからぬ也
九伊周公をいふ也
十深切に伊周におされりといふ也
十一前の櫻の御直衣といふよりここまで異本になし

ひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。

○えんだうまゐると――筵道しく事也。行事には必ず筵道しくを云ふ也。一條院の后宮の御方へ入御のさま也。

○宮もこなたによらせ――殿うへなどの御前を立ち去りて、帝のおはしますかたへより給ふ也。

○殿の御まへに宮づかさ召して――中宮太夫以下の宮司に、菓子、肴などの事仰せ付けて、殿上人をもてなせと申し給ふ也。

○山井大納言――道頼卿也。后宮伊周公などの別腹の兄君也。山井殿三條坊門の北、京極の西、悪所なるよし拾芥に見えたり。永頼の三位の家也。榮花物語云、此大千世君は、國々あまた知りたる人の山の井といふ所にすむがむすめおほかる聟に成り給ひぬ云云。大千世君とは卽ち道頼卿なり。

○みうちぎまゐらせ給ひて――紅葉賀卷に、うへはみうちぎの人めして出でさせ給ひぬる云云。河海云、御ぐしとる人の事也。花鳥云、藏人。私記云、御髻、御髮事侍臣之間、撰三堪レ事之人一供、無二定例一、皆着二當色袍一謂二之御衽一。今案御もとどり御びんにまゐる人は、紫のきぬの直衣を着て伺候するを、御うちぎの人といふ也云云。

殿、大納言、山の井の大納言、三位の中將、内藏の頭などみなさぶらひ給ふ。宮の

二 后宮今夜はえまゐらじと也
三 父母への御禮儀なるべし
四 しゆいさにまゐり給へと也
五 しゆいさの御むかへに東宮の御方の女房達もまゐりし也
六 后宮の御詞
七 しゆいさの御答也
八 后宮の詞
九 たがひの御禮議をほめたる也
一〇 淑景舍は登花殿達ければ也
一一 后宮也
一二 狂言也
一三 殆也

ぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ参り給へり。「今宵はえ」など澁らせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、又春宮の御使しきりにある程いとさわがし。御迎へに、女房、春宮のなども参りて、とくとそゝのかし聞ゆ。「まづさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、「さりともいかでか」とあるを、「猶見送り聞えん」などの給はするほどいとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舍わたり給ひて、殿など返らせ給ひてぞ、このぼらせ給ふ。道のほども殿の御さるがう事にいみじく笑ひて、ほと〳〵うち橋よりもおちぬべし。

○内蔵頭――是も道隆公の御子也。頼親の内蔵頭と藤原系圖にあり。
○むまの内侍のすけ――左馬權頭時明の女、一條院源氏物語を御覽じて、紫式部は日本紀をこそよく見たりけれとのたまひしを妬みて、式部を日本紀の局といひし人なるべし。歌人也。
○まづさばかの君わたし――さあらば先づしげいさをまゐらせ給ひて後に、后宮はまゐりきまはんと也。
○さりともいかでか――さはありともいかでかは后宮よりさきにまゐらんと也、姉君への禮讓也。
○うちはしよりも――内階也。細流云、きり馬道に板をうちわたして通ふ道也。

一 清少にいかに見ると也
二 清少の答也
三 彼序を大やうに詩を誦ししと云ふ也
四 黒戸、滋口戸の西にあり、前に委し
五 一條院也
六 時にあふ詠吟はさ也

九十四

殿上より梅の花のみな散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、只「早く落ちにけり」といらへたれば、其詩を誦じて、黒戸に殿上人いと多くゐたるを、うへの御前聞かせおはしまして「よろしき歌など詠みたらんよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

○殿上より――此段、異本には前の段に書きつゞけぬ。
○はやくおちにけり――朗詠、大庾嶺之梅早落。誰問二粉粧一。これは紀納言長谷雄の詩序の文也。イ本前段につづけし本にしたがはば、かの内階よりもおちぬべき折に合はせたれば、早落ちにけりと答へたるにや。

九十五

二月つごもり風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」と云へば、「よりたるに、「公任の君、宰相中將殿の」とあるを見れば、懐紙に、たゞ、

少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきにいとよく合ひたるを、これが本はいかゞつくべから

一 清少也
二 懐中に用意する物也
三 清少の心也

四清少の詞也　五主殿司答也　六清少の心也　七何の疑もなきやうにとの心也　八定子に見せまあらせてつけさせ申さんと也　九一條院のおはして也　一〇返事をいそぐ也　一一付句のよかるまじきうへにと也　一二清少の付句也　一三おず〳〵のこころ也　一四此付句のよしあしの沙汰をききたく思ふ也　一五其沙汰きかじと也　一六清少をはめて擬侍に執奏せんと也

んと思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それ〳〵」と云ふに、皆恥しき中に、宰相中將の御いらへをば、いかゞ事なしびに言ひ出でんと、心ひとつに苦しきを、御前に御らんぜさせんとすれども、上のおはしまして大殿籠りたり。主殿司は「とく〳〵」といふ。げに遅くさへあらんは、取り所なければ、さばれとて、

雪寒み、花にまがへて散る雪に

とわかなく〳〵書きてとらせて、いかゞ見給ふらんと思ひわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、「俊賢の中將など、猶内侍に申してなさん」と定め給ひし」とばかりぞ、兵衞の佐中將にておはせしが語り給ひし。

○二月つごもり——是も正暦三年の比、前の段とおなじ比にや。

○かうしてさぶらふといへば——かくのごとくの用事ありてまゐりしといふ也。

○公任の君、宰相中將殿の——公任と宰相中將殿と兩人のおこせ給ふといふ也。公任は堀河相國頼忠公の男。和漢の才人也。宰相中將は齊信卿にや。

○すこし春ある——雪など降荒れて、春色の少き心也。此詞を取りて俊成卿「埋火にすこし春ある心ちして夜深き冬を慰むる哉」

○誰々かととへばそれ〳〵と——此連歌おこせし一座の人々を誰々かおはすととへば、それ〳〵ととたへし也。

○おほとのごもりたり——帝の渡御にて后宮の御寝なりし也。

一讀經也、六百卷を獨りしてよむはるかなるべし

○さばれとて——任他也。たとひあしくもあれとうちふてたる詞也。

○そらさむみ——花にまがへてちる雪にといふにて、すこし春あるをあへしらへる也。

○そしられたらばきかじ——此付句あしきとならば、我に其沙汰きかする人もあらじとの心也。

○としかたの中將——源俊賢卿、西宮左大臣高明公の男也。

○兵衞のすけ——誰と不知、もしとしかたの兄弟忠賢の兵衞佐にや。

九十六

はるかなる物　千日の精進はじむる日。牛臂の緒ひねりはじむる日。みちの國へ行く人の逢坂の關越ゆるほど。生まれたる稚兒の大人になるほど。大般若經御讀經、一人して讀みはじむる。十二年の山籠りのはじめてのぼる日。

○千日のさうじ——御嶽精進などにや。

○はんびのをひねり始むる——和名云、牛臂、衣名也。桃華蓼葉云、或抄云、近代牛臂以二小緒一結レ之、往古之例以二大緒二筋一結レ之、今世少二知人一云云　猶委今案黒牛臂といふもあり。冬は綾、夏は生の穀を用ゐる。緒はうす物をたゝみて付くといへり。但、此草紙にいへるは、往古の大緒二筋をもちて結レ之とい

へる時の事なるべし。是をひねるに遙なる故あるにや。今世知る人まれなりと云云。可尋之。

○十二年の山ごもり——後撰の詞書にも有り。前註。

九十七

一方弘はいみじく人に笑はるゝもの哉。親などいかに聞くらん。供にありく者ども、いと人々しきを呼び寄せて「何しにかゝるものには使はるゝぞ、いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへの衣なども、人よりはよくて着たるを「是はこと人に着せばや」などいふに、げにぞ詞づかひなどのあやしき。里に宿直物取りにやるに、「男二人まかれ」といふに、「一人して取りにまかりなんものを」といふに「あやしの男や。一人して、二人の物をば、いかで持つべきぞ。一升瓶に、二升はいるや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使の來て「御返事とく」といふを「あなにくの男や。竈に豆やくべたる。此殿上の墨筆は何者の盗み隱したるぞ。飯、酒ならばこそほしうして、人の盗まめ」といふを、又笑ふ。

○まさひろ——源方弘、左馬權頭時明男、前註。

○なにしにかゝるものにはつかはるゝぞ——人にかく笑はるゝ方弘にはいかで

一是より例の筆やさびの物がたり也
二なぶられ笑はる、也
三方弘がわらはる、事を也
四方弘の供の侍なども也
五方弘が供を人々のよびて也
六染縫などよき也
七方弘が裝束也
八方弘がこたへの事也
九方弘が詞也
一〇男の詞也
一一方弘が詞也
一二何事とはしら

つかはるゝぞと也。

○人よりはよくてきたるを——異本ニきたるを紙燭さしつけやき、あるはこれはこと人にとあり。

○是はこと人にきせばや——方弘には似合はずとなぶりていふ也。

○里にとのゐものとりに——方弘殿上に宿直して里亭へ夜の物取りにやるなるべし。

○ひとますがめに二ますはいるや——一升入るべき瓶に、二升はいらじと也。一人して二人の物はえもつまじと也。瓶は方量かぎりあり、人の力はかぎりなき事をもしらでいへるまことに笑はるべし。

○かまどにまめやくべたる——せはしき事のたとへにいふにや。

○此殿上のすみふでは——彼返事かゝんとて、墨筆のなければ、尋ぬるとていふにや。

女院なやませ給ふとて、御使に參りて歸りたるに「院の殿上人は誰々かありつると人の問へば「それかれ」など四五人ばかりいふに「又は」と問へば「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、亦あやしき事にこそはあらめ。人間に寄り來て「わが君こそ。まづ物聞えむ。まづ〳〵人のの給へる事ぞ」といへば「何事にか」とて、几帳のもとによりたれば、「『むくろごめにより給へ』といふを『五

一イきたるに
二女院の御かたの也
三方弘がこたへ也
四其外には誰々とゝふ也
五又方弘が答ねごたゞ笑ひたる也
六方弘がこゝはゐ也
七句
八是も方弘が詞也
九飯酒

六 方弘が清少をかしづきていふ也
七 人のいひし事かたりきかせんと也
八 清少也
九 方弘が詞也
一〇 わざとをかしくいひなして清少などのわらへる也
一一 指油、方弘が役する也
一二 方弘也
一三 油單、和名、かのうたしきの事也
一四 うちしきを足にまとひたがら歸るゆゑ也
一五 方弘がしたうづのぬゆゆく也
一六 震動也、是もわらはるゝ事也
一七 一盛也
一八 小障子也
一九 ひそやかになど云ふ詞也
二〇 方弘を引出して也

『體ごめに』となんいひつる」と云ひて、又笑ふ。除目の中の夜、さし油するに、燈臺の打敷を踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺は倒れぬ。襪は打敷につきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に、人もつかず。それに方弘は、豆一盛を取りて、小障子のうしろにて、やをら食ひければ、引きあらはして笑はるゝ事ぞ限なきや。

○女院なやませ——是東三條院也、一條院の御母、前注。
○御つかひにまゐりて——宮の御かたよりの御見まひの使に方弘がまゐりしなるべし。
○さてはいぬる人どもぞ——其外には退出の人々ありしと也。事もなき返事なれば笑ふ也。
○人まによりきて——人のなき間に方弘清少のもとに來て也。
○むくろごめに——軀籠、全身みなこなたへより給へとの心也。
○ぢもくの中の夜——除目は三ケ夜おこなはるゝ中の夜也。前に委註。
○とうだいのうちしき——燈臺の下にしく物也。すなはち油單也。
○つようとらへられ——油單に方弘が足をつけまつはされし也。
○したうづ——和名襪亦作韈和名之太久頭足衣也。桃華蕊葉云、韈練貫の小袖を

一 津の國也
二 伊勢也
三 奥州也
四 八雲奥州云云
五 未考
六 八雲陳奥云云
七 八雲薄河云云
八 するが也
九 八雲近江云云
一〇 陳奥の奈古曾の關の一名とき こえたり
一一 よしなしな來そといふやうなれば也
一二 八雲に相模云云

着する時は練貫を用ゐる。宿老は白き平絹のねりはりたる也云云。
○頭つき給はぬほどは——藏人頭は貫首とて殿上の管領なれば、臺盤につきて食する時も、頭のつかざるには殿上人何もつかぬを、方弘は頭より先に豆をくひしと也。

九十八

關は　逢坂の關。須磨の關。鈴鹿の關。くきだの關。白川の關。衣の關。たゞこえの關ははゞかりの關とたとしへなくこそ覺ゆれ。横走りの關。清見が關。見るめの關。よしな〳〵の關こそ、いかに思ひ返したるならんといと知らまほしけれ。それをなこその關とはいふにやあらん。逢坂などをまで思ひ返したらばわびしからんかし。足柄の關。

○あふさかのせき——近江也。忍熊王武内宿禰と戰まけて退きしに、武内宿禰追ひてこゝにて行き逢ひて、終に忍熊王を亡したる故、逢坂と云ふと日本紀九に有り。
○くきだの關——細流云、奥州の菊田刺關也。俗にくきだのせきといふ。
○たとしへなくこそ——たとへがたなき心也。只こゆるといふ名と、憚るといふとは、たとへくらべがたき心也。

枕　一八雲に伊豆國云云
草　二木枯森、駿河也
子　三信太、和泉也
四生田、攝津也
五未知、八雲同前
六未知
七未知、イたゝきの森
八山城也
九イくろつき
一〇未知
一一浮田、山城也
一二イうへつきの、未知

○いかに思ひ返したるならん――思ひ立ちたる事を、又由なしと思ひ返したるやうなれば也。

○逢坂などをまで――逢ふべしと契りし人の、由なしな來そなど思ひ返したらば、怪しからんと也。逢坂を逢ふにそへてうたにもあまたよみたれば也。續千載集に、頼朝卿「都には君に逢坂ちかければ、なこその關は遠きとをしれ」

九十九

森は　おほあらぎの森。しのびの森。こゝゐの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつきの森。きくたの森。いはせの森。立聞の森。常磐の森。くるへきの森。神南備の森。轉寢の森。浮田の森。うへ木の森。石田の森。かうだての森といふが、耳とゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。こひの森。木幡の森。

○おほあらぎのもり――大荒木、八雲山城云云。

○しのびのもり――未知。但八雲に、しのぶの森。陸奥云云。是を書きたがへしにや。忍びの岡は河内也。

○いはせのもり――盤瀬森。八雲云、大和、又攝津、信濃にもあり云々。

○くるへきの森――八雲にもしれず。

枕　一さこも也
草　二水のふかき所に生ひたるさき也
子　三河内國也
四はせにまうでゝ、三日めにかへる也
五足脛をかりあゆたる也
一二石田、山しろ也
一三未知

○神なびの――神奈備森也。津國、今かうないといふ所也。

○こひのもり――未考。

○こはたの森――山城の木幡にや。可尋之。此兩所イ本になし。

百

卯月の晦日に、長谷寺に詣づとて、淀の渡といふものをせしかば、舟に車をかき据ゑて行くに、菖蒲、菰などの末短く見えしを、取らせたれば、いと長かりける。菰つみたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。高瀬の淀には、これを詠みけるなンめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲刈るとて笠のいと小さきを着て、脛いと高き男、童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

○卯月つごもり――是より例の筆ずさび也。

○長谷寺――拾芥云、金色二丈六尺十一面云云、猶元享釋書ニ委。

○淀のわたり――古は橋なくて舟渡りせし也。「たつ程のかさね土器なかりせばおほえて淀のわたりせましや」と俊頼の歌也。

○しやうぶどもなど――文選廿二謝靈運、蘋萍泛二沉深一菰蒲冒二淺清一。金葉集「あやめぐさ引手もたゆく長きねのいかで淺香の沼に生ひけん」

○たかせのよどにはこれを――六帖歌「こも枕高瀬の淀にかるこものかるとも我はしらで頼まん」其外あまたよめり。

百一

湯は　七久里の湯。一有馬の湯。玉造の湯。

一攝津也　二未考

○湯――温泉の事也。博物志云、凡水源有二石硫黄一其泉則温。

○七久里湯――八雲云、信濃、しなのゝみゆ同云云。

百二

常より。もことに聞ゆる物　元三の車の音。一鳥の聲。曉のしはぶき。物の音はさらなり。

一是も元三の鶏也

○物のねはさら也――是も曉の管絃也。常よりことなるといふも、事新しと也。

百三

繪に書きて劣る物　なでしこ。櫻。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

○なでしこ――イ本此下にさうぶとあり。菖蒲也。

○物がたりにめでたしと――桐壺卷云、ゑに書きたる楊貴妃の形は、いみじき繪師といへども、筆限あればいと匂ひなし云云。狹衣に、大將の御ありさまぞ肇及ぶべくもあらずとて、果はやりにきとあるたぐひ也。

百四

書きまさりするもの　松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじく寒き。夏は世に知らず暑き。

○かきまさりする物――ゑにも書きまさり、詞書にも書き勝りする也。

○松の木――是より鹿までは、ゑに書きまさりする也。

○冬はいみじく――是以下は詞に書きまさりする也。韓退之詩云、肌膚生二鱗甲一衣被如二刀鎌一氣寒鼻莫レ嗅。血凍指不レ粘圍レ爐不レ覺煖、獸炭屢已添。なほあげてかぞふべからず。

○夏はよにしらずあつき――梁元帝詩云、季夏煩暑流レ金爍レ石。一みなづきの土さへさけてする日にも我袖ひめやいもにあはずして」と拾遺にも讀めり。

百五

あはれなる物　孝ある人の子。鹿の音。よき男の若きが御嶽精進したる。一隔て居てうち行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの、二目さまし

一イいてゐたらんあかつきのぬかなど　二彼の禮拜の聲

て聞くらん思ひやり、まうづる程のありさま、いかならんとつゝしみたるに、平かにまうで着きたるこそいとめでたけれ。烏帽子のさまなどぞ、すこし人わろき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衛門の佐信賢は「あぢきなき事なり。たゞ清き衣を着てまうでんに、なでふ事かあらん。必ずよも『あしくてよ』と御獄の給はじ」とて、三月つごもりに、紫のいと濃き指貫、白き、青山吹のいみじくおどろ〳〵しきなどにて。隆光が主殿の助なるは、青色の紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うち續きまうでたりけるに、歸る人もまうづる人も、珍しくあやしき事に、すべてこの山道にかゝる姿の人見えざりつとあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日のほどに、筑前のかみうせにし代になりにしこそ、げにいひけんにたがはずもと聞えしか。是は哀なる事にはあらねども、御獄のついで也。九月三十日、十月一日の程に、只あるかなきかに聞きつけたる蟋蟀の聲、鷄の子いだきて臥したる。秋深き庭の淺茅に露のいろ〳〵玉のやうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕暮、曉に目さましたる、夜などもすべて、思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて、心にしもまかせぬ。山里の雪。男も女も清げなるが、黒き衣着たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、あるかなきかに心細げなる月の、山の端近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うちすぐしたる僧たちの行したる。荒れたる家に葺這ひかゝり、蓬

をしたしき人の物へたてて聞く想像も哀也
三るイ
四精進を大事に思ふ也
五イおぢたるに
六久しき山ぶみに烏帽子の損じたるさま也
七みたけに參りし人也
八何事かあらんと也
九白き直衣歟
一〇目おどろく心也
一一句
一二藏人なれば也
一三摺尻也
一四のぶかたにうちつゞきて也
一五やつれずきよげなるいでたちをあやしむ也
一六のぶかたが筑前守になりし也
一七みたけさうじの次手にと也
一八是より別也
一九哀なるとこめたる詞也
二〇親のいさめなどに也
二一服衣也

など高く生ひたる庭に、月の隈なくあかき。いと荒うはあらぬ風の吹きたる

○孝ある人の子――爾雅釋話曰、善事父母一爲レ孝。孟子曰、堯舜之道孝弟而已。孝經云、子曰夫孝德之本也。教之所二由生一下略。猶あげていひがたし。

○へだてゐてうちおこなひたる曉のぬか――ぬかは額突とて禮拜する事也。御獄精進に別所にはなれゐて、彌勒を禮拜するさま也。金峯山の金剛藏王は、過去釋迦、現在觀音、當來彌勒と也。夕顔卷に、みだけさうじにやあらん。たゞ翁びたるこゑにぬかづくぞきこゆる云云。又なもたうらいだうしとぞおがむなるともいへり。

○まうづるほどの――千日精進して金峯山に參る也。

○信賢――六條左大臣重信公の息宣方歟。猶可尋。

○たゞきよき衣を――誰もやつれて參るにのぶかたは淨衣にてまうでんとぞいへる詞也。

○かならずよもあしくてよと――金峯山の藏王も必ず惡しくやつれてまいれよとはよもの給はじと也。

○あをやまぶき――桃華蘂葉衣色異說云、青山吹、表青、裏黃、此衣二月にも用ゐる事あり云云。

○たかみつのとのもりのすけ――勘物云、隆光、主殿助長保三年藏人年廿九。

三條右大臣定方より五代左衞門佐宣孝の息云云。

○すゐかん――桃華蘂葉云、水干事。紗にても平絹生にても、又色は白くても何にても大納言の時まで内々に着用之。

○いひけんにたかはずもと――よき衣きてまうでんになでふ事かあらんといひしにたがはずも有りける哉との心也。

○十月一日のほど――詩豳風七月篇云、十月蟋蟀入二我牀下一。「きり〴〵す夜寒に秋のなるまゝによわるかこゑの遠ざかりゆく西行」

○秋ふかき庭の淺茅に――家持集「松陰の淺茅がうへの白露をけさずて玉にぬく物にがも」

○川竹の風に――イ本夕暮曉に川竹の風にふかれたるめさましてきゝたるとあり。此本と心こと也。

○二十六七日――はつかあまりむいかなぬかとよむべし。

○年うちすぐしたる――年老い過ぎたる也。朗詠、香火一爐灯一盞、白頭夜禮佛名經云云。

○いとあらうはあらぬ風の――一説是も荒れたる家の葎蓬など生ひたる所にふく心なるべし。

一是より例の筆すさび也
二イをる
三脹也
四イつゝが
五清少などのさま也
六高く上る間の窟の高欄に取付くさま也
七彼の法師はらのやすくゆく也

百六

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき氣色なるはいとわろし。初瀨などに詣でて、局などするほどは、縛階のもとに車引きよせて立てるに、帶ばかりしたる若き法師ばらの、あしだといふ物を履きて、いさゝかつゝみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうちよみ、倶舍の頌をすこしいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいと危く、傍によりて、高欄おさへてゆくものを、只板敷などのやうに思ひたるもをかし。

○寺にこもり――三井寺にや。いつくにても也。

○くれはし――縛階にや。初瀨にある物也。うつぼ物語云、樓にのぼり給ふべきほどのくれはしは、色々の木をまぜ〳〵につくりて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく作る云云。

○おびばかりしたる――小袖に帶ばかりにて衣きざるにや。イおゐは笈斗おひたるにや。

○つゝみもなく――少しのつゝしみもなく也。恐れぬ心也。イつゝがもなくは無レ恙也。あやふきけがもなき也。

○倶舍のじゆ――大藏經綱目指要錄七云、倶舍頌一卷。天親菩薩造也。說一切

一 香也
二 車より也
三 よそのゑ詣の人々のさま也
四 裳
五 背子也
六 裝束したる也
七 深履和名
八 半靴和名、半靴橋華
九 簾
一〇 摩羅江次第香引也
一一 大内のやうなる也
一二 内證外さまをもゆるされし男也
一三 道の高下の案内する也
一四 外の者也
一五 清少などに近く也
一六 先立也

枕

草

子

有部作二八品一一分別界品四十四頌。二分別根品七十四頌。三分別世界品九十九頌。四分別業品二百三十一頌。五分別隨眠品六十九頌。六分別聖賢品八十三頌。七分別智品六十一頌。八分別定品三十九頌。已上六百頌爲二論之本一也。

「局したり」などいひて、沓どももて來て下す。衣かへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳、唐衣など、こはゞ〳〵しく裝束たるもあり。深履、半靴など履きて、廊のほどなど靴すり入るは、内わたりめきて又をかし。内外など許されたる若き男も、家の子など、又立ちつゞきて、「そこもとは落ちたる所に侍るめり。あがりたる」など數へゆく。何者にかあらん、いと近くさし歩み、さい立つ者などを「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとて、少し立ち後るゝもあり。又聞きも入れず、我まづとく、佛の御前にと行くもあり。局にゆくほども、人の居並みたる前を通りゆけば、いとうたてあるに、犬防の中を見入れたる心地いみじく尊く、などて月比もまうでず過しつらん」とて、まづ心もおこさる。みあかし常燈にはあらで、うちに又人の奉りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のきら〳〵と見え給へる、いみじく尊げにて、手ごとに文を捧げて、燈はんに向ひて、論議誓ふも、さばかりゆすり滿ちて、これはと取り放ちて聞きさわぐべくもあらぬに、せめてしぼり出したる聲聲の、さすがに又紛れず。「千燈の御心ざしは、なにがしの御ため」とわづかに聞ゆ。帶うちかけておがみ奉るに、「こゝにかう候ふ」と

一 殿若き男家子などの制するさま也
二 早く也
三 居並
四 内陣へ他所のひとの奉りし燈明なり
五 摩羅
六 論議誓にや
七 動滿也、屋動する也
八 大德達のふあかし文よみあげしさま也
九 清少の御灯文の詞なるべし
一〇 それ〴〵の立願のためと也
一一 清少のこもりゐし局へ法師などのしきみをつかはす也
一二 所願のおもむきを佛に申せしと也
一三 云々と書きかやう〳〵の人と

枕

草

子

いひて、檜の枝を折りてもてきたるなどの尊きなども、猶をかし。

○ふかぐつはうくわ——和名云、深履、其頭短者謂二之半靴一。桃華蘂葉云、靴、深香同事也云云。靴氈は赤地の錦、靴帶はひきはたの皮也。昔はかな物あり。

節會の時、内辨外辨の公卿、若くは行幸供奉の時用レ之。又云、半靴は御幸の供奉直衣騎馬の時用之。

○犬ふせぎの中を——觀音のおはする所のさま也。

○まづ心もおこたる——其たふとき さまを見るより先づ信仰の心發起すると也。

○てごとにふみをさゝげて——御灯文なるべし。願文など也。源氏玉かつらの卷にも、初瀬にてみあかしぶみの事あり。

○千とうの御心ざし——千燈ともす事なるべし。イ本千たんと有り。玄旨御本にも千灯とあればイ本用ゐるべからず。

○おびうちかけて——かけおびのさまにや。旅すがたのやつせる裝束なるべし。

犬防のかたより法師寄り來て、「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」など問ふ。「しか〳〵の人籠らせ給へり。なといひ聞かせていぬるすなはち、火桶、菓物などもてきつゝ貸す。半挿に手水なと入れて、盥の手もなきなどあり。「御供の

枕草子

いふ心也
三 葉子也
四 清少の局宿坊より持來て貸す也
五 匣ハンザウ半挿ともかく也手水入るる物也
六 四和名、手洗同
七 かたへはのこりてかはる也
八 わがなんなりとよむべし
九 額突也、禮拜する也
一〇 不羅也
一一 是もかの男のさま也
一二 鼻かむことはなく事を云ふ也
一三 あのものゝ所願を成就させまほしきと也

人はかの坊に」など云ひて、呼びもて行けば、かはり〳〵ぞ行く。誦經の鐘の音、我なゝなりと聞けば、たのもしく聞ゆ。傍によろしき男の、いと忍びやかに額なども突く。立居のほども心あらんと聞えたるが、いたく思ひ入りたるけしきにて、いも寂す行ふこそいとあはれなれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などをけざやかに聞きにくゝはあらで、少し忍びてかみたるは、何事を思ふらん。かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。

○法師のよりきて——清少の宿坊の法師の寄り來たる也。願文讀みし人也。

○しか〳〵の人こもらせ給へり——是も清少の宿坊の法師我がもとに又こもりおはする人の事などかたりきかせて歸るさまなり。

○はんさう——匣ハンザウ和名云、柄中有レ道可二以注一水之器也。俗用二橡字一所レ出未レ詳、或說云、有レ柄半挿二其内一故呼爲二半挿一。

○御ともの人はかの坊に——堂にての清少の局狹ければ、供の人々は宿坊へとさそふ也。

○ずきやうの鐘のおと——誦經鐘也。祈禱の經をよむ事也。源氏浮舟卷に、ずきやうのかねの風につきてきこえくるをつく〳〵と聞きふし給へり云云。

○我なンなりときけば——我よましむる祈禱の鐘の音なりけりと也。

○たかくうち出させまほし——彼の男の忍びやかにぬかづき經をも高からず讀

枕草子

一 早
二 宿坊也、
三 清少の下人也
四 清少の局さびしき也
五 是も願文なるべし
六 誦經のかね也
七 いづかたよりの御ずきやうぞと也
八 こんてうたれの御願なざいふ也
九 句
一〇 其座のうへ心もとなく聞きて清少もほとけを念ずると也
一一 立願の事也

むを蓁高く調にいださせまほしきと也。

○けざやかに——あざやかにあらはなる也。

日比籠りたるに、晝は少しのどかにぞ、早うは有りし。法師の坊に、をのこ共、童なと行きて、つれ〳〵なるに、たゞ傍に貝をいと高く、俄に吹き出したるこそ驚かるれ。清げなるたて文など、持たせたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山ひゞきあひてきら〳〵しう聞ゆ。鐘の聲響きまさりて、いづこならんと聞くほどに、やんごとなき所の名うちいひて「御產平かに」など。敎化などしたる。すゞろにいかならんと覺束なく念ぜらるゝ。これはたゞなる折の事なゝめり。正月などには、只いと物さわがしく、物のぞみなどする人の、隙なくまうづる見るほどに、行もしやられず。

○日比こもりたるに——前にも日比こもられしなるべし。

○はやうは有りし——前々はかやうに晝夜さわがしくはなかりしとなるべし。

○かひをいとたかく——昔は十二時に貝を吹きし也。千載集に「けふも亦午の貝こそ吹きつなれひつじのあゆみ近付きぬらし赤染衛門」

○ずきやうの物——誦經の布施物なり。浮舟のまきに、御ずきやうせさせ給へとて其れらの物文など書きそへてもてきたり云云。

○たう童子——堂童子は法會の時花筥をおこなひをさめなどする物也。江次第

一 暮れて籠居するは通夜の人ならんと也
二 持ち上ぐべくもなき也
三 其まゝ局に出でて也
四 其事になれたる也
五 火用心の事なるべし
六 是もこもりし人の子なるべし
七 いさぶらひの人とあり、可用心也
八 ねほれし也
九 いとほしがる心也
一〇 後夜
一一 修行者めきたる也

に佛事ごとに見えたり。禁中の法會に其座以下雲圖抄に有り。

○御さんたひらかに――御産の祈禱など申すさま也。平に守り給へと申す也。

○教化などしたる――法理をのべて此佛驗むなしかるまじき由を教化しきかするにや。

一日のうち暮るゝにまうづるは籠る人なンめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などほうとたて置くと見れば、たゞ局に出でて、犬防に簾をさら〳〵と懸くるさまなどぞいみじくしつけたるは安げなり。そよ〳〵とあまた下りて、大人だちたる人のいやしからず忍びやかなる御氣配にて、歸る人にやあらん。そのうち危し。火の事制せよ。などいふもあり。七つ八つばかりなる男兒の愛敬づき奢りたる聲にて、さぶらひ人よびつけ、物などいひたる氣配もいとをかし。又三つばかりなる稚兒の寢おびれてうちしはぶきたる氣配もうつくし。乳人の名、母などうち出でたらんもこれならんといと知らまほし。夜一夜いみじうのしり、行ひあかす。寢も入らざりつるを、後夜なと果てて、少しうち休み寢ぬる耳に、其寺の佛經を、いとあら〳〵しう、高くうち出ててよみたるに、わざと尊しともあらず。修行者だちたる法師のよむなンめりと、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。

○屏風などの高き――彼通夜の人の局をかこはんためなるべし。

一 經いろのこき也
二 ひろごりし心也
三 裝束せし也
四 童など具したる也
五 是もかのさしぬきたる人のさま也

○いとよくしんたいし――進退也、屏風の高大なるをよくもてあつかひたるさま也。

○そよ〳〵とあまた――是は籠りし人の今歸るさま也。

○あいぎやうづきおごりたるこゑ――愛敬めき驕りたる也。愛敬有りながらほこらしき童のさま也。

○めのとの名母などうち出でたらん――彼ちごの乳母の名をよび母などいひ出でたるなり。

○これならんといとしらまほし――其めのと母などは是ならんと見出で知りたきと也。

○其寺の佛經――たとへば初瀬にては觀音經、うづまさにては藥師經のたぐひ也。

又夜などは顏知らで、人々しき人の行ひたるが、青鈍の指貫のはたばりたる。白き衣どもあまた着て、子どもなンめりと見ゆる若き男の、をかしう打ち裝束たる、童などして、さぶらひの者どもあまたかしこまり、ゐねうしたるもをかし。かりそめに屏風立てて、額など少しつくめり。顏知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるは、さなンめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなどのわたりにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず。別當など呼びてうちさゝめき物語して出でぬる。

六見知りたるはこれ殿ぞと見る也
七若き男達也

枕

草

子

一句
二貴の字也
三句
四もたせたる也
五小舎人也
六摺足也
七句
八召具して也
九其人ぞかしと也
一〇局の前をすぎ行く也
一一我こゝにこもりゐる事をしらせたきと也

えせ物とは見えずかし。

○ゐねうしたるも——圍繞也、かの青鈍の指貫きたるを、侍どものたちめぐり渇仰したるさま也。

○とかくつぼねどもなどの——女中の局のわたりに立ちさまよひのぞく様也。

○別當などよびて——其寺の別當に其局の事をさゝやき問ふ也。

○えせ物とは見えずかし——心あさき若人とは見えず、いかさま心ふかき故ありげなると也。

二月卅日、三月朔日頃、花盛に籠りたるもをかし。清げなる男どもの忍ぶと見ゆる二三人櫻青柳などをかしうて、くゝりあげたる。指貫の裾もあてやかに見なさるる。つきづきしき男に裝束をかしうしたる餌袋抱かせて、小舎人童ども紅梅、朽黄の狩衣に、色々のきぬ、摺りもどろかしたる袴など着せたり。花など折らせて、侍めきて細やかなるものなど具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれど、いかでかは知らん。うち過ぎていぬるこそさすがにさうゞしけれ。氣色を見せましものを」などいふもをかし。

○さくらあをやぎ——直垂或は狩衣などにや。櫻は表白裏赤花。柳は表白裏青也。

○つきづきしきをのこに——よいころなる心也。

枕

草

子

一うちのものは かりにて也
二其つかふ人の中にもいひあはせてよき物もあれど朝夕みなれてめづらしからず也

○さうぞくをかしうしたるゑぶくろ——鷹の餌袋に見事にかざりしたる也。鷹などする人させて來たるさまなるべし。

○すりもどろかし——袴にすりゑなどみだれ書きたるなるべし。

○ごんぐ——金鼓、和名云、最勝經云妙童菩薩於二夢中一見二大金鼓一云云。ことなる佛事に樂人物の音を發せんとて圖書金鼓をうつ。又唄師音聲を發せんとても、金鼓を打つ事、江次第十三にみゆ。

○いかでかはしらん——此方には見付けたれども、あなたには見付けねば我とはいかでしらんと也。

かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所に、使ふ人の限りしてあるは、甲斐なくこそ覺ゆれ。猶同じほどにて、一つ心にをかしき事もさま〳〵言ひ合せつべき人、必ず一人二人、あまたもさそはまほし。其ある人の中にも、口惜しからぬもあれども、目馴れたるなるべし。男などもさ思ふにこそあめれ、わざと尋ね呼びもてありくめるはいみじ。

○すべて例ならぬ所に——寺籠にかぎらず。惣じて常ならぬ所に旅居などせんに、我一人斗籠るはかひなし。同じ心の女友達など具してありたきと也。

○をとこなどもさ思ふに——清少のみならず、男もかやうにおもふやらん。わざと友達をたづねありくと也。

百七

心づきなき物　祭、御祓など、すべて男の見る物見車に、只一人乗りて見る人こそあれ、いかなる人にかあらん。やんごとなからずとも、若き男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。透影にたゞ一人かくよひて、心一つにまもり居たらんよ。いかばかり心せばく、けにくきならんとぞおぼゆる。物へも行き、寺へも詣づる日の雨。使ふ人などの「我をばおぼさず。何がしこそ只今時の人」などいふをほの聞きたる。人よりは少し憎しと思ふ人の、推し量りごとうちし、すゞろなる物怨みしわれさかしがる。

○心づきなき物――此段衍文也。たゞ一人のりてといふ以下は、前のにくき物に有り。其外はおくにくはしくあれば、こゝには註せず。

百八

わびしげに見ゆる物　六七月の午未の時ばかりに、汚げなる車にえせ牛かけて、揺がし行くもの。雨降らぬ日張筵したる車。降る日張筵せぬも。年老いたる乞食。いと寒き折も、暑きにも。げす女のなり悪しきが子を負ひたる。小さき板屋の黒う汚げなるが雨に濡れぬる。雨のいたく降る日、小さき馬に乗りて、前驅したる人の冠

一 日影あきらけき時分也
二 よくもなきうし也
三 雨おほひの筵也
四 乞兒

もひしげ、袍も下襲も一つになりたる、いかにわびしからんと見えたり。夏はされどよし。

○はりむしろ――雨覆ひ服車などにむしろをはる事、西宮記に有り。其たぐひなり。

○かたい――乞兒。和名云、列子云齊有二貧者一常乞二於城市一乞兒云、天下之辱莫レ過二於是一和名加多井。

○ぜんくしたる――前驅也。馬にのりて供奉したる也。

○なつはされどよし――雨にぬれても冬のやうに寒からねばなるべし。

百九

暑げなるもの　随身の長の狩衣。袙の袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪多かる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨、日中の時など行ふ。又、同じ頃の銅の鍛冶。

○ずゐじんのをさ――近衛の番長也。環翠軒云、近衛隨身の上臈を番長といふ。秦氏下毛氏等今に隨身たる也。裝束は、褐、衣冠、又は狩衣に花をつけたり。時に依りていでたつ様々也。

○のふのけさ――袙袈裟歟、袙、和名云、俗云二能不一。智度論云、五比丘白レ佛

一 六時おこなふ日中也
二 乞食は寒暑皆佗しげなると也
三 雨にひたりしも也

一イニいさきよき
二密、ひそかにかくれゐる也
三曲隈同物のかくれ也
四忍びて人のすろ事をみるらんがはづかしきと也

當レ著二何等衣一。佛言、應レ著二衲衣一。袈裟、和名袈裟、天竺語也、此云二無垢衣一。又功德衣、俗云介佐ケサ。

○でゐの少將――出居次將は賭弓などに帶劔し弓箭をとりて、主上の出御に警蹕を講ず。江次第に、五月の最勝講七月の相撲節などにも、出居次將着座の事あり。是らの折あつげなるにや。出居の座殿上にあり。雲圖抄に委し。

○きんのふくろ――河海云、管絃の器皆袋にいるゝ事本儀也下略。

○ずほうのあざり――修法阿闍梨護摩など修する僧也。

○あかゞねのかぢ――和名云、鍛冶打二金鐵一爲レ器也。俗云二銀治一訛也。くろがねをうつも六七月には暑かるべけれど、あかゞねといへば一人あつげなるにや。

百十

恥しきもの　男の心のうち。「いざとき夜居の僧。みそか盗人のさるべき隈に隱れ居て、いかに見るらんを、誰かは知らん。暗き紛れに、懷に物引き入るゝ人もあらんかし、それは同じ心にをかしとや思ふらん。夜居の僧は、いと恥しき物也。若き人の集りては、人の上をいひ笑ひ、そしり惡みもするを、つくゞくと聞き集むる、心の中も恥し。「あなうたて、かしがまし」など、御前近き人々の、物けしきばみいふを、聞き入れず、いひくてのはては、うち解けてねぬる後も恥し。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし憑むるこそ恥しけれ。まして情有り、好ましき人に知られたるなどは、愚なりと思ふべくももてなさずかし。心のうちにのみもあらず、又皆、これが事はかれに話り、かれが事はこれに言ひ聞かすべかゝめるを、我がことをば知らで、かく語るをば、こよなきなめりと、思ひやすらんと思ふこそ恥しけれ。いであはれ、又逢はじと思ふ人に逢へば、心もなき者なゝめりと見えて、恥しくもあらぬ物ぞかし。いみじく哀に、心苦しげに見捨てがたき事などを、いさゝか何事とも思はぬも、いかなる心ぞとこそはあさましけれ、さすがに人の上をばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などを語らひて、たゞにもあらずなりたる有樣などをも知らでやみぬるよ。

○をとこの心の中――イ本ニいろこのむ男の心の中とあり、女はおろかにて、色好む男のすかし易く思はんが恥しき心也。猶あとに委し。

○いざときよゐの僧――夜をもねぬ心也。河海云、夜居僧内裏の二間に候ひて夜もすがら加持まゐる僧也云云。其恥しき心あとにあり。

○くらきまぎれにふところに――盗人の隱れゐて見るをもしらで家人の物盗む也。

五おのれもぬす人なれば也
六是よりよゐのそうのはづかしき事をいふ也
七よゐの僧の心の中はづかしと也
八ものの氣色をしらせていふ也
九若き人々のさま也
一〇是よりをとこの心の中のはづかしき事をいふ也
一一心につく事なき也
一二女を也
一三契る心也
一四よのつねの男だにはづかしきにと也
一五酒よく女をすかしたのめて淺からず思ふ人と女におもはするが恥しと也

一六此女の事はかの女にかたりなどする也
一七男の心を推察して淸少のいへる也
一八こゆる事なく思ふと也
一九女の心也、たのもしゆなしと見かぎりし男にあへはと也
二〇さやうに情もしらぬ男には恥しき事なき心也
二一彼たのもしゆなき男の事をいふ也
二二男の情なくむくつけきさま也
二三親兄弟などもなき宮づかへ人を也
二四是もたのもしゆなく情なき男のさま也

○あなうたてかしがましし——御前ちかき人の、夜居の僧のきく事を心得させんとていふ詞也。

○いひ〳〵てのはては——拾遺「世の中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん」このうたの詞書を用ゐる。

○うたておもふさまならず——男の心に思ふやうならず、もどかしと見る女も先づさしむかひてはふかく思ひがほにすかしたのむると也。

○情ありこのましき人にしられたる——情あり好色人にてありと世にもしられたる男はと也。

○心のうちにのみもあらず——男の心中の恥しきのみにあらず。しわざにもうちとけがたき所有りと也。

○我が事をばしらで——男の心中を察(サツ)していへる詞也。女の我が事をもかく人にかたらるゝをしらで、只かく外の女の事をかたるを、我をこよなく思ふ故かたるなりけりとのみ女の思はんかと男の思ふが恥しきと也。

○心もなき物なめりと——又あはじと思ひつめたる男に對しては心もなき女ぞと見えてもはづかしからぬと也。

○さすがに人のうへをば——さやうに情なき男の、かへりて人の事はうらみもどきて、我が非をいひつくろふと也。

○たゞにもあらずなりたる——彼宮仕へ人の懷妊(クワイニン)せしをも情なく見捨てて、其事をもとりあへずしてやみはてしと也。

春曙抄六終

枕草子春曙抄　巻七

一 干潟也
二 かもじといふ物也
三 さしあゆて也
四 うしろつき也
五 威勢もなき主の従者み勘當する也
六 老人のすくなき白髪さはきたる也
七 去也
八 怨也、嫉妬する心也
九 女の家出したる也
一〇 男のたづねまゝはんと思ひし也
一一 女の家に家出してもえゐぬ也
一二 我と女のかへりきたる也
一三 めきて也
一四 おもしろめかしたる也

百十一

むとくなる物　潮干の潟なる大きなる舟。髪短き人の、かづらとりおろして髪けづる程、大きなる木の風に吹き倒されて、根をさゝげて横たはれ伏せる。相撲の負けて入る後手。えせ者の従者かんがふる。翁の髻放ちたる。人の妻なゝどの、すゞろなる物怨じして隠れたるを、必ず尋ね騒がんものをと思ひたるに、さしも思ひたらず、妬げにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心と出て來たる。狛犬しく舞ふものの面白がりはやり出でて踊る足音。

○むとくなる――無徳也。せんなくよしなき事也。

○すまひのまけて――相撲の節とて禁中にある也。年中行事歌合注云、相撲といへる事は諸國の供御人をめしあつめて、七月に相撲の節といふことを行ひて、天子御覧ずる也。始めを召合せといふ。後にすぐりてめされんずるをば、ぬきてと申す下略。猶江次第雲圓抄に委し。

○心と出で來たる――イ本此次に、なま心おとりしたる人のそゞろなる事いひ

一 女の外に家出してもえゐぬ也
二 我と女のかへりきたる也
三 めきて也
四 おもしろめかしたる也

むつかりて一つにもふさじ云云とあり。前のねたき物にあれば不用。

○こまいぬしくまふものゝ――和名四曲調類高麗樂曲の中に、狛犬とてあり。此まひを舞ふものの興に乗じて躍るが無徳なるにや。伶人にとふべし。

百十二

修法は、佛眼眞言などよみたてまつりたる。なまめかしうたふとし。

○修法は佛眼眞言――是は無徳なる物にあらず、例のふと書き出でたる筆ずさびなるべし。佛眼尊は曼陀羅圖の中央にあり。一切諸の佛菩薩に圍繞せられ、諸の佛菩薩の功德を具足せり。亦佛母尊とも號せり。瑜祇經云、時金剛薩埵對二一切如來前忽然現二作一切佛母身一住二大白蓮一身作二白日晫一兩目微笑二手住レ臍如レ入二奢摩地一從二一切支分一出二生十恒河沙俱胝佛一々佛皆作二禮敬一下略。此修法の次第等眞言家祕密也。かの家に尋ぬべし。

百十三

はしたなきもの　こと人をよぶに、我かとてさし出でたるもの。まして物取らする折は。いとゞ自ら人の上など打ち言ひ謗りなどもしたるを、幼き人の聞き取りて、其人のある前にいひ出でたる。哀なる事など人の言ひてうち泣くに、げにいと哀と

一泪いでこねば也

は聞きながら、泪のふつと出て來ぬ、いとはしたなし。泣顔作り、けしきことにな せど、いと甲斐なし。めでたき事を聞くには、又すゞろに、只いてきにこそ出てく れ。

○はしたなき物——物の相應せぬ心也。よわき物につよくあたる類也。

○まして物とらする折は——只よばぬにさへさし出づるに、まして物とらすれ ば、追從に人事などいふ也。

○其人のある前——其そしられたる人の前にて童の意地わろく告げたるなるべ し。

一一條院の母后東三條院の御棧敷也

二帝の鳳輦を也

三女院よりの御消息なるべし

四御消息を敬し申し給ふ也

五清少の感涙也

六化粧也

七齊信卿、前にあり

八女院の御棧敷へ也

九句

一〇大路也

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御棧敷のあなたに、御輿をとゞめて、御消息申 させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有樣にてかしこまり申させ給ふ が、世に知らずいみじきに、まことにこぼるれば、化粧したる顏も皆あらはれて、 いかに見苦しかるらん。宣旨の御使にて齊信の宰相中將の御棧敷に參り給ひしこ そ、いとをかしう見えしか。只隨身四人いみじうさうぞきたる。馬ぞひの細うした てたるばかりして、二條の大路廣う淸らにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ參り て、少し遠くより降りて、そばの御簾の前に候ひ給ひし。院の別當ぞ申し給ひし。 御返し承りて、又走らせ歸り參り給ひて、御輿のもとにて奏し給ひし程、いふも 愚なりや。さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらん。女院の御心思ひやり參らする

二齊信卿也、馬をはやめて也

三女院の御目ぞほりならぬかたの也

三宣旨の取次申し給ふ也

四女院の御返事也、

五齊信卿也

六前に馬うちはやしてとある首尾也

七鳳輦也

八大かたの人の美々しきを見るさへと也

は、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには長泣をして笑はるゝぞかし。よろしき 際の人だに猶此世にはめでたき物を、かうだに思ひ參らするもかしこしや。

○八幡の行幸——一條院の行幸也。榮花物語さま〳〵の悅びの卷に云ふ、永延 元年といふ二月は例の神わざどもしきりて、所々の使たち何くれといふほどに 過ぎぬ。三月は石淸水の行幸あるべければ、いみじういそがせ給ふ云云。此時 の事にや。江次第十六に、石淸水行幸の次第あるべけれど今眼びたり。

○さばかりの御ありさま——還幸の諸官供奉のめでたき帝の御ありさまにて女 院の御消息を敬せさせ給ふ事也。

○みなあらはれ——洗はれ、顯れ兩說なるべし。泪に白粉のおちたる也。

○せんじの御使——帝より女院への御使也。宣旨御使なるべし。

○隨身四人——宰相中將の召し具せられし也。

○すこしとほうよりおりて——女院の御棧敷より遠くより齊信卿下馬し給ふな り。禮義也。

○院の別當——女院の大別當也。職原抄追加云院廳。

大別當、大臣公卿淸華之人任之、女院も大略院と同じ云云。

○さてうちわたらせ——女院の御棧敷の前を帝の渡御也。

○それにはながなきを——かやうのめでたき事には淸少の泪とめがたくて笑は

枕草子

一是より道隆公のめでたかりし事也
二霊也
三中關白どのの ことは也
四御許、女房を の給ふ也
五老人をわらはんと也
六女房の中へ出で給ふ也
七關白どのの沓也
八關白どののさま也
九裾也
十ところせはき也

る丶、物の哀なる事をき丶てはかへりて泪出でこぬことのありとなるべし。

○かうだにおもひまゐらするもかしこしや——いはんや帝女院などの御事は、猶かやうにおもふも恐れ多しと也。

百十四

關白殿の黒戸より出てさせ給ふとて、女房の廊に隙なく候ふを、あないみじの御許たちや。翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらんと分け出でさせ給へば、戸口に人々の色々の袖口して御簾を引き上げたるに、權大納言殿御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いと物々しう清げによそほしげに下襲のしり長く、所せくさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に、沓を取らせ給ふよと見ゆ。山の井の大納言、そのつぎ〳〵、さらぬ人々。黒きものを引き散らしたるやうに、藤壺のへいのもとより登華殿の前まで居並みたるに、いと細やかにいみじうなまめかしうて、御はかしなど引きつくろひやすらはせ給ふに、宮の太夫殿の清涼殿の前に立たせ給へれば、それは居させ給ふまじきなンめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御行のほどならんと見奉りしこそいみじかりしか、中納言の君の、忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たべ、其珠數しばし。行ひてめでたき身にならんとか」とて、集りて笑へど、猶いとこそめでたけ

枕草子

一道頼卿也
二御弟たち也
三泡也、ふしかねにて染むる也
四紫の由也
五登花殿、和名に弘徽殿の北にあり云云
六居饌也
七關白どののさま也
八關白どののさま也
九道長はつくはらせ給ふまじかりしおもへはと也
十中關白どの也
十一道長公つくはらせ給ふ也
十二前世の善業にてかく人々に尊敬せられ給ふにやと也
十三誰としらず
十四くすみおこなふ也、帝木卷に法けづきくすし

れ。御前に聞しめして「佛になりたらんこそ、是よりは勝らめ」とて打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見參らする。太夫殿のゐさせ給へるを返す〴〵聞ゆれば、「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。まして此後の御有様見奉らせ給はましかば、ことわりと思し召されなまし。

○くろ戸より——黒戸、拾芥に瀧口の戸の西とあり。大鏡云、こまつの帝と申す此御時に藤壺の上の御局の黒戸はあきたると聞き侍るはまことにや。

○權大納言殿——勘物云、伊周公正暦三年權大納言。

○したがさねのしりながく——桃華蘂葉云、裾、下襲の尻也。昔はつゞけたるを着する時煩ひ有るによりて、切りはなして着レ之也。仍つて一ッとしてかはる事なし。たけは代々の制不レ同也。但近代攝家に用ゐ來たる分は、納言以前は八尺大臣一丈闕白の時一丈二尺ばかり也。大概かくのごとし。又可レ隨レ時。

○藤つぼのへい——和名云、飛香舎在二弘徽殿北一布知豆保。

○宮の太夫殿——勘物云、御堂正暦二年權大納言、中宮大夫如レ元。榮花物語三云、六月一日正暦元年后にたゝせ給ひぬ定子太夫には右衛門督どのをなしきこえさせ給へれどとあり。是中闕白の御弟御堂の闕白道長公也。

○忌の日——齋日の事也。六齋日には殺生を斷つ事拾芥にも見ゆ。

○たべ其ずゞしばし——句を切るべし。其珠數を暫し給はれと也。中納言のあ

がらんとある詞也
一九句
二此關白殿など のやうの果報をえんとて、おこなひ給ふかと也
三后宮也
四關白どのの宿世をうらやむをきこしめして也
五后宮の御さまをほむる也
六清少の申す也
七后宮の御詞也 いつもあやしき事を感じおもふ人と也

まりに行ひ給ふをあざけりざれて、珠數をもとりて妨ぐるさま也。

○猶いとこそめでた——中納言をば笑へども實に關白殿の果報はめでたきと也。

○佛になりたらん——とても宿業の善果をうくれば、關白どのの御身よりはおこなひて佛果をえまほしきと也。

○太夫どのの——道長の中關白殿につくまはせ給ふ事也。

○此めちの御ありさま——道長公の後々の御榮花を后宮御存命にて見給はぐと也。此草紙は清少の老後、后宮薨去ののちかけるにや。

○ことわりとおぼしめされ——かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を、后宮おぼしめしあはせば我かく感じおもひし事はことわりと思召されんと也。

百十五

九月ばかり、夜一夜降り明したる雨の、今朝は止みて朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露こぼるばかり濡れかゝりたるもいとをかし。透垣、羅文、薄などの上にかいたる蜘蛛の巣のこぼれ殘りて、所々に絲も絶えざまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじう哀にをかしけれ。少し日たけぬれば萩などのいと重げなりつるに、露のおつるに枝のうち動きて、人も手觸れぬに、ふと上樣へ

一是より例の筆すさび也
二透垣也
三羅文薄也
四蜘蛛の巣かく事也
五吹きこぼれし

きま也
六イニナシ可然歟
七露にふしたるがこぼれたれはおきあがりし也
八人の心千差萬別なれは也

上りたるいみじういとをかしといひたる、異人の心地は露をかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

○絲もたえざまに雨のかゝり——蜘蛛の絲のきれぬべく雨のかゝりたる也。

○いとおもげなりつるに——イ本にの字なし。其本にしたがはゞ、いとおもげなりつる露のおつるにとつゞけて見るべし。露の風情まさりて面白きにや。

百十六

七日の若菜を、人の六日にもて騒き取り散らしなどするに、見も知らぬ草を、子どものもてきたるを、「何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず。「いざ」など、これかれ見合はせて「耳無草となんいふ」といふ者のあれば「むべなりけり、聞かぬ顏なるは」など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもて來たれば、

つめどなほみゝなる草こそつれなけれあまたしあれば菊も交れり。

といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。

○とみにも——頓の字也。やがてこたへもせぬ也。

○いざなどこれかれ——引率也。いざ見給へなど人々をさそひ催す心也。

○むべ成りけり——彼の子供きかぬかほなるは尤もなり。耳無草なればと也。

○つめど猶歟——此五文字草を摘むに、人をつみおどろかす心をそへたり。つ

一是より亦別段也
二菊の若はへ初春にもある物也
三清少のうた也
四助字也
五子供は歌の心もなければ也、是も耳無の心也

一是より別段也
二定考也
三釋奠、孔子をまつる事也
四孔子也
五聰明也、釋奠の胙也
六一條院と后宮と也

めどもきかぬがほに答へぬはつれなし。あまたある中には聞くといふ草もあるものをと也。菊を添へて也。

百十七

二月官のつかさに定考といふことするは、何事にあらん。釋奠もいかならん。孔子などは掛け奉りてする事なるべし。聰明とて、うへにも宮にもあやしきものなど、かはらけに盛りて參らする。

○二月くわんのつかさのかうぢやう——是二月列見の事なるべし。列見定考、始終の公事なればかやうにいへるにや。江次第釋奠の所にも當二列見定考一日上藏上卿參二釋奠一例天曆二八十一云云。くわんのつかさとは、太政官の官人を云ふ也。百寮訓要云、太政官といふは眞實朝家の政を成敗する所也。今官の廳など申すも此儀也。大臣公卿政務を成敗の人は太政官の被官也。辨、少納言、外記史など申す儀式官も皆太政官の内の官也。列見とは公事根源云、公卿辨少納言外記史など參りて太政官にて行へる公事也。六位以下の藝能ある者を撰びて、式部兵部の二省より率してまゐれるを、上卿それを召しよせて器量容儀を見る心也。朝所并宴穩の座につきて儀式あり。委しき事は定考の所にしるし侍るべし。中略。定考とは公事根源云、是は昔六位以下の加階する人は、彼藝能

行跡恪勤を撰びて、官爵を給ひける也。上卿、官の東の廊の座に着きて事を行ふ。次に朝所につきて三献の儀式あり。次に宴穩の座につく。各三献あり。大かた二月の列見におなじ。式兵の二省より、諸司の輩の上日を選成する事を列見といふ。それを書きあつめて奏するを、擬階奏といふ。此人々を撰び出でて定め侍るを定考とは申し侍る也。定考と文字には書きて侍れども、からぢやうとよみ侍るが口傳にて侍る也。選叙令に委事はのせたり。其儀などは次第に見えたり。

○くじなどはかけ奉りて——釋奠に孔子の像を掛けてまつるにやと也。釋奠は二月上の丁の日なれば、おなじ二月の中に公事をとりあはせていふなるべし。公事根源云、釋奠、是は二たび二月と八月とにあり。上の丁の日必ずおこなはる。大學寮にて孔子並に十哲の影をまつらる。上卿辨少納言などまゐりて廟拜にたち、宴穩の坐に着く、文章博士題を出す。孝經禮記毛詩尚書論語周易左傳年にめぐりて用ゐる、明くる日釋奠の胙をまゐらす。藏人持ちて朝餉の前に進む。藏人又一人御手水の間のかたの簀子にて、あれは何ものぞといふ。藏人答へて、ふんやのつかさの奉れる昨日の釋奠の胙ぞと文字を長くいひて、高く捧げて簾中に入る也。中下略。禮記王制云、釋菜奠幣二先師一。月令仲春將釋二奠之一。猶延喜式江次第等委。仁平三年八月台記云、先聖先師九哲像巨勢金岡所レ寄云云。

○そうめいとて――イ本そうめうとて、聰明これかの公事根源に、明くる日釋奠の胙をまゐらするとある事也。江次第五釋奠の所に云祭官居二聰明一以二折敷高坏等一羞二公卿一。註聰明者胙也。餅白黒 粱飯粟黄乾粟也、胙字彙云音祚祭福肉也。

○あやしき物などかはらけに――かの餅粱飯などなれば也。

百十八

「頭辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、白き色紙に包みて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもて來る、繪にやあらんと急ぎ取り入れて見れば、餅餤といふ物を二つ並べて包みたるなりけり。添へたるたて文に、花文のやうに書きて「進上餅餤一包、例によりて進上如レ件。少納言殿に」とて、月日書きて、任那の成行とて、奥に「此をのこは自ら參らんとするを、書はかたち惡しとて參らぬ也」といみじくをかしげに書き給ひたり。御前に參りて御覽ぜさすれば、「めでたくも書かれたるかな。をかしうしたり」など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。返事はいかゞすべからん。此餅餤もてくるには、物などや取らすらん。知りたる人もかな」といふを聞し召して、「惟仲が聲しつる。呼びて問へ」との給はすれば、はしに出て「左大辨に物聞えん」と侍して言はすれば、「いとよくうるはしうて來たり。」あらず、私事也。もし此辨、少納言などのもとにかゝる物もてきたる下部などには、

枕草子

一 行成卿也
二 使なるべし
三 繪をつゝみたるやうなるもの也
四 むかしはかやうの物を花につけて送りし也
五 清少への送り物也
六 餅餤たり、列見の時すうるもの也、胙也
七 是も行成のみずからの給ふたはぶれ也
八 后宮へ也
九 后宮御詞

一〇 べいたんのつつみやりしを也
一一 清少のひとりごとに申す也
一二 后宮の聞かせ給ひて也
一三 惟仲の官をよぶ也
一四 惟仲、后宮のめしかと思ひてまゐりしさま也
一五 清少詞、后宮のめしにはあらずと也
一六 餅餤也、
一七 藏などつかはす事あるかと也
一八 惟仲の詞也
一九 清少の詞いかでさやうの事あらんと答ふる也
二〇 清少の返事の詞也
二一 行成のみづからの給ふ詞也
二二 清少の出合ひする事やある」と問へば、「さる事も侍らず。只とゞめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、得させ給へるか」といへば、「いかゞは」といふ。只返しをいみじうあかき薄様に「自らもてまうでこぬ下部は、いとれいたうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして「下部さぶらふ」と給へば、出てたるに、「さやうの物ぞ歌よみしておこせ給へると思ひつるに、美々しくも言ひたりつる哉。女少し我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどに、さる事いはん人は、かへりて無心ならんかし」との給ふ。則光、なりやすなど笑ひて止みにし事を、殿の前に人々いと多かりけるに、語り申し給ひければ『いとよくいひたる』となん給はせし」と人の語りし。是こそ見苦しき我讃めともなりかし。

○へいだんといふ物を――餅餤、裏餅の中に鵝鴨などの子雜菜等をいれ、麦合はせて四方にきりたる物也。一名餅膳ともいふと和名にあり。是二月の列見にも八月の定考にも上卿以下の公卿諸臣等に三献或は四献ののちすうる物なり。江次第列見の所に四献餅餤云々。定考にも臨事朝所宴座儲座等皆用二列見儀一と江次第八に見えたり。

○けもんのやうに書きて――花文綾、花文紗のたぐひのやうに、うるはしくかゝれし也。行成卿は三跡の一人也。

たる也
四行成詞
五しさまの風流のものなれば也
六歌はよまでかくいひしをほめ給ふ也
七世上の我はがはする女はと也
八歌よみがましからぬが語らひよきと也
九無心也
一〇是は清少事を道隆へ行成の語り給ひし事を云ふ也
一一道隆公なるべし

○みまなのなりゆき――任那成行、行成卿の作り名なるべし。
○これなか――平惟仲權中納言時武息。左中辨。中宮大夫。大宰權帥中納言從二位公卿補任。
○此辨少納言などのもとに――行成より我得たるをまぎらはし隱して問ふ詞也。列見定考小辨や少納言などに粉熟餅等をすうる事あれば辨少納言のもとにと云ふ也。
○上官のうちにて――じやう官は太政官の外記史などをいふ也。其へいだんはもし太政官の官人などより得給へるかと也。
○みづからもてまうでこぬ下部はいとれいたう――前に行成の此男はみづから參らんとするをといへるを請けて自持ちて來ぬ下部は非道ぞと也。行成のみづからおはせぬをとがめし詞也。れいたうは戻道にや道理に背きもとりし心也。
○下部さぶらふ――彼清少のみづからもてこぬ下部はといへるに付けて行成の下部侍ふとの給ふ也。
○さやうの物ぞ――赤き薄様に書きて紅梅に付けたる物は歌よみてぞおこせたると思ひしにと也
○のりみつ――前に左衞門尉則光とて清少の歌よみしかば更に見侍らじとてあふぎ返したる人也。

一中宮職也
二六位のみならでもと也
三正體もなき事を也
四何ぞとがめし詞也
五からぎぬの短きをいはんとて也
六からぎぬといふも尤もといはんため也
七句
八イうへのはか

○なりやす――誰とも不知、是も歌を嫌へる人にや。
○笑ひてやみにし事を――清少に歌讀み懸けられて、則光なども恥ぢ笑ひて止みにしに、行成にはさはならで、此詞をいひおこせしと、關白殿の前にて行成のほめ話り給ふ也。
○これこそ見ぐるしき――人のほめ給ひし事を此草紙にかく事、見苦しき自讃と也

百十九

などてつかさ得はじめたる六位笏に、職の御曹司のたつみの隅の築土の板をせしぞ。更に西東をもせよかし。又五位もせよかし」などいふ事を言ひ出でて、「あぢきなき事どもを、衣などにすゞろなる名ども付けん、いとあやし。衣の名に、細長をばさも云ひつべし。なぞ汗衫は、尻長と云へかし。をの童の着るやうに、なぞ唐衣は、短き衣とこそいはめ。されどそれは、唐の人の着るものなれば。うへの衣の袴、さいふべし。下襲もよし。又、大口、長さよりは口廣ければ。袴いとあぢきなし。指貫もなぞ。足ぎぬ、もしはさやうの物は、足袋などもいへかし」など、よろづの事をいひのゝしるを、「いであなかしがまし。今はいはじ。寢給ひね」といふいらへに、夜居の僧の「いとわろからん。夜一夜こそ猶の給はめ」と、にくしと思

枕草子

ひたる聲ざまにて言ひ出てたりしこそ、をかしかりしに添へて驚かれにしか。

○なとてつかさ――是より清少ごとき女房などのいひしろひしそゝろごとをかけり。

○六位しやくに――新藏人の笏に此築地の板をせし事清少の在世の比有りしにや。つかさえしはじめとは、任官の初めをいふ也。六位は藏人なるべし。

○ほそながをさもいひつべし――芹花抄云、ほそなが貴女の着る物也。一勘幼き上萬の上にきる物也。其形細く長ければ其名さもいふべしと也。

○かざみはしりながと――花鳥云、かざみは童女のきる物也。西宮抄、汗衫カザミ尻長き物なるべし。

○からぎぬはみじかきぬと――和名に背子形如二半臂一無レ腰云云。腰なきゆゑにみじかきぬとこそいはめと也。

○うへのきぬのはかま――表袴の事也。桃華蘂葉云、表袴中少將より大臣大將に至る迄も着す。若年の時は白き浮線綾、裏裳の浮文を用ゐる。裏は紅打平絹也下略。

○おほくち――桃華蘂葉云、赤大口生平絹紅に染めて用ゐる也。濃き裝束には、濃平絹也。名目抄云、大口は生、平絹、幼年目白、長年紅。

1 可用歟
九 句
10 何のゆゑにいふ名ぞあげきなしさ也
二 足をいゝ、物なれは也
三 清少詞也、いでは發語の詞也
三 寮給はんは題しからんと也、あまりの事にいふ詞也。

枕草子

百二十

故殿の御ために、月毎の十日、御經佛供養させ給ひしを、九月十日職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人いと多かり。清範講師にて說く事どもいと悲しければ、ことに物の哀深かるまじき若き人も皆泣くめり。果てて酒飲み、詩誦じなどするに、頭中將齊信の君「月秋と期して、身いづくにか」といふ事をうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思ひ出で給ひけん。おはします所に分け參る程に、立ち出でさせ給ひて、「めでたしな。いみじう興の事に言ひたる事にこそあれ」との給はすれば、「それを啓しにとて、物も見さして參り侍りつる也。猶いとめでたくこそ思ひ侍れ」と聞えさすれば「ましてさ覺ゆらん」と仰せらるる。

○故殿の御ため――入道關白道隆公薨じて後の事也。長德元年四月十日に薨の由榮花物語にあり。

○月と秋ときして――朗詠菅三品の句也、南樓翫レ月人月與レ秋期而身何去。文粹十四願文の句也。

○いみじうけうの事にいひ――興ある事と也。彼詠吟の事をの給ふ也。又希有の事にてもあるべし。いづれも大切の事と也。

○ましてさおぼゆらん――齊信清少に心ある中なれば、清少は一入齊信をめで

一 道隆公の忌日也
二 清範、前に註す
三 講師
四 說法也
五 法事果てて也
六 齊信卿、前に註す
七 期
八 句
九 后宮の御座にまゐりて此咏吟の事いはんとて也
10 后宮出御也
二 后宮の御詞也
三 清少詞、齊信卿の吟の感ある事を申上ゆんとて也
三 后宮の御詞也

たくおぼゆらんと御たはぶれの詞也。

わざと呼びもいで、自らあふ所にては、「などかまろを、まほに近くは語らひ給はぬ。さすがにくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるをいとあやしくなん、さばかり年頃になりぬる得意の疎くてやむはなし。殿上などに明暮なき折もあらば、何事をか思ひ出にせん」との給へば「さら也。難かるべき事にもあらぬを、さもあらんのちには、え譽め奉らざらんが口惜しき也。うへの御前などにて、役とあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか。只思せかし。傍痛く心の鬼出て來て、いひにくく侍りなん物を」と云へば、笑ひて「など、さる人しも、よそ目より外に譽むる類多かり」との給ふ。「それがにくからずはこそあらめ。男も女も、け近き人を方引き思ふ人の、いさゝか惡しき事を云へば、腹立ちなどするがわびしう覺ゆるなり」と云へば、「たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

○わざとよびもいでおのづから――齊信の清少を態とよびいでても、又自然あふ所などにてうらみ給ふ事を云ふ也。

○殿上などにあけくれなき――今齊信の殿上人にて清少もかく度々まみゆる時逢ひかたらはで、昇進の後など殿上にもあらざらん時は何を思ひ出にせんと也。齊信當官頭中將也。

○さら也――勿論の事と也。

一 是れより齊信と清少の中のことをいへり
二 齊信の詞
三 八雲云、うるはしく也
四 清少の思ひはなれしにはあらぬと也
五 得意也、いひかたらふ中の事也
六 清少の詞也
七 逢ふ事はかたからねどもと也
八 齊信をほなるを誰も役としてほむるにと也
九 句
一〇 實事はなくて貝に心ばかり通はし給へと也
一一 齊信也
一二 齊信の詞也、夫婦なる人他人上りばなるわれは、逢ひ見んのちも流慮あるまじき事と也
一三 清少詞
一四 方引也、贔負の心也
一五 我がおもふ人を人の少しもそしるをはらだつを見れは清少は侘しきと也
一六 齊信の詞

○さもあらんのちには――若し夫婦となりては、あたら齊信をえほめまゐらすまじきと也。

○いかでか――句をきるべし。人のほむる時も夫婦なる身になりては、いかでかほめまゐらせんと也。

○心のおに出で來ていひにくゝ――ほめたき折も心に夫婦とおもふを遠慮出で來ていひにくからんと也。心の鬼とは心のあやまりを我と恥ぢおもふやうの心也。

○それがにくからずはこそあらめ――夫婦なる人をほむるがにくきゆゑ我は遠慮ありと也。

○たのもしげなの事や――思ふ人を惡くいふを腹立つ人こそ頼もしけれ。それを侘しとはたのもしげなしと也。畢竟清少の逢ふまじき氣色なれば、頼むかたなき心をこめていへるなるべし。

百二十一

一 頭の辨の職に參り給ひて、物語なとし給ふに、夜いと更けぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなば惡しかりなん」とて參り給ひぬ、つとめて、藏人所の紙屋紙引き重ねて「後のあしたは殘り多かる心地なんする。夜を通して、昔物語も

一 是より行成との中の物がたり
二 禁中の御物忌
三 籠らんと也

三丑の時より也
四通夜の心也
五鶏にさそはれて早く別れ出でしと也
六裏表和名、文のうらおもてに也
七清少の返事也
八孟嘗君也、歸さを急ぎてきこえならぬ鳥をなかせ給へるにと也
九又行成卿よりの文也
一〇孟嘗が客三千人やう〳〵のがれさりし也
一一朝清少に逢はんとの事と也
一二清少のうた也
一三たはからるゝ事は侍らじとの心也
一四又行成より也

聞え明かさんとせしを鶏の聲に催されて」といいみじう清げに、裏表に事多く書き給へるいとめでたし。御返りに「いと夜深く侍りける鳥の聲は孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ち歸り、「孟嘗君の鶏は、函谷關を聞きて、三千の客わづかに去れり」といふは、逢坂の關の事なり」とあれば、

「夜をこめて鳥の空寒はばかるとも世に逢坂の關は許さじ」

心かしこき關守侍るめり」と聞ゆ。立ち返り、

「逢坂は人越えやすき關なれば鳥も啼かねとあけて待つとか」

とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。のちのちのは御前にて。

○しきにまゐり給ひて――行成中宮職にて清少とかたらひ給ひし也

○藏人所のかうやがみ――藏人所にある紙屋紙也。行成今藏人頭なれば、此所の紙を清少への後朝の文に用ゐられしにや。藏人所は校書殿にあり。拾芥云、恒例御物納二藏人所一云々。紙屋紙とは弄花抄云、紙屋の人初めていろ紙をすき出せる也云々。北野のかみや川にてすきし紙也。

○まうさうくん――孟嘗君が函谷關をこえし事也。玄旨百人一首抄云、孟嘗君といひし人秦王にとられしが、夜にまぎれてのがれし時函谷の關鶏の鳴かぬ限りは人を通さず。孟嘗君が三千の客の中に鶏明とて鶏のまねをよくする者まね

一孟行成のうた也
二鳥の聲に催されての文也
三降緣也、前に註す
四拜みて也、懇望のさま也、行成の筆を執して也
五后宮也

をしければ、誠の鳥も鳴きて夜深きに關を明けて通しけり云々。猶史記列傳十五に委し。

○夜をこめて鳥の歌――後拾遺集に入る。玄旨云、はかるとはたばかる也。相坂の關はゆるさじとは逢ふ事をゆるさじと也。惣の心は明か也。扨て函谷の關と相坂とをやすらかに一首によみ出でける事上手のしわざ也。又よに逢坂のよにといふ詞は助字也。遊軒云、夜深きに鶏の鳥をたばかり給ふとも、此逢坂は函谷のごとくにゆるすまじきと也。彼の行成の夜深く歸りて、心淺きやうなるをまぎらはさんとて、鳥のこゑに催されてと鶏りの給へるを、さやうの鶏にたばかられては逢ひ侍らじとの心をいへる也。

○あふさかは人こえやすき歌――此返歌の心は、清少の鶏の鳥には逢坂の關をゆるさじといへるをうけて、鳥のそらねをはかるまでもなし。唯此關はあけてまつぞといふ事にやとなり。清少に詞じちをとられていひやらんかたなさに、まげていひなしたる歌也。すでに逢ひ語らふ中なれば、むづかしき詞とがめにとりあはぬ心なるべし。

○のち〳〵は――まうさう君の鶏はとの文と、逢坂は人こえやすきの歌のと也。

一清少のまけて返歌せざりしと也、畳は清少の

さて「逢坂の歌は詠みへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給ふ。「さて其文は殿上人皆見てしは」との給へば、「まことに思しけりとは、これにて

うたをはめて悪しとの給ふ詞也
二是より行成の清少の文の事をいへる詞也
三清少の答也
四名言秀歌などを人に聞かせぬはかひなしと也
五我見ぐるしき手跡を人に見せ給ふ恨みに悪しかくいふ也
六後人々に見せし事を遠慮なき事と清少のかこたんと思ひしにと也
七清少の詞也、これは何事ぞよく見せ給ひしと悦びこそせめと也
八行成の詞也
九人にみせはも也
一〇前に註す
一一經房の詞也、清少にの給ふ也

こそ知りぬれ。めてたき事など人のいひ傳へぬは、甲斐なきわざぞかし。又見苦しければ、御文はいみじく隠して、人に露見せ侍らぬ。心ざしのほどを比ぶるに、ひとしうこそは」といへば、「かう物思ひ知りていふこそ猶人々には似ず思へど『思ひ隈なく悪しうしたり』など、例の女のやうにいはんとこそ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「ことなぞ、よろこびをこそ聞えめ」などいふ。「まろが文を隠し給ひける。又、猶うれしき事也。いかに心憂くつらからまし。今よりも猶頼み聞えん」などの給ひて、後に、經房の中將「頭辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の賞めらるゝほいみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。「嬉しき事も二つにてこそ。かの譽め給ふるに、又思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それは珍しう、今の事のやうにも悦び給ふかな」との給ふ。

○殿上人みな見てしは――清少のまうさうくんのにやといひ、夜をこめてとよみし文どもを感にたへずして人々に行成の見せ給ふと也。

○まことにおぼしけりとは――行成の我を眞實におぼすとは、此文を人々に見せ給ひしにて知りたると也。是我見ぐるしき手跡を人に見せられしを恥ぢ恨むる心を態と裏を云ふ也。

○御文はいみじくかくして――我文を人に見せ給へるが、満足ならぬ事をいはんとて、かへりて行成の文見ぐるしければ、人には見せぬと、是もうらをいふ詞也。前にはじめの文は僧都にまゐらせ、のち〳〵のは后宮へ見せ申せし上にかくいへるにて、裏を云ふと知るべし。

○こゝろざしのほどぞくらぶるに――行成の人に見せ給ふも我をおぼす故也。我が人に見せぬも行成の御ためなれば、心ざしはひとつぞと也。是もたはぶれ也。

○いみじくうれしくなどまめやかにの給ふ――思ふ人にかくほめられて嬉しく思ふらんと眞實にの給ふと也。これも彼の清少の行成にいひし事は、皆うらをいひたるたはぶれとしらで、經房のいへるとの心也。まめやかといふに心を付くべし。

○かのほめ給ふなるに――只ほめ給ふが嬉しきに、又おもふ人々の中にてほめらるゝは二つ嬉しきと也。是も實に嬉しきにはあらずたはぶれ也。

○それはめづらしういまの事のやうに――是も經房清少の戯としらで、事あたらしく嬉しき事二つと悦ぶと不審していへる詞也。

三孟嘗君のこたへ夜をこめての歌の事なり也
三清少の詞也、うれしき事二つありと也
四句
五らんイ
六つねふさの詞也
七事あたらしく今始めたるやうにと也

一是より別の事

五月ばかりに、月もなくいと暗き夜「女房やさぶらひ給ふ」と聲々していへば「出

枕草子

一 也
二 后宮の御こと也
三 清少也
四 これはたれぞ也
五 かの女房をよぶ殿上人たちのさま也
六 管竹和名
七 清少の詞也
八 竹をいれし人を聞きてたれとゝもしらず
九 行成の詞也
一〇 仁壽殿のさへのくれたけたるべし
一一 后宮の御かたへまゐりて也
一二 清少のこのきみといひし事也
一三 清少はたれに書ひて此名をしりたるかと也
一四 清少の詞也
一五 イめかし

てて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「こは誰ぞ。おどろ〳〵しうきはやかなるは」といふに、物も言はで、御簾をもたげて、そよろと差し入るゝは呉竹の枝なりけり。「おい、この君にこそ」と言ひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らん」とて、中將、新中將、六位どもなど有りけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて「怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて歌詠まんとしつるを職に參りて、同じくは女房など呼び出でてを」と言ひて來つるを、呉竹の名をいとくいはれて、いぬるこそをかしけれ。誰が教へを知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などの給へば、「竹の名とも知らぬ物を、なまねたしとや思しつらん」と言へば、「まことぞえ知らじ」などの給ふ。まめごとなど言ひ合はせて゛給へるに、「此君と稱す」といふ詩を誦じて、又集り來れば「殿上にていひ期しつる本意もなくては、など歸り給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ」との給へば、「さる事には何のいらへをかせん。いとなか〳〵ならん。殿上にてもいひのゝしりつれば、上も聞し召して興ぜさせ給ひつる」と語る。辨諸共に、返す〴〵同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人々いでて見る。とり〴〵に物どもいひ交はして歸るとて、猶同じ事を諸聲に誦じて、左衞門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いととく少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、此事を啓したれば、しもなるを召して「さる事やありし」と問はせ給へば「知らず。何とも思はで云ひ出て侍りしを、行

枕草子

一七 清少はよもえしらじと行成の詞也
一八 中將、新中將などの詠吟也
一九 行成の詞也
二〇 期也、約束の心也
二一 殿上人の詞也
二二 かやうの名言にはなまじひの返答はせざらんがまさらんとの心也
二三 一條院也
二四 行成也
二五 此君さし上うすの句也
二六 あまり朗詠すれば也
二七 建春門也
二八 朝也
二九 殿中の女房也
三〇 清少の職に侍らぬをめして后宮のことばせ給ふ也
三一 清少の答也

成の朝臣の取りなしたるにや侍らん」と申せば「取りなすとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人を喜ばせ給ふもをかし。

○おどろ〳〵しうきはやか——驚かるゝやうにきはをたてゝきつと人をよぶ心也。

○おいこのきみにこそ——おいはあゝなどいふ詞也。此君は竹の名也。晉の王子猷空宅の中に寄居して竹を植ゑて嘯詠して曰、何可二一日無二此君一。この故事にて云ふ也。

○いさやこれ殿上に行きて——殿上人達此竹の歌よまんとてきたりしかど、清少に此君といふ詞を先せられてにげかへるといへる詞也。

○よび出でてを——女房などよび出でて諸ともによまんとのこゝろ也。

○竹の名ともしらぬものを——清少は竹の名ともしらで、殿上人なれば此きみといひし物をと也

○此君としようすと——朗詠藤篤茂、晉騎兵參軍王子猷種而稱二此君一。これ本朝文粹十一に修竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞也。

○殿上にていひきしつる事のほいもなくては——后宮の女房などと歌よまむといひ期したる本意もとげずして何とて歸り給ひしぞと也。

三是より后宮の御心はせをいふ也
三さやうにはめいはる・人を也

○御文まゐらせたるにこの事をけいしたればーー少納言命婦みかどの御文を后宮へまゐらするとて此清少の名言を殿上人のほむる事を申上げしとなり。
○とりなすとてもーー たとひ取りなしていふとても一向に跡なき事はかくほめ草にはせじとの心也。

百二十三

枕草子

一禁中也
二圓融院にめしつかへし人也
三一條院の御めのとのよし後拾遺集の詞書に見えたり
四椎の葉のしろきにや
五藤三位のかたの女房の詞也
六蕊をもあけぬと也
七藤三位の女房の詞也
八なほしの上などにかの木の枝の文を也

圓融院の御果ての年、皆人御服脱ぎなとして、哀なる事を公より始めて、院の人も「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨いたう降る日、藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の大きなる木の白きに、たて文をつけて、「これ奉らん」といひければ「いづこよりぞ。今日明日御物忌なれば、御蔀も參らぬぞ」とて、しもは立てたる蔀のかみより取り入れて、「さなんとは聞かせ奉らず。物忌なれば得見ず」とてかみについさして置きたるに、つとめて手洗ひて、其卷數とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけもて行けば、老法師のいみじけなるが手にて、

椎柴の袖

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる

と書きたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらん。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝる事の給はじ。猶誰ならん。藤大納言ぞ、かの院の

枕草子

九藤三位也
一〇歌とはしらで祈念の發願とおもふ也
一一厚肥也、あつき也
一二一條院の聽ゝせさせ給ひし也
一三一條院御うた
一四藤三位の心也
一五物いみゆゑ早々まゐりていはぬを心もとなきと也
一六藤陽師などの勘へいひたる也

別當におはせしかば、其し給へる事なめり。これを上の御前、宮などに、とう聞しめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、猶恐ろしういひたる物忌をし果てむと念じ暮らして、またつとめて、藤大納言の御許に此御返しをしてさし置かせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。

○ゑんゆうゐんの御はての——圓融院、一條院の御父帝也。正暦二年二月十三日に崩御三御はてとは御一周忌の事也。正暦三年二月の事也。
○みな人御ぶくぬき——御一周忌過ぎて服衣をぬぐ也。除服の祓とて河原に出でて禊事をなす事などあり。
○花の衣になど——仁明天皇の御果過ぎて人々叙爵などせし時、遍照「皆人は花の衣に成りぬ也苦の袂よかわきだにせよ。」古今にあり。又榮花物語四に、かくて月日も過ぎもて行きて、正暦三年に成りぬ。哀にはかなき世になん、二月には故院の御果あるべきなれば、天下急ぎたり、御はてなどせさせ給ひつ。世の中のうすにびなどはてて花の袂になりぬるもいと物のはへあるさま也云云。
○みのむしのやうなるわらは——雨ふりて笠蓑きたるさま也。誰方よりともしらすまじきとてかやうにせし也。
○さなんとはきかせ奉らず——かやうの使有りと藤三位殿には申さずと也。物忌なれば遠慮して也。
○くるみいろ——源氏にも、こまの胡桃色の紙とあり。表は香色に裏は白き

紙也。

○これをだにかたみと歌――後拾遺の歌也。詞書この草紙と同心也。これをだにとは、服衣をなりともと也。しひしばの袖とは八雲御抄に四位の異名云云。服をだに故院の形見と思召すに、藤三位は服ぬぎ加階せしよと也。藤三位、四位より加階せしなるべし。山僧のせしやうに懇と都にはと也。

○仁和寺の僧正――榮花物語三云、仁和寺の僧正と聞ゆるは、土御門の源氏のおとゞの御はらからにおはす、にわじのみことときこえける御子におはす云云。寛朝僧正也。式部卿敦實親王の三男雅實公の御弟也。

○藤大納言――圓融院の別當ときこゆ。いまだ誰とも勘へ侍らず。

それを二つながら取りて急ぎ參りて、「かゝる事なん侍りし」と上もおはします御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さはこは誰がしわざにか。すきゞ〳〵しき上達部、僧綱などは誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、うへ、「此わたりに見えしにこそは、いとよく似たゝめれ」と打ちほゝゑませ給ひて、「今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「いであな心うこれおぼされよ。あな頭痛や。いかで聞き侍らん」と、たゞ責めに責め申して恨み聞えて笑ひ給ふに、やう〳〵仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の

心也
九帝也
一〇一つといふ心也
一一藤三位詞
一二イおぼせられ
一三帝の御〳〵わざを知りながらしらぬさま也
一四后宮の詞也
一五椎柴のかたの手跡の事也
一六藤三位詞、さてはこれは也
一七物すきなる也
一八うたがひたる刀自といふ者の供なりけるを、小兵衛が語らひ出したるにやありけん」など仰せられば、宮も笑はせ給ふを、引き揺がし奉りて、「なとかくはからせおはします。猶疑もなく手を打ち洗ひて、伏し拜み侍りし事よ」と笑ひねたがりゐ給へるさまも、いと誇りかに愛敬づきてをかし。さて、上の臺盤所にも笑ひのゝしりて、局におりて、此の童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を誰が取らせしぞ」と云へば、しれ〴〵と打ち笑みて、ともかくも言はで走りにけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

一九帝也
二〇使也
二一打也
二二山法師の卷數
二三思ひし故也
二四藤三位のつぼね也
二五みのたゞのやうにて來し童也
二六わらはが體也無知〳〵しわらひゐる也
二七院別當也

○それをふたつながら――椎柴の袖のうたと藤大納言の返歌と二つをもちて、藤三位參内する也。

○僧がう――僧綱也。僧正、僧都、律師などをいふ也。

○此わたりに見えしにこそはいとよくにためれ――其老法師の歌は帝の御かたにあるうたに似たるとて、御厨子のもとなる御詠草を取りいでさせ給ふ也。

○これおぼされよ――是いかなる御事ぞ、おぼしめして御覽あれと也。猶誰がしわざとしられぬゆゑ也。

○おにわらはは――みのむしのやうなると有りし首尾也。鬼童丸とて古ありし也。

○小兵衛――后宮の女房。前にありし人也。

○ひきゆるがし奉りて――后宮を藤三位のかこちまゐらせらるゝさま也。帝をかこち申さんは憚りあれば也。

○いとほこりかにあいぎやうづき――御乳母なればほこれるものから、さすがに愛敬ある也。

○だいはん所にも――禁中の臺盤所は女房の侍ひ也。彼刀自がわらはを尋ね出でむため也。

○文とりいれし人に――かの使のわらはは、是かとて其文うけとりし藤三位の女房に見すれば也。

百二十四

つれ〴〵なるもの　所さりたる物忌。馬降りぬ雙六。除目につかさ得ぬ人の家。雨うち降りたるはましてつれ〴〵なり。

○ところさりたる物いみ――ふかくつゝしむ時、家をさり外にて物忌する也。

○むまおりぬ双六――馬は賽の事也。晉書袁彥道が傳に、投レ馬絕叫とあり。是博局にむかひての事也。むまおりぬは双六に思ふ目のおりぬ也。

一しづかにさびしき事也　二除目に官をえぬ也

つれ〴〵慰むる物　物語。碁。雙六。三四ばかりなる稚兒の物をかしういふ。又いと小さき稚兒の物語したるが、笑みなどしたる。くだ物。男のうちさるがひ、物よくいふが來るは物忌なれど入れつかし。

○をとこのうちさるがひ――前にさるがふ事とあるにおなじ。猿樂とて狂言などいひたはるゝ也。

○物いみなれど――つゝしむ折なれど興ある人なればいるゝと也。

百二十六

取り所なきもの　容貌憎げに心あしき人。御衣褶糅のぬれたる。これいみじうわろき事いひたると、萬の人憎むなる事とて、今止むべきにもあらず。又、門燎の火筋といふ事、などてか。世になき事ならねば、皆人知りたらん。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、此草紙を見るべき物と思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はん事の限りを書かんとて有りし也。

○みそひめ――褶糟、或說云、非米作レ粥之義也と和名にあり。衣にひめのりして張るは、こはくせんためなるにぬれてはとり所なかるべし。

○あと火の火ばし――門燎火筋也。あとかと五音相通也。和名云、周禮云、喪設二門燎一爰云門火。但此一句禁忌の事なれば時によりて義をつくまじき歟。

一衣褶糅也　二書くまじきにもあらぬ也　三是も取所なき物也　四火筋和名五句　六又ゆにかくまじき事なれども也　七此さくら草紙の中ド也　八書さて有りし也

一菓子也　二イに

○などてか――句をきるべし。禁忌の事ながらいかでか書き出づまじきぞと也。
○あやしき事をもにくき事をも――あやしき事は衣糊糅也。にくき事はあとびは人のいみにくむ事なれば也。

百二十七

一試樂也　二石清水臨時祭也　三掃部　四主上の御前也

なほ世にめでたき物　臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。春は空の氣色のどかにて、うら〳〵とあるに、清涼殿の御前の庭に、掃部づかさの、疊どもを敷きて、使は北面に、舞人は御前のかたに、これらは僻事にもあらん。

○りんじのまつり――江次第六云、石清水臨時祭三月中午日、有三二年一時、用二下午一。賀茂臨時祭十一月下酉日。なほ次第等委圖は雲圖抄にあり。
○おまへばかりの事――臨時の祭に御前の座といふ事あり。庭座ともいふにや。外になき事なれば、御前ばかりの事といふなるべし。江次第六略云、御前座事御裝束をはりて主上出御ありて倚子に着御あり。藏人頭召の由を告げて公卿以下壁下の座に着く。又藏人頭仰せを承つて、使、舞人以下を召して一献二献過して大臣氈座に着く。さて三献過して垣下の公卿着座あり。御重をすう。さて陪從音樂をなして歌曲の聲を發す。四献五献過して舞人陪從重盃を給ふ。

一陪從、地下の樂人也

さて挿頭の花を給うて、使は左のかたにかざし、舞人は右の方にかざす。さて使以下退出すれば、内藏寮撤二饌物等一。掃部撤レ座主殿掃除云云。雲圖抄に圖あり。
○しがくもいとをかし――試樂、りんじのまつりの音樂を先づこゝろみる心也。石清水の臨時祭の試樂は、祭の前一兩日に行レ之。賀茂同レ之と雲圖抄にあり。圖もあり。御殿の孫庇に倚子たてて出御ありて、四位藏人舞人をめせば、舞人竹臺のもとにて竹の枝を折りかざして、仁壽殿の廊の下より御前につらなり、陪從近衛の召人、求子うたひ、琴笛ひちりきのねをあはせ、舞人舞終りて、大比禮かへしうたひてまかり出づる由公事根源にあり。猶次第は江次第に委し。
○かもりづかさのたゝみども――百寮訓要云、掃部寮は御裝束の事を奉行する所也。但し是もむしろ風情の物を沙汰する所也云云。職原抄にも掌二鋪設事一云云。
○つかひは北おもてに――賀茂の臨時祭の使の座は北面、南祭の時は又南面なるよし雲圖抄にあり。此草紙のさまは南祭のよしなれば不審也。よりて是らはひが事にもやあらんといへるにや。大やうに書きたるなるべし。
所の樂ども御重ども取りて、前ごとに据ゑ渡し、陪從も、其の日は御前に出でている

一句
二なのこのさりひろふさへ見にくきにと也
四火燒屋、又炬舍同じく河海にあり
五かる〳〵しく也
六納殿、宣陽殿にあり、こゝはたゞこへ也
七掃除する也
八音樂する也
九有度濱綾河舞のうたひもの也
一〇江次第に漸出
一一藏人所雜色二人舁二御琴一とあり
一二そゝろに面白きさま也
一三一舞二人先進云云
一四次舞也

ぞかし。公卿殿上人はかはる〴〵盃取りて。はてにはやくかひといふ物、男などのせんだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらんとも知らぬに、火燒屋よりさし出てて、多く取らんと騷ぐ者は、なか〳〵うちこぼしてあつかふ程に、かろらかにふと取り出でぬる者には遲れて、かしこき納殿に火燒屋をして取り入るゝこそをかしけれ。掃部司の者共、疊取るや遲きと、主殿司の官人ども、手毎に箒とり、砂子ならす。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子打ちて遊ぶを、とく出てこなんと待つに、有度濱歌ひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたるほどなど、いかにせんとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖を合せて、二人走り出てて、西に向ひて立ちぬ。つぎ〳〵出づるに、足踏を拍子に合せては、半臂の緒つくろひ、冠、袍の領などつくろひて、「あやもなきこま山」など歌ひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。大比禮など舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、果てぬるこそいと口惜しけれど、またあるべしと思ふはたのもしきに、御琴舁き返して、此度やがて竹のうしろから舞ひ出てて、脫ぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。掻練の下襲など亂れ合ひて、こなたかなたに漂りなどしたる、いで、更にいへば世の常也。此度は又もあるまじければにや、いみじくこそ果てなん事は口惜しけれ。上達部なども、つゞきて出て給ひぬれば、いとさう〳〵しう口惜しきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそ慰めら

一五陪從の半臂諸也、江次第にあり
一六冠也
一七袍の領也、拾和名コロモノクビ
一八こゑのあやのなき也
一九求子のたゞひなるべし
二〇大比禮也、江次第云返歌大比禮返也云云
二一大ひれの後使舞人退出云々
二二御琴、舁き返し也、是より以下は退出のさまなるべし
二三江次第に歸時、綾二疊東云云
二四右沼云云
二五掻練下襲、舞人のさま也

るれ。

○ついがさねども――石清水の臨時祭の御前の座に内藏寮衝重をすうる事、江次第六に見ゆ。所の樂は舞人陪從などの瓶子を執る。ついがさねをすうる事おぼつかなし。但し石清水還立御前儀に突重を雜色以下役之、とあり。此時所の樂もすゑわたすべし。こゝは此儀式をいへるにや。

○やくかひ――口訣あり。

○かしこきをさめどのに――納殿、也足軒御說云、何にてもをさめおかるゝ所也。かしこくはやみちにやくかひをいれおく所にしてといはんとて、をさめどのといへるなるべし。

○かんもりづかさの――御前の儀果てて舞あるべきさま也。江次第六に、掃部撤レ座、主殿掃除とある是也。

○承香殿のまへのほどに――承香殿は和名に仁壽殿の北にあり云云。拾芥大內裏の圖に清涼殿の丑方にあたる殿也。樂人舞人此殿のまへより昊竹臺をへて清涼殿の前へ出づる樣也。江次第六臨時祭舞略云、主上出御有りて王卿着座して、殿上人壁下の座に着く、さて使舞人などを召し、陪從音樂をなす。藏人所の雜色二人御琴を舁きて、昊竹の臺のもとに至る。主上藏人頭をめして一の舞を仰せ定めらる。舞人すゝみて、駿河舞をまふ也。先づ一の舞二人進み出でてまへり、

其後次々の舞あり、舞人上より退いて竹臺の東に至る。次に右の袒いで進みて求子をまへり。舞をはりて舞人下より退く。大比禮をかなでて後、使舞人退出して、承香殿の馬遷を經て、建春門にいたり、それより賀茂にまうづ。猶委しく

○うとはまうたひ――賀茂の臨時の祭の歌定家卿「ふる袖はみたらし河に影見えて空にぞすめるうとはまのこゑ」

○ぬぎたれつるさま――江次第曰、袒レ右、只袒二袍袖許一。不レ袒二半臂下重一。

○かへりだちの御かぐら――むかしは南祭に還立なくて、賀茂許りに有りし由雲圖抄にあり。公事根源云、賀茂の臨時の祭、先兼日に試樂調樂などいふ事あり。當日の儀式御禊庭座など石清水に同じ。社頭の儀果てて、使舞人歸りまゐりて還立の儀あり。孫廂に御障子をたつ。御引直衣に御草鞋をめす。額間より出御あり、階間のとほりの庭南北二行に座を敷きて、使ひ舞人つく、うしろに本末の神樂の所作人、陪從、近衛の召人つく。出御ありて、公卿召あれば、簧子長階に候す。階の下に頭以下着きて、使以下を召す。勸盃ありて、神樂あり。庭火よりはじめて、朝倉其駒までうたふ。庭火にももろ歌あるべければ、人長作法あり。みかぐらはててろくあり云云。

庭火の烟の細う上りたるに、神樂の笛の面白うわななき、細う吹きすましたるに、一歌の聲もいとあはれにいみじく面白く、三寒くさへ氷りて、四打ちたる衣もいとつめた

一主殿頭役之、立二金輪一積薪官人着二膝突一と雲圖抄にあり

二本末のうた也

三霜月なれば也

四見る人の衣裳也

五才男也

六いまだ滿少の宮づかへせざりし時也

七賀茂にて也

八篝火なるべし打松とて松をたく也

九舞人のさま也

一〇賀茂の橋也、みたらしにあり

一一誰ともなし、但實方などの事にや

一二舞人に出づるをよろこびしにや

一三賀茂也

一四いまゝしき也、深切にものに執着すまじき事と也

う、扇持たる手の冷ゆるも覺えず。才の男とも召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、たゞ漫るを見るに飽かねば、御社まで行きて見る折もあり。大きなる木のもとに車立てたれば、松の烟たなびきて、火の影に半臂の緒、衣の艶も、畫よりほこよなくまさりて見ゆる。橋の板を踏み鳴らしつゝ、謦合せて舞ふほども、いとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるは、まことに神もうれしと思しめすらんかし。少將といひける人の、年毎に舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の一の橋のもとにあゝなるを聞けば、ゆゝしう、せちに物思ひ入れじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、更にえ思ひ捨つまじけれ。

○さえのをのこ――雲圖抄御神樂裏書歌二韓神一時人長立舞。次勸盃。次人長進召二才男一。公事根源にも、からかみはてゝ又すゝみて才の男めす云云。

○人長の――舞人陪從などの長也。次第云、舞人陪從皆起座隨二人長仰一皆次第着座云云。

○たゞわたるを見るにあかねば――甲人は御前の儀などは見ねば、使舞人などの大路をわたるを見て、猶あかで賀茂まで行きて見ると也。

○御やしろまで行きて――江次第十賀茂臨時祭社頭儀委。使舞人など着座して垣下殿上人相分れて勸盃あり。使ひ宣命をよみ、御馬を引次にあづまあそびあ

枕草子

一かへりたちなければ也
二かへりたちあらば也
三一條院也
四清少の申すにや
五后宮へも申せし也
六例なき事にさもあるまじきさま思ひたゆみしにさ也
七よろこびふためくさま也
八物見に急ぎさうのぼる也
九從者也
一〇裳也、女房のかはかくす也

り、次に舞ひ、次に馬を馳す。猶委し。

○上の御やしろの一の橋のもとに――少將の執心をとめてこゝに有りしと也。

是橋本の社の事にや。賀茂の橋本のやしろは藤原實方をいはひし由つれ〴〵草に見ゆ。此事にや、猶可尋之。

「八幡の臨時の祭の名殘こそ、いとつれ〴〵なれ。などて還りて又舞ふわざをせざりけん。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかゝづるこそ口惜しけれ。」などいふを、上の御前に聞し召して、「明日還りたらん、召して舞はせん」などゝ仰せらるゝ。「まことにや候ふらん。さらばいかにめでたからん」など申す。うれしがりて、宮の御前にも「猶それ舞はせさせ給へ」と集りて、申しまどひしかば、其度還りて舞ひしは、嬉しかりし物かな。さしもやあらざらんとうちたゆみつるに、舞人前に召すを聞きつけたる心地、物にあたるばかり騒ぐも、いと物狂しく、下にある人々惑ひのぼるさまこそ、人の從者、殿上人などの見るらんも知らず、裳を頭にうちかづきてのぼるを笑ふもことわり也。

○やはたのりんじの――袋双紙云、八幡臨時祭は、先朱雀院御時被二始行一也。

件歌は貫之奉之。其歌に「松も生ひ又も苔むす石清水行末遠くつかへまつらん下略。」

○ろくをえてうしろより――内藏づかさ祿の唐櫃を小板敷にかきもてきて藏人

枕草子

一定子也
二一條の南東、洞院の東さ給芹にあり
三清少也
四里にゐながらおろひやる也
五齊信卿にや、清少の里亭へ也
六おちぶれの折にも作法懈怠なき也
七女ばうたち也
八薄紅なゝ也
九衣のいろ也
一〇おもしろき詞也
一一わざとにかく奉らせ給ふと也
一二清少の事をの

頭以下、使舞人などにくばりあたふる事江次第六に委し。

○其たびかへりてまひしは――南祭にむかしは還立なかりしを、近代おこなはるゝよし江次第などに侍るは、此時よりの事にや。

百二十八

故殿などおはしまさで、世の中に事出でき、物騒がしく成りて、宮又うちにも入らせ給はず。小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたり覺束なさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「けふは宮に參りたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の裝束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても候ふ哉。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかりゐて、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、しをん、萩などをかしう居並みたる哉。御前の草のいと高きを、などか、これは茂りて侍る。はらはせてこそ』といひつれば『露おかせて御覽ぜんとて、こと更に』と、宰相の君の聲にていらへつる也。をかしくも覺えつる哉。御里居いと心憂し。かゝる所に住居せさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたる甲斐もなく』など、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。參りて見給へ。哀げなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき

給ふ也
三宮の小一條に おはすはゞの事也
四清少をいふ也
五女房達のいひし也
六清少の詞也
七我も讃人のにくさにまゐらぬ
八左中將の詞也 おとなしやかなる詞ゞ也

事」などの給ふ。「いさ、人の憎しと思ひたりしかば、又憎く侍りしかば」といらへ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

○故どのなどおはしまさで世の中にこと出で來――中關白道隆公薨じ給ひて、御堂殿關白し給ひしに、道長公、道隆公と兄弟の御仲よからざるにそへて、伊周公も下心いどみがちにありしに、伊周公其時の太上天皇花山院を由なき恨にて、射奉らんとし給ひしつみ、又禁中ならでおこなはせ給はぬ大元師法を伊周公年比おこなひ給へるつみ、又其比の女院東三條院をのろひ給へりと云ふつみなどにて、長德二年四月太宰權帥に左遷し給へり。御弟の隆家卿も花山院をいゝ給はんとせしつみありとて、出雲へ配流せり。后宮定子は此御恨にて御ぐしおろして籠りおはす由、榮花物語三四の卷、大鏡にも見ゆ。

○何ともなくうたて――其比清少を妬む者有りて御堂殿がたへ清少の心ざしありと談じたるゆゑ、久しく后宮へ出仕せざりし也。

○黃朽葉のからぎぬ――桃華蘂葉に七月より九月に至る云云。

○紫菀――河海云、おもて蘇芳うらもえぎ也云云。

○萩――おもてすはう、うらあをしと桃華蘂葉にあり。

○かたりきかせ奉れとなめり――いかなる事にても清少は侍ふべき者と后宮の思召すよしを清少へ傳へよとのやうに人々左中將にいひしと也。

一清少御堂殿の人し緣ありゝ也
二清少を讃する もののさま也
三清少のまゐれは人々かけごゝをいひやむ也
四清少をよそがましくする也
五聞過してよゐちがりし也
六后宮の御あたりには也
七后宮の御せ事もなくて也
八長女が詞也
九后宮の女ぼうなるべし
一〇清少心也、后

○ろだいのまへの――是は禁中などの事を取りまぜ語り給ふさまにや。露臺は仁壽殿の邊と江次第六に見ゆ。但し小一條にもろだい作られしにや。

○ぼうたん――牡丹也。花の比ならねど、枝葉も唐めきしとにや。唐朝に盛にもてあそびし事、白氏文集、愛蓮說などに見えたれば、からめきをかしといふにや。

げにいかならんと思ひまゐらする御氣色にはあらで、侍ふ人達の、「左大殿の方の人、知る筋にてありしなどさゝめき、さしつどひて物など云ふに、下より參るを見ては、ひ止み、はなち立てたるさまに見做はず憎ければ、「まゐれ」なとある度の仰せをも過して、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、只あなたがたになして、空言なども出て來べし。例ならず仰事などもなくて、日頃になれば、心細くて打ち眺むる程に、長女文をもて來り、「御前より左京の君して忍びて給はせたりつる」と云ひて、こゝにてさへひき忍ぶもあまり也。人傳の仰せ言にてあらぬなめりと、胸潰れてあけたれば、紙には物も書かせ給はず。山吹の花びらを只一つ包ませ給へり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日頃の絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長女も打ち守りて、「御前にはいかに、物の折毎に思し出て聞えさせ給ふなる物を」とて、誰もあやしき御長居とのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて「こゝなる所に、あからさまにまかりて

宮の直に清少への御せうそこと
おもふ也
一疑問也
三后宮の御せう
そこを清少の見
知りたるさまを
をさめも見とり
し也
三清少を也
四かりそめ也
五いはでおもふ
その上句を忘れ
たる也
六清少の心也

参らん」といひて、いぬるのちに、御返事書きて参らせんとするに、この歌の本さらに忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら、知らぬ人やはある。こゝもとに覚えながら、いひ出てられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、小さき童の前に居たるが、『下行く水の』とこそ申せ」といひたる、などてかく忘れつるならん。これに教へらるゝもをかし。

○げにいかならんと思ひ——彼左中將の后宮の御心むけの事をかたられしをうけて、げに后宮の御氣色はいかならんと心もとなく憚るべき事もなしと清少心也。

○左大殿——道長公長徳二年七月廿日轉二左大臣一と公卿補任にあり。

○をさめ——長女也、下づかへのをんななり。

○おまへより——后宮の御かたより、左京のきみをとり次にて、此文を給へりとをさめのかたる也。

○こゝにてさへ——后宮は讒人のまへをおぼして、清少への御文を忍ばせ給へるに、長女清少のかたにても忍ぶと也。

○山吹の花びら——山吹は口なし色なれば、いはで思ふといふ心なるべし。

○いはでおもふに——「心には下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」前に、おほせ言もなくて日ごろになればとある首尾なり。

一后宮の御こと
は
二いはでおもふ
そのうたの事を
の給ふ也
三いまあひかた
りてこそなぐさ
むべけれとの心
也
四清少かの歌の
上句わすれし事
也
五后宮也
六后の御詞也さ
やうなる物ぞと
也
七后宮の御物か
たり也

○たれもあやしき御ながめ——清少の久しき里居を人々あやしがると也。

○おなじふる事といひながら——同じ古歌の中にも、此歌はことに誰もよく覚えたる事をと也。

○こゝもとにおぼえながら——世俗に心やすき事を足もとなる事といふにおなじ。

御返り参らせて、少し程經て参りたり。いかゞと例よりはつゝましうて、御几帳にはた隠れたるを、「あれは今参りか」なンど、笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、此折は、さもいひつべかりけりとなん思ふを、見つけては、誓しえこそ慰むまじけれ」などの給はせて、變りたる御氣色もなし。童に教へられし詞など啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ。あまりあなづるふる事はさもありぬべし」など仰せられて、ついでに、「人の謎々合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらうゝしかりけるが、『左の一番はおのれ言はん。さ思ひ給へ』など輙むるに、さりともわろき事はいひ出でじと、撰り定むるに『其詞を聞かん。いかに』など問ふ。『たゞまかせて物し給へ。さ申して、いと口惜しうはあらじ』といふを、げにと推しはかる。日いと近う成りぬれば、『猶この事の給へ。非常にをかしき事もこそあれ』といふを、『いさ知らず。さらばな輙まれそ』などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、其日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人などよき人々多く居並み

て、合はするに、左の一番に、いみじう用意しもてなしたるさまの、いかなる事をか言ひ出でんと見えたれば、「あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、『なぞ〳〵』といふほど、いと心もとなし。天にはり弓」といひ出でたり。

○はたがくれ——端隠也。すこし面がくしに清少のゐる也。

○あれは今まゐりか——清少のうゐ〳〵しげなるをたはぶれの給ふ詞也。

○此をりはさもいひつべかりけり——いはでおもふなどしうねくにくげなる事ながら、此折ふしにはかなふべしと也。

○見つけではしばしえこそ——是清少の久しくまゐらざりし恨みをの給ふ也。かくいふにまさる心中の無音の遺恨あれば、清少を見つけずば、このうらみはなぐさむまじと也。是も御たはぶれ也。

○なぞ〳〵あはせしける——謎を左方右方わかれて、歌合のやうに勝負する事也。なぞの歌合といふ物もあり。其たぐひなり。

○ひざうにをかしき——非常に也。さやうに奥ふかげにても、よのつねならずをかしくてわらはるゝ事もやと也。

○むつかれば——發憤、はらだつ也。

○みなかた人——左右の方々の人々居分れたる也。

○あはするに——なぞ〳〵を合はせあらそふ也。

一 はたがくれ——端隠也、すこし面がくしに清少のゐる也。
二 此人を撰び定むる也。
三 貌心もとながりてとふ也。
四 さやうに申すとてわろき事申さじと也。
五 なぞ合せの目限也。
六 又心もとながりてとふ也。
七 勞巧の人のはらたちての答也。
八 双びて也。
九 用意也、かの勞巧の人のやうたいする也。
一〇 右方也。
一一 左也。
一二 勞巧の人のなど也。
一三 勞巧の人のへおろかならぬ事也。
一四 勞々也、なぞ〳〵などの巧者也。
一五 約束したる也。
一六 此人を撰び定むる也。
一七 貌心もとながりてとふ也。
一八 勞巧の人の詞也。
一九 さやうに申すとてわろき事申さじと也。
二〇 なぞ合せの目限也。
二一 又心もとながりてとふ也。
二二 勞巧の人のはらたちての答也。
二三 双びて也。
二四 用意也、かの勞巧の人のやうたいする也。
二五 右方也。
二六 左也。
二七 勞巧の人のなど也。

右の方の人はいと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物も覺えず、あさましうなりて、いとにくゝ愛敬なくて、あなたによりて、殊更に負けさせんとしけるをなんど、かた時の程に思ふに、右の人をこに思ひて、うち笑ひて、『やゝ、さらに知らず』と口引き垂れて、猿樂しかくるに、『數させ〳〵』とて、さゝせつ。いと怪しき事。是知らぬ者誰かあらん。さらに數さすまじ』と論ずれど、『知らずといひ出でんは、などてか負くるにならざらん』とて、つぎ〳〵のも、此人に論じ勝たせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそはあれ。何しかは、え知らずといひし』と、後に恨みられて、『罪さりける事』を語り出でさせ給へば、『御前なる限は、『さは思ふべし。口惜しく思ひけん。こなたの人の心地、聞し召したりけん、いかににくかりけん』など笑ふ。これは忘れたる事かは。皆人知りたることにや。

○右のかたの人はいと興あり——此なぞ童べもしりたる事にて、ときやすければ、勝つべきにて逸興とおもへる也。

○あなたによりてことさらに——彼勞巧の人右方に心よせて、わざと左にまけさせんとてしたるわざをしらで、ねたしと片時のほどにさまん〳〵思ひくだきし也。

○口ひきたれて——おぞみて物いふさま也。

○數させ〳〵——勞巧の人かちに定めて勝の數をとらせたる也。花鳥餘情云、

歌合に員指とてある也。天徳の歌合には金銀の藤の枝を洲濱にするゑて、かずさしの所におく。花の枝にて数をとれる也云云。

○此人に論じかたせける――浅き事をあざけりて、態と右にまけしに、左の勝は嬉しき事にはあらねど、先勝をよきにしてこの巧者に任せし也。

○さこそはあれ――しらずといふからは勝に定むべき事ぞとの心也。

○つみさりける――罪去、つみをいひのがるゝ心也、右方の人に彼しらずといひし人さま〳〵いひわけして罪をのがれたると也。

○これはわすれたる事かは――此なぞは清少のごとく忘れたるにはあらず、皆しりて態としらずといひしに、われはかくわらはも知りたるうたを忘れたる事と也。

百二十九

正月十日空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒畠などいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木若立ちて、いとしもと勝ちにさし出てたる、片つ方は青く、今片枝は濃くつやゝかにて、蘇枋のやうに見えたるに、細やかなる童の狩衣はかけやりなどして、髪はうるはしきがのぼりたれば、又紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男兒、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、又髪をかしげなる童の、袙ども綻び勝ちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる、三四人、「卯槌の木のよからん切りておろせ。こゝに召すぞ」などいひて。おろしたれば、走りがひ、取りわき「われに多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴着たる男走り來て乞ふに、「まて」などいへば、木のもとによりて引き搖がすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞ有るかし。

○しもとがちに――笞和名、枠玉篇、すは枝のおほく出でたる也。

○かけやりなどして――物にかけてやぶりたるさま也。

○よき木きりていで――よき桃の枝きりて出せよと也。これ正月の卯杖のれうにこふなるべし。延喜式舍人式に、正月上卯日の御杖に桃梅各六束云云。

○はしりかひ――はしりまがふ心也。ちりかひくもれなどいふと同じ。

○梅などのなりたるをりも――此桃の枝をばひあへるごとく梅のなりし時もすると也。

百三十

清げなる男の雙六を日一日打ちて、猶飽かぬにや、短き燈臺に、火をあかくかゝげ

一厚也、雲深き也
二清、ケザヤカ
三荒畠也
四土也、地心も潤氣ありて平直ならぬ也
五若立、春の槍の樣也
六濃紅に光ある也
七蘇枋也、桃の若枝のさま也
八桃の木にのぼる也
九ひきかさね袴たる也
一〇半靴、くつ也前註
一一童女なるべし
一二袙、前註
一三打着也
一四卯槌、卯杖と大やうおなじ、前註
一五イ御前にもめす
一六句
一七桃枝切りておろす也
一八とりわからはひあふ也
一九木にのぼりしわらはの今しはしまてといふ也
二〇かのおのこのわらはをおゝす也
二一木のぼりの童のさま也
二二木にとりつきて也

一 是亦別段也
二 敵也、相手也
三 采サイ和名
三 采をいる、を持つ也
四 古くてなよらかなる也
五 呪咀也
六 ほこらはしき也

て、敵の賽をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤の上に立てて待つ。狩衣の領の顔にかゝれば、片手して押し入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、さはいみじう呪ふとも、うちはづしてんやと、心もとなげに、うちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。

枕

○とみにもいれねば——相手の賽を悪しかれといひて手に入れてもみなどして、頓ても筒にいれざる也。

○さはいみじうのろふとも——さやうに我がさいを悪しかれと呪咀するともよき目うたん物をと也。

草子

一 直衣の人絆也
二 石をかたはしより置く也
三 位ひくき人也やごとなき人の相手也
四 及びか、れる也

碁をやんごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなる氣色に拾ひ置くに、劣りたる人の居ずまゐも、畏まりたる氣色に、碁盤よりは少し遠くて、及びつゝ、袖の下いま片手にて引きやりつゝ、打ちたるもをかし。

○ないがしろなるけしき——しどげなきさま也。空蟬卷に、ふたあゐのこうちぎだつ物、ないがしろにきなしてと云云。

○かしこまりたるけしきに——はゞかりたるさま也。

○袖のしたいまかた手にて——及びごしに石をおけば、盤の上に袖のさはらぬやうにせしさま也。

枕

一 菱也

草子

百三十一

おそろしきもの　橡の笠。焼けたる所。水ぶき。菱。髪多かる男の頭洗ひて乾すほど。栗のいが。

○つるばみのかさ——橡和名。櫟實也云云。どんぐりの笠のたぐひなるべし。

○みづぶき——和名云、芡一名鷄頭草、其實似鳥頭故以名之。

百三十二

清しと見ゆる物　土器。新しき金椀。疊にさす薦。水を物に入るゝ透影。新しき細櫃。

○かなまり——金椀和名前註。

○水を物にいるゝ——透影、すきとほる物にいるゝ影也。

○ほそびつ——孟津抄綿をかけてむしりなどするもの也。細流にぬりをけなどのたぐひか云云。

百三十三

汚げなる物　鼠のすみか。つとめて手遅く洗ふ人。白きつきはな、すゝ鼻し歩く稚

一 早朝也

二 吐の字也
三 浴せぬ也

皃。油入るゝ物。雀の子。暑き程に久しく湯浴みぬ。衣の萎えたるは、いづれもい づれも汚げなる中に、練色の絹こそ汚げなれ。

○ねりいろの――練色の絹のなえたるはと也。

春曙抄 七終

一 屏風を布にてはりて絵なども書きし物也
二 是は一向いやしげたる沙汰にも及ばぬと也
三 是も布屏風の事也
四 繪のさま也
五 胡粉
六 朱砂
七 厨子
八 伊と豫
九 出雲莚とてかの土産なる由延喜式、民部式にあり

枕草子春曙抄 巻八

百三十四

いやしげなる物　式部の丞の爵。黒き髪の筋太き。布屏風の新しき、古り黑みたるはさる言ふかひなき物にて、なか〳〵何とも見えず。新しく仕立てて、櫻の花多く咲かせて、胡粉、朱砂など彩りたる繪書きたる。遣戸、厨子、何も田舍者はいやしきなり。莚張の車のおそひ。檢非違使の袴。伊豫簾の筋太き。人の子に法師子のふとりたる。眞の出雲莚の疊。

○しきぶのぞうのしやく――式部丞爵。百寮訓要云、地下の六位可レ然もの任レ之云云。式部丞と民部丞は二省の丞とて、必ず爵を給ふ由職原抄に見ゆ。式部丞必ず叙爵すといへど、猶地下にて昇殿もかなはねば賤しきにや。

○むしろばりの車のおそひ――莚をおほひたる車なるべし。西宮記云、天祿四年十一月八日女御懐子於二東河一有二除服一。其儀御二檳榔毛車一。其上張レ莚懸二鈍色簾并下簾歟等一。御祓之後取二張莚一懸二替簾等一即以歸御。

○けびゐしのはかま――是は檢非違使の下の督の長の事にや。其故は環翠軒云、

看督長とて別當の召具する物みな赤き狩衣に白き布被を着る也。白杖を持ちて雜人等追拂ふ也云云。此の出立をいやしげなるとにや。

枕　一きれん事を氣ずかふ故にや　二疾病なりをこなはるる此の事也　三いうも馴れあそぶ所也

草　四誰と聞きしらぬ人の云也　五むねつぶるもこそわりと也

子　六是も例の所にて也　七むねつぶるる也　八徳朝の文也

百三十五

胸つぶるゝ物　競馬見る。元結よる。親などの心地惡しうして、例ならぬ景色なる。まして世の中など騷がしき比、萬の事覺えず。又物言はぬ稚兒の泣き入りて乳も飲ます、いみじく乳母の抱くにもやまで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり。人などの其うへなど言ふに、先づこそつぶるれ。いみじく憎き人の來たるも、いみじくこそあれ。よべ來たる人の今朝の文の遲き、聞く人さへつぶる。思ふ人の文取りて、さし出でたるも又つぶる。

○おやなどの心ちあしう——孝子の心最も胸つぶるべし。伊勢物語に、とみの事とて御文あり。おどろきて見ればなどいふ所を思ふべし。小學云、文王有レ疾。武王不レ說二冠帶一而養。文王一飯亦一飯。文王再飯再飯。云云。

是らの心かなふべし。

○人などのそのうへなどいふに——是も例の所などにて、人の我が身の上を險ごとするにむねつぶるゝこと也。

枕　一瓜　二イよる　三居也おく心也　四うつくしむ心也　五イふた　六兒の目敏也　七小指也　八たれあまのさま也　九髮をなつかしがりかたぶける也　一〇腫の上也　一一裝束したてられし也　一二かりそめに也　一三愛する也　一四其ままそひつきて也　一五ひいなあそびの道具也　一六前ニ註　一七前ニ註　一八ひよこのさま

草　一九ふりに書きたる稚兒の顏。雀の子の鼠鳴きするに躍り來る。又べになどつけてすゑたれば、親雀の虫など持て來てくくむるもいとらうたし。三つばかりなる稚兒の急ぎて這ひ來る道に、いと小さき塵などの有りけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるをよびに捕へて、大人などに見せたるいとうつくし。尼にそぎたる兒の目に髮のおほひたるを、掻きは遣らで、うち傾きて物など見るいとうつくし。たすきかけにゆひたる腰の上の、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、裝束たてられて歩くもうつくし。をかしげなる稚兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、掻い附きて寢入りたるもらうたし。蠅の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取りあげて見る。葵の小さきもいとうつくし。何も〳〵小さき物はいとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白うつくしきが、二藍の薄物など、衣長くて、擧あげたるが這ひ出て來るも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなる男の、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。雞の雛の足高に、白うをかしげに、衣短かなるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人の後に立ちて歩くも、又親のもとに連れだち歩く、見るもうつくし。雁の子。さりのつぼ。瞿麥の花。

短衣着たるやうなるをいふ也
一五後しりへ也

○うつくしき物――めぐみあはれむ心也。尤も美麗の心もあり。
○ふりにかきたる――姫瓜の事なるべし。
○べになどつけて――雀子を愛して紅粉をつけしにや。
○いとちひさきちりなど――白紙文集十の觀二兒戲一詩に、齠齔七八歳、綺紈三四兒、弄レ塵復鬬レ草、盡日樂嬉嬉、下略。
○たすきがけにゆひたるこしの――是も兒のさまなるべし。源氏薄雲の巻に、ただひめぎみのたすき引きゆひ給へるむねつきぞうつくしげさそひて見え給へる云云。和祕抄云、むかしはをさなき人小袖をばきず。たすきといふ物をきたる也。猶祕訣あり。
○殿上わらは――童殿上とて元服以前に昇殿する事也。
○八九十ばかり――やつここのつとをばかりとよむべし。皇子は七歳にて讀書はじめの事桐壺の巻にあり。只人も八歳より小學に入りて、酒歸應對書數など習ふ事禮記にあり。
○人のしりにたちて――伊勢物語に、しりに立ちておひゆけどとあり。後の聲によむべし。
○かりのこ――鴨子西宮記。かものこ也。
○さりのつぼ――玻璃壺にや。さとはと五音通ずる也。貨源云、玻璃水玉也。

一いとほしくし 替はされし也
二和名ニ效シハフキ咳同
三せきはらひする心にや
四イいられ
五制也
六其子のはしく思ひし物を也
七其子の詞也
八母の人ニ物いはてききいれぬ也
九子のさま也
一〇無正也

或云千年水化爲レ之。

百三十七

人ばへする物。異なる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。はづかしき人に物言はんとするにも、まづ先に立つ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるはあやにくだちて、物など取散らして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえならぬが、親の來たる所えて、ゆかしがりける物を、「あれ見せよや、母」など引揺がすに、大人など物言ふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引き探し出でて見るこそいと憎けれ。それを「まさな」とばかり打ち言ひて、取り隱さで「さなせそ。そこなふな」とばかり笑みて言ふ親も憎し。我えはしたなくも言はで見るこそ心もとなけれ。

○人ばへするもの――人そばへと世俗にいふ詞也。人映と書く。
○あやにくだちて――文惡也。あながちめきたる心なり。せそとおもふ事をしてするさま也。
○ひきはられ――引張られ也。イひきいられハ引とりいるる心也。
○親の來たる所えて――其子を愛する父のきたるにほこりたるさま也。
○まさなとばかり――其子の引きさがすを父の正なしなどばかりいひて、其物をとりもかくさぬ也。

一 鰭板、家の具也
二 土塊也
三 風の名也、和名ニ暴風ハヤチ
四 イニひこばし 牽牛也
五 牛ハ佐日、牛にはさめ牛也
六 蠟にや
七 籠長歟。因獄正をいふにや
八 綱筌
九 强盗
一〇 地梅梅也
一一 鬼薊
一二 茨
一三 枳殼也
一四 牡丹也

○われえはしたなくもいはで――親もさまでしらぬを、他人ば猶つよくもしからで道具そこなはれて見ゐる也。

百三十八

名おそろしき物　青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほこ星。狼。牛はさめ。らう。ろうのをさ。いにすし。それも名のみならず、見るもおそろし。繩莚。强盗、又萬に恐ろし。肱笠雨。くちなはいちご。生靈。鬼薊。鬼薇。茨。枳殼。煎炭。牡丹。牛鬼。

○あをぶち――青みだちたろ淵なるべし。

○いかづち――穀梁傳云、陰陽相薄、感而爲レ雷。

○ふさうくも――不崇雲歟。公羊傳云、觸レ石而起、膚寸而合。不レ崇レ朝而雨者唯泰山雲乎。又不祥雲にや。世のさとしなどに出づる雲也。

○いにすし――未勘。但土佐日記に穗屋のつまの蝙蝠鮨とあり。蝙蝠ハ貝也。和名爲其貌似レ蚓而大者也云云。是にや。には助字なるべし。

○ひぢかさ雨――梁塵愚案抄云、俄にふる雨の笠もとりあへずして袖をかづく雨也。

○いきすだま――河海云、窮鬼遊仙窟。弄花云、生靈也。又たゞ靈也。

一五 牛頭、馬頭のたくひ也

○いりずみ――煎炭。しめりを煎取りし炭にや。奥にいりすみおこすとあり。

百三十九

見るに異なる事なき物の文字に書きて事々しき物　覆盆子。露草。水蓼。胡桃。文章博士。皇后宮の權太夫。楊桃。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顏つきを。

一 胡桃
二 さらの事をいふ也

○いちご――覆盆子。まことに文字はことごとしきにや。

○つゆくさ――鴨頭草と書く也。

○水ぶき――黃實とかけり。本草云、黃實黃堇、三月生レ葉貼レ水大二寸荷葉一。面青背紫。莖葉皆有レ刺下略一。

○もんじやうはかせ――文章博士。史書詩文などよむ人也、令義解云文章博士從五位下。弘仁二年定レ之云云。位ひきき官なればかく云ふ也。

○皇后宮權大夫――職原抄云華族納言參議及三位以上兼レ之云云。中宮大夫は后宮の御内を管領する也。權大夫は大夫のごとくにはあらねば、文字に見るほどはなき歟。

○とらのつゑと――虎杖和名に伊太止利云云。其莖のまだらにて虎の名あるよし本草疏にあり。

一ねずみの子也
二男のおもはぬ也

百四十

むつかしげなる物　縫ひ物の裏。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巣の中より數多まろばし出でたる。裏まだつかぬ皮ぎぬの縫目。殊に清げならぬ所の暗き。異なる事なき人の、小さき子どもなど、數多持ちてあつかひたる。いと深うしも心ざしなき女の、心地あしうして久しくなやみたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

○むつかしげなる――むさ〳〵しげなる心也。又物うき心もあり。

○ぬひものの――繡の絹のうら也。和名云、蔣魴。切韵云繡以二五色絲一刺二萬物形狀一也。

○かはぎぬ――狐腋裘。鮎ノカハゴロモ　裘のたぐひ也。裘の裏付かぬは表の縫目見えてむさ〳〵しきにや。

百四十一

一イ名

えせものの所得る折の事　正月の大根。行幸の折の姫まうち君。六月、十二月の晦日の節折の蔵人。季の御讃經の威儀師。赤袈裟着て、僧の文ども讀みあげたる、いとらうらうじ。御讃經、佛名などの御裝束の所の樂。

○えせものの所うる折――常はあなづらはしき物の折にふれては時にあふ事也。

○正月のおほね――齒固などに用ゐる大根也。花鳥云、齒固は元三によはひをかたむる心也。齒はよはひとよむ也。高土坏六本に折敷をする五一の臺に餅大根橘をもる也下略。

○行幸の折のひめまうち君――東豎子也。公事根源にひめまつともいへり。正月の女叙位に叙爵する故、姫太夫といふにや。公事根源云、あづまわらはといふは、内侍司の被官にて行幸の時、ひめ松とてをかしき馬に乘りて供奉するこれが事也。これはみつ子を用ゐらるゝにや。三子は天子の守りになる由。由緒も侍る故とかや。年ごとに申文を出して必ず五位の位を給ふ也。是は昔より同じ名乘を相傳して、紀朝臣季明と名のる云云。

○よをりの蔵人――節折の命婦とも云ふ也。六月十二月晦日の夜節折の命婦、竹を持ちてまゐりて、主上の御長より始めて所所の寸法を取果てて、宮主にきりあてがはせて御秡をつとむる也。あらたへにこたへとて二度あり。二度果てて祿を給ふ。節折をよをりといふ。竹にて御たけの寸法をとりて其ほどに切りあてがへば也と公事根源にあり。延喜式藏人式云、十二月晦日諸司供二奉荒世和世御裝束一一同二六月一云云。又云孫廂南北兩方立二御屏風一其北御屏風前鋪二小莚一爲二

節折藏人座一と江次第にあり。雲圖抄に圖あり。常はひきき女官の此時座をかまへなど所をうる也。

○季の御讀經の威儀師――季の御どきやうとは二月と八月に百敷にて大般若經を四ケ日講ぜらるる事也。江次第首書云、季御讀經春秋二季請二百僧於南殿一讀二大般若經一。其内定二御前僧二十口一於二御殿一讀二仁王經一下略。威儀師は此みどきやうに彼清涼殿にて仁王經をよむところの御前の僧を引きて入る奉行の僧也。江次第五、季御讀經の所に、威儀師引二御前僧一入レ自二明義仙華等門一云云。西宮記云、南座東端威儀師候前居レ磬云云。雲圖抄に此圖あり。

○あかげさきて――官職便覽云、延曆十三年九月三日延曆寺供養記云、奉行僧二人威儀師從儀師始賜二赤袈裟一云云。

○僧の文どもよみあげたる――僧の名ども書きし例文なるべし。江次第五季御讀經事云、例文置二上卿前一。入二年々僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等與福寺延曆寺等堅義者注文一。近例去年僧名上押レ紙書二付今年可レ請定之僧名一。

○御どきやう佛名などの御さうぞくの所の衆――季の御讀經などに行事の藏人、清涼殿をかざり、辨南殿をかざる事あり。佛名にもかざるを、裝束といふ也。藏人所の衆此時所をうるにや。雲圖抄裏書云、季御讀經事初日行事藏人奉二仕御殿御裝束一辨奉二仕南殿裝束一云云。すなはち圖あり。江次第十一云、御佛名當日

裝束等如レ式下略。延喜式圖書寮云、御佛名裝束御持佛一龕、蒔繪案一脚、供紙花香金銅花盤二口、火爐一口下略。此外三千佛の像二鋪十六佛名經一部などあり。

一市女の笠也

春日祭の舍人ども。大饗の所のあゆみ。正月の藥子。卯杖の法師。五節の心見の御髮上。節會御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡す る折のかん取。

○かすがまつりの――年中行事歌合話云、かすがの祭は二月上の申の日也。まづ未の日勅使たつ。近衞の中將少將これをつとむ。清和天皇貞觀元年十一月九日に始まれり云云。此勅使の近衞の舍人ども、けふ所をうるにや。近衞の隨身番長府生等をこのゑのとねりとはいふ也。又春日まつりに馬寮の使御馬をひきて社をめぐり、長者殿の神馬此次にひきめぐる事江次第五にあり。又春日まつりの使途中の次第に、七條大宮にて、除目をおこなひ、左右大臣各一人。以二藏官一任レ之、左右大辨各一人以二番長一任レ之。頭中將一人以二府生一任レ之云云。これらのとねりをところをうるといふなるべし。

○大饗のところのあゆみ――二宮大饗大臣大饗等也。あゆみとは或說云、大臣などの御慶賀に學生ども列參して、嘉辰令月歡無レ極といふ詩を朗詠して腰指の絹を給ふ事云云。公事根源云、二宮とは春宮中宮を申す也。王卿以下本宮に參

じて拜禮の事あり。次に玄輝門の東西の廊にして饗につく。先づ中宮の饗につく。次に春宮の饗につく。三献の儀有り云々。猶江次第委。大臣大饗は前に委註。あゆみとは歩の字也。江次第に勸學院歩といふ事もあり。常にはことなる事なき學生などの此折に所をうるを云ふにや。

○正月のくすりこ――年中行事歌合註云、藥子はをさなき童女にて侍り。是も屠蘇は小兒よりのむ本文あれば、先づ御藥を是になめさせてきこしめすにや。

○うづゑのほうし――卯杖を奉る法師にや。卯杖の事前註。

○五せちのこころみのみくしあげ――五節の事前に註す。十一月丑日帳臺の試あり。寅日御前の試あり。江次第雲圖抄等委。いづれも五節舞妓を天子の御覽ずる事也。みぐしあげとは五節の舞妓につく女房也。江次第には理髮とあり。雲圖には髮上とあり。江次第十。五節御前試云、時刻先五節師參入着座。次舞姫參上。藏人頭進向二長橋東一於二陪從等亂入一。免レ入者理髮一人。童女二人。蘆爐茵等也。下略。他の者はまゐらぬ所へかの髮上の女房は入る事をゆるさるゝゆゑ、えせ物のところうると也。

○せちゑの御はいぜんのうねめ――御陪膳とは天子の御給仕つかふまつる事也。禁秘抄云、陪膳采女尤可レ然事也下略。江次第一元日節會云、其南置二綠草墩一。陪膳采女座。又云采女撤二御膳臺盤一下略。七日節會踏歌節會にもかくのごとし。采女はいとしもなき女官なれども、せちゑの御はいぜんの折は所をうるとの儀也。

一イわざ　二驗ほやく見える也　三驗の見えぬ也　四人に笑はれぬやうにこの心也　五色々に加持し護念する也　六搖鬚を申す也　執柄どもゝ云ふ也

○大饗の日の史生――大臣大饗に大政官の史生を召して、勸レ坏居レ飯の儀有りて祿を給ふ事あり。紅次第二委。史生は大政官の細事を書註す官人、此時所をうる也。

○七月のすまひ――年中行事歌合註云、相撲といへるは諸國の供御人をめしあつめて、七月に相撲節といふ事をおこなひて天子御覽ずる也。始めをば御召合はせといふ。後にすぐりてめされんずるをぬきてと申す。其次第は江次第委。雲圖抄に圖あり。是もいやしき物の此折に所をうる心なり。

百四十二

苦しげなる物　夜泣きといふ物する稚兒の乳母。思ふ人二人持ちて、こなたかなたに恨みふすべられたる男。こはき物の怪あづかりたる驗者。驗だにはやくはよかるべきを、さしもなきを、さすがに人笑はれにあらじと念ずる、いと苦しげなり。わりなく物疑ひする男に、いみじう思はれたる女。一の所に時めく人もえやすくはあらねど、それはよかゝめり。心いられしたる人。

○おもふ人ふたりもちて――詞花集云、等思二兩人一戀。右大臣「いづくをもよ

七 短気にせはせはしき人也

がるる事のわりなきにふたつにわくるわが身ともがな」

○一の所に――職原抄云、執柄者必蒙二一座之文宣旨一。故稱二一人一。又云二一所一。

○時めく人――攝家などに近習にて召しつかはるる也。

百四十三

一よくよむは理也

二いつかはよくよむべきこと也

三山道也

四他の人人也

五清少上りあさに來る也

六初午なるべし

七清少の心也

八かやうにしひていなりまうでせぬ人も世にあらんとなり

九衣をつはをる心也、前ニ註、よき人にはあらぬさま也

一〇ひきあはたる也

淺しきもの　經など習ひて、いみじくたど〳〵しくて忘れがちにて、返す〳〵おなじ所をよむに、法師はことわり、男も女も、くる〳〵とやすらかに讀みたるこそ、あれが樣に、いつの折とこそふと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひもの言ひ思ふ事なげにて、歩みありく人こそ、いみじく羨しけれ。稻荷に思ひ起して參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じて登る程に、鞦か苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、只ゆきに先だちて詣づる、いと羨し。二月午の日の曉に急ぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりなりにけり。やう〳〵著くさへなりて、誠に佗しうかからぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんとまで涙落ちて休むに、三十餘ばかりなる女の、壺裝束などにはあらで、たゞ引はこえたるが、「丸は七度詣でし侍るぞ。三度は詣でぬ。四度は事にもあらず。未には下向しぬべし」と、道に逢ひたる人に打ち言ひて、下り行きしこそ、只なる所にては目もとまるまじき事の、かれが身に、只今ならばやと覺えしか。

一下ゆたる髪のさま也

二貴人の事也

三貴人也

四手よき人也

五心にくき所への仰せ書きの事也

六手跡未熟なる

一一後女の詞也

一二八時の事也

一三我ありきかぬる時なれば也

○いなりに――延喜式神名帳云、稻荷神社三座。下社大山祇。中社倉稻魂。上社土祖神。この神は百穀を播し給ふ故稻荷と申す由卜部の記にあり。

○中乃御社――倉稻魂と申す也。

○二月むまの日――口傳貫之集第一云、延喜六年月次の屏風の歌の中に、二月初午いなりまうでしたる所「獨のみ我こえなくにいなり山春の霞のたちかくすらん」

○坂のなからばかり――いなりの上の社の奥十八町ばかり山中也。今も氏人は正月五日に參る事あり。瀧などの跡も有。其道のほどのさま也。

○七度まうで――一日に七度まうづる也。稻荷へは七度參る事信心にや。拾遺集に「瀧の水かへりてすまばいなり山七日のぼりししるしとおもはん」とよめり。

男も、女も、法師も、よき子持ちたる人、いみじう羨し。髮長くうるはしう、さかりばなどめでたき人。やんごとなき人の人にかしづかれ給ふもいと羨まし。手よく書き歌よく詠みて、物の折にも先づ取り出でらるる人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心憎き所へつかはすべき仰せ書などを、誰も鳥の跡などの樣にはなどかはあらん。されど、下などにあるを、わざと召して、御硯おろして書かせさせ給ふ美し。さやうの事は、所の大人などに成りねれば、誠に難波わたりの遠か

にかかする折ならでこそ也
七かやうのかたへつかはすべき御文にはこそ也
八相手のさいのよく出る也
九此まことにこそいふ詞面白し

らぬも、事に從ひて書くを、これはさはあらで、上達部のもと、又始めて參らんなど申さする人の娘などには、心ことに上より始めて繕はせ給へるを、集まりて戯れにも妬がり言ふめり。琴笛習ふに、さこそはまだしき程は、かれが樣にいつしかと覺ゆめれ。内裏、東宮の御乳母。上の女房の御かたゞ〳〵ゆるされたる。三味堂たてて、宵曉に祈られたる人。雙六うつにかたきの賽きゝたる。誠に世を思ひ捨てたる聖。

○よき人の御前に——是より彼手よくかく人のうらやましき事をいへり。

○鳥のあとなどのやうに——手の一向あしきを云ふ也。源氏柏木卷に、あやしき鳥の跡のやうにて、河海云、蒼頡觀二鳥跡一作二文字一史記。

○なにはわたりの遠からぬ——手跡の未熟なるを云ふ也。世俗に机ばなれせぬといふたぐひ也。古今集序になにはづのことのはを手習ふ人のはじめにもしけるとあるに付けて、若紫卷に、まだ難波づをだにはか〳〵しうつゞけ侍らざンめればといへるたぐひなるべし。

○あつまりてねたがり——彼手跡よき人にねたみうらやむさま也。人々あつまりてねたき事など戯れてうらやめると也。

○三まいだう——河海云、三昧 梵語也。此には云二正受一又名二正定一云云。法華三昧、念佛三昧などとて他事なく其事のみうけおこなふをいふ也。其堂を三昧

一分際の心也

堂といふ也。

百四十四

疾くゆかしき物 卷染、村濃、括り物など染めたる。人の子産みたる、男女疾く聞かまほし。よき人はさらなり。えせ者、下衆のきはだに聞かまほし。除目のまだつとめて、必ず知る人のなるべき折も聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

○とくゆかしき——早く見まほしく、聞かまほしき心也。

○まきぞめ、むらご、くくりもの——卷染、村濃、括物。くくり物は源氏鬚屋卷に、くくりぞめといへる物なるべし。今くくしといふ物のたぐひ也。

○ぢもくのまだつとめて——縣召除目の翌日早天をいふ也。

○必ずしる人のなるべき——知人の必ず受領すべき年は何れの國等ととく聞きたきと也。

一參行幸也
二くるかたを守りて也
三うねべきさまならぬ也

百四十五

心もとなき物 人の許に、頓の物縫ひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今やく〳〵と苦しう居入りつゝ、あなたを守らへたる心地。子産むべき人の、程過ぐるまでさる氣色の無き。遠き所より思ふ人の文を得て、固く封じたる續飯などはなちあ

四封也
五繕飾也
六イさて白き
七物見の機敷近く車をよする也
八心もとなき心也
九生まれ出づるをまちつけたる也
一〇五十日百日也
一一針
一二イ、す
一三簡きに我糸付くるは其分にて也
一四いかでささらんとやさはれし人のおもふ也
一五え立ちのかぬ也
一六心もとなき上に也
一七傍輩などの先づ其車をかる也
一八我車のかへるなりとよろこぶ也

くる心もと無し。物見に急ぎ出てて、事なりにけり。白き答など見付けたるに、近くやり寄する程佗しう、おりても往ぬべき心地こそすれ。知られじと思ふ人のある日などの程になりたる。行末いと心もとなし。頓の物縫ふに、暗き折、針に絲つくに、前なる人に教へて物言はせたる。いつしかと待ち出てたる稚兒の、五十日、百る。されど、我はさる物にて、ありぬべき所を捕へて、人につけさするに、それも急げばにやあらん、とみにも得さし入れぬを「いで只なすげそ」と言へど、さすがになどてかはと思ひ顔にえ去らぬは、憎ささへ添ひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行く折、先づわがさるべき所へ行くとて、只今おこせんとて出でぬる車待つ程こそ心もと無けれ。大路行きけるを、さなりけると喜びたれば、外ざまにいぬる、いと口惜し。まして物見に出でんとてあるに「事はなりぬらん」など言ふを聞くこそ佗しけれ。子産みける人の、後の事久しき。物見にや、又御寺詣でなどに、諸共にあるべき人を乗せに行きたるを、車さし寄せたてるが、頓にも乗らで待たするもいと心もと無く、うち捨ててもいぬべき心地する。頓に煎炭おこすいと久し。人の歌の返し疾くすべきを、え詠み得ぬ程、いと心もと無し。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべき折もあり。又、まして女も男も、只に言ひ交す程は、疾きのみこそはと思ふ程に、あいなく僻事も出てくるぞかし。又、心地悪しく物おそろしき程、夜の明くる待つこそ、いみじう心もとなけれ。まつばぐろめのひる程

一九是も車まつ程の事也
二〇祭のわたらんといふ也
二一えなのとゞこほる也
二二同車すべき人をさそひにゆきし也
二三イ、に
二四かのさそふ人の遅なはる也
二五イ、心もとなし

も心もと無し。

○とみの物ぬひに——頓の字也。近き晴れわざにきるべき物縫はせし也。
○居いりつゝ——物見の所に入居る也。
○事なりにけり——イとて入。祭などのわたる時節に成りたる也。源氏葵巻に物も見で歸らんとし給へど、事なりぬといへば云云。おなじ心也。
○白きしもと——警固の白杖を持ちて來る也。答は犯人をうつ杖なり。
○しられじと思ふ人あるに——我ある事をかくさんとおもふ人の來たる時、我は隱れ居て前なる人に我ここにあらぬ由を教へていはせたる也。イニ我はかくれゐてしられじと思ふ人のきたるに、前なる人に物いはせてきゝゐたるこゝちとあり。
○ありぬべき所をとらへて——我は糸付くべき針をとらへゐて、人にやとひてつけさする也。
○それもいそげばにや——やとはれし人も氣をせくゆゑにやらん。頓てにもえつけぬ也。
○只今おこせんとて——其かりし車を追付返さんとてのりて出でし也。
○おほぢいきけるを——彼車の歸るを待つ程に他の車の大路をゆく也。
○とみにいりずみおこす——煎炭也。急に炭をおこすに、おこりかぬる程の久

しく心もとなき也。

○けさう人などはさしも――懸想人への返歌は、態と物おもはせて遅くすべければさもいそぐまじけれど、又自然急ぐべき折もありと也。

○ときのみこそはと――口ときのみこそ規模ならめと思ひて、急ぎよみ出づればひが事も出で來ると也。

○まつばぐろめ――松葉黑、待齒黑兩說也。

百四十六

故殿の御服の頃、六月三十日の御祓と言ふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方悪しとて、官のつかさのあいたる所に渡らせ給へり。其夜はさばかり暑くわりなき闇にて、何事も、せばう瓦葺にて樣異也。例の樣に格子なども無く、只めぐりて、御簾許りをぞ掛けたる、中々珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前栽には、萱草と言ふ草を、笹結ひて、いと多く植ゑたりける。花ぎはやかにかさなりて咲きたる、むべ〳〵しき所の前栽にはよし。時司などは只傍にて、鐘の音も例には似ず聞ゆるをゆかしがりて、若き人々二十餘人許り、そなたに行きて走り寄り、高き屋に上りたるを、これより見あぐれば、薄鈍の裳、唐衣、同じ色の單衣襲、紅の袴どもを着てのぼり立ちたるは、いと天人などこそえ言ふまじけれど、空より下

一定子の出で給ふべきさ也
二前に註
三イ、たん
四格子也
五四方に御簾かけし也
六萱草也
七架垣也
八あざやか也
九太政大臣の歴々たる所に似合ふさ也
一〇守辰丁のうつ時の鐘也

りたるにやとぞ見ゆる。同じ若さなれど、おし上げられたる人はえまじらで、羨しげに見あげたるもをかし。日暮れて暗まぎれにぞ、通じたる人々皆たち交りて、右近の陣へ物見に出てきて、戯れ騒ぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事也。上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などの居る障子を、皆うちとをし損ひたり」など、苦しがる者もあれど、聞きも入れず。屋のいと古くて、瓦葺なればにやあらん。暑さの世に知らねば、御簾の外に、夜も臥したるも、古き所なれば、蜈蚣と言ふ物、日一日落ちかゝり、蜂の巣の大きにて、附き集りたるなど、いと恐ろしき。殿上人日毎に參り、夜も居明し、物言ふを聞きて、「秋ばかりにや、太政官の地の、今やかうのにはとならん事を」と誦し出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がなめり。さすがに虫の聲などは聞えたり。八日ぞ還らせ給へば、七夕祭などにて、例より近う見ゆるは、程の狹ければなゞめり。

○故殿の御ふくの比――中關白殿、長徳元年四月十日薨。服忌令云父母服一年。暇五十日云云。

○六月卅日の御はらへ――定子の祓に出で給ふべきと也。祓は觸穢などにもあるべき也と年中行事註有。

○官のつかさのあいたる――太政官廳のあきし所へ渡御也。イあいたん所とは

一女房也
二其方
三薄鈍裳唐衣、道隆公の衣服也
四是も薄鈍也
五若くても上臈はかろがろしく樣にものほらぬさま也
六樣にのぼりしをうらやむ也
七年たけ上臈なる人也
八女房の鎧稱をいましむる也
九うらあけミをしたる也
一〇女房達のさま也
一一外也
一二イ、ん
一三蜂に蜂の付きゐる也
一四定子の御方の宿直に也
一五句を切るべし
一六イに
一七二星の近くみ

ゆる也

朝所にや。

○時つかさなど――禁中の漏剋博士の事也。百寮訓要云、漏剋博士は漏をつかさどる。晝夜の時を伺ふ也。漏水のうつるを守りて時を正しくする職也。職員令云、漏剋博士二人、掌下率二守辰丁一伺中漏剋文節上。守辰丁廿人。掌下伺二漏剋文節一以レ時撃中鐘鼓上。

○たかきやにのぼり――新古今「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」仁徳天皇御歌也。東野州註云、たかき屋は樓閣などの事也。

○くらまぎれにぞ――あかきほどは樓閣へ上らざくし人々、くらきまぎれに若き女房にまじはりてあそびありく也。

○右近陣――月華門をいへり。拾芥に委。

○上達部のつき給ひし――公卿の着座し給ふ所にも、女房のはばからずのぼるなるべし。

○上官――政官也。太政官の官人、辨少納言、外記などをいふ也。

○ふるき所なればむかでといふ物――ここもと法華經譬喩品の長者の大宅久しくふりて、蜈蚣、蚰蜒、守宮、百足などの諸惡虫交横馳走せしさまをおもひてかけるにや。

○太政官の地のいまやかうの――やかうは八講にや。これ古き序文などの句なるへし。追而可考。

○かたへすずしからぬ風の――六月より初秋までここに后宮のおはせしにや。古今二「夏と秋と行きかふ空の通路はかたへ涼しきかぜやふくらん」此うたをうけて殘暑を云ふ也。

○七夕まつりなど――八日に還御の前の夜七夕也。乞巧奠の事江次第にあり。

一 是より別段、三月廿日の事ニきこゆ
二 清少の詞也
三 いかなる詩を書き給はんぞこと也
四 齊信卿也
五 過ぎて古き事也
六 文集の句を覺えざる也

百四十七

宰相中將齊信、宣方の中將と參り給へるに、人人出でて物など言ふに、序もなく、「明日は如何なる詩をか」と言ふに、聊か思ひ廻らし、淵もなく、「人間の四月をこそは」と應へ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたる事なれど、心得て言ふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物忘れはせね、男はさもあらず、詠みたる歌をだになま覺えなるを、誠にをかし。内なる人も、外なる人も、心得ずと思ひたるぞ理なるや。

○宰相中將齊信――長德二年四月廿四日參議、恒德公の三男。

○のぶかたの中將――宣方、六條左大臣重信公息。

○人間の四月をこそ――白氏文集十六云、大林寺桃花、人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無二覓所一不レ知轉入二此中一來云云。此詩こそはかかめ

と也。三月卅日にあすはいかなる詩をかといへばなるべし。

○誠にをかし――齊信の古詩を覺えて答へ給ふを感ずる詞也。

百四十八

一彼人問四月をいへる日の事なるべし

二殿上人の退出せし也

三藏人也

四清少のこさぬ也

五三月卅日に七夕の詩をとなへ給へば也

六齊信の詞也、七夕の心得もなく別の事許に吟じたるにと也

七遠慮なくいふべき事なら寸と也

八夜明はてたる也

九殿分けて歸り

枕草子

「此三月三十日、細殿の一の口に、殿上人數多立てりしを、やう〳〵すべり失せなどして、唯頭ノ中將、源中將、六位一人殘りて、萬の事言ひ、經讀み歌うたひなどするに、「明け果てぬ也。歸りなん」とて、「露は別の涙なるべし」と言ふ事を、頭の中將うち出し給へれば、源中將諸共に、いとをかしく誦んじたるに、「急ぎたる七夕かな」と言ふを、いみじう妬がりて、「曉の別のすぢの、ふと覺えつるまゝに言ひて、佗しうもあるわざかなと、すべて此のわたりにては、かゝる事思ひまはさす言ふは口惜しきぞかし」など言ひて、餘り明くなりにしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておはしにしを、七夕の折、此事を言ひ出てばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必ずしも如何てかは其程に見付けなどもせん。文書きて、主殿司してやらむなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、嬉しくて、其の夜の事など言ひ出てば、心もぞ得給ふ。すずろにふと言ひたらば、怪しなどやうち傾き給はむ。さらばそれには有りし事言はんとてあるに、露おぼめかで應へ給へりしかば、誠にいみじうをかしかりき。月頃いつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながら好き〳〵しと覺えしに、爭てさはた思ひまうけたるやうにの給ひけむ。諸共に妬かり言ひし中將は、思ひもよらで居たるに、「有りし曉の詞戒めらるるは知らぬか」との給ふにぞ、「げにさしつ」なと言ひ、「男はてうけん」など言ふ事を、人には知らせず、此君と心得て言ふを、「何事ぞ〳〵」と、源中將は添ひつきて問へど、言はねば、彼の君に、「猶是の給へ」と怨みられて、よき中なれば聞かせてげり。いとあへなく言ふ程も無く、近うなりぬるをば、「おし小路の程ぞ」など言ふに、我も知りにけるといつしかしられんとて、わざと呼び出でて、「碁盤侍るや。まろも打たんと思ふはいかが。手は許し給はんや。頭中將と等し碁也。なおぼし分きそ」と言ふに、「さのみあらば、定め無くや」と應へしを、彼の君に語り聞えければ、「嬉しく言ひたる」と悅び給ひし。猶過ぎたる事忘れぬ人はいとをかし。

○ほそどのの一の口――弘徽殿の廊の第一にあたりたる戸口なるべし。源氏花宴に、三の口あきたりとあるたぐひ也。弄花抄云弘徽殿の東にわたり廊あり。それを細殿といふ。ほそどのに出づる所に戸三有り。南の第三にあたるくるるさしたる戸也云云。

○頭中將源中將――前にいへる齊信と宣方となるべし。

○露は別のなみだ――菅家文草五云、七月七日代二牛女一惜レ曉。露應二別淚一珠空落雲是殘粧髻未レ成、此句朗詠にもあり。

給ふ也

一〇露は別の吟の事を也

一一齊信、長德二年四月廿四日參議

一二齊信の定子の御方へ也

一三清少の心也

一四詠吟の事也

一五心え給ひもやせんと也

一六齊信の不審し給はんと也

一七不審し給はは委しく申しきかせんと也

一八齊信のよく覺える給ひし也

一九何としてさやうに、又かねて覺悟せし事のやうに覺してこたへ給ひけんと也

二〇宣方は忘れ給へる也

二一齊信の詞也

二二かの露は別の

事をとがめらるると也
二三宣方の詞
二四句
二五齊信卿と清少斗心えて也
二六清少に也
二七齊信に宣方の問也
二八てうけんといふ事はいひきかしけれども、又ほどなく餘のあひ詞をいふ也、
二九宣方の心也、齊信に問ひ聞きて知りたりと清少に知られんと也
三〇清少を也
三一宣方の詞也
三二其盤也
三三おなじほどの碁と也、心ざしまけじと也
三四清少の答也
三五齊信に清少の語る事也

○かつらぎの神今ぞ――拾遺「岩橋のよるの契も絶えぬべしあくる佗しき葛城の神」役行者金峯山とかつらぎ山の間に岩橋をかけさせしにかつらぎの神かたちみにくき故、畫役を佗びたる事あるをよめる歌也。此双紙の心も明けはなれてかたちのはしたなくあらはなる事を佗びていへるなるべし。

○わけておはしにし――前に露は別のと吟じ給ひし其露を分けて齊信のかへり給ふ也。

○いかでかは其ほどに見付け――上達部に齊信の成り給へば、殿上人のやうに中宮の御かたへもおはさぬを、いかで其七夕の比にも見付けて此事をいはんと也。

○月頃のいつしかと思ひ侍りしだに――月ごろ此事をいつか齊信卿に申し出でんと思ひかまへしだにと也。

○我心ながらすき〴〵しと――齊信の覺え給はぬ事など言ひ出でんも我心ながら物ずきなるわざと思案せしにと也。

○もろともにねたがり――宣方の事也。齊信卿と共に清少にとがめられねたがりし事也。

○げにさしつなど――げに〳〵さやうにしたる事有りしと也。

○をとこはてうけん――是は清少と齊信卿のあひ詞なれば知りがたし。但し漢

一是も齊信の事也
二一條院也
三清少のことは也
四宰相にならでもあれかしと也
五帝也
六清少さやうにいふとて、なさ

の張騫が河源を尋ねて、織女を見し事あり。けふ七日なれば、其よせある事にや。

○よき中なればきかせてけり――齊信宣方仲よければ、其子細を齊信のきかせ給ひしと也。

○こばん侍るや――碁盤也。清少にいひよらんためにいへるよせ詞也。

○手はゆるし給はんや――清少、宣方に心とけ給はんやと也。源氏竹川卷に、「哀とて手をゆるせかしいきしにを君に任する我身とならは」是も碁に寄せし也。

○さのみあらは――女のさやうに人になびかば、不定のものにならんと也。

○猶過ぎたる事忘れぬは――齊信の露は別の涙といひし事を、覺え給ひしを感ずる也。

宰相になり給ひしを、上の御前にて、「詩をいとをかしう誦じ侍りしものを、蕭會稽之古廟をも過ぎにし」なども誰か言ひ侍らんとする。暫しならでも侍へかし。口惜しきに」など申ししかばいみじう笑はせ給ひて「さなん言ふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさう〴〵しかりしに、源中將さらずと思ひて、故たち歩くに、宰相中將の御上を言ひ言てて、「未だ三十の期に及ばず」と言ふ詩を、異人には似ずをかしう誦し給ふ」など言へば、「などかそれ

じと御たはぶれ也
七 齊信のさまにまけじとて也
八 故々しく由めきありく也
九 清少詞也
一〇 齊信のよく詠たる給ひしと也
一一 誦也、齊信のらうえいし給ふと也
一二 宣方の詞
一三 宣方の朗詠也
一四 清少の詞也
一五 齊信のやうにらうえいせで殘念と也
一六 清少の詞
一七 齊信のらうえいをほむる也
一八 宣方也
一九 齊信卿を宣方の也
二〇 宣方の詞也
二一 足下也、齊信をさしていへり
二二 齊信卿也

に劣らむ。勝りてこそせめ」とて詠むに、「更に悪くもあらず」と言へば、「佗しの事や。いかであれがやうに誦んぜで」などの給ふ。「三十の期」と言ふ所なん、すべていみじう愛敬づきたりし」など言へば、妬がりて笑ひ歩くに、陣に著き給へりける折に、わきて呼び出でて、「かうなん言ふ。猶そこ教へ給へ」と言ひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて讀むに、あやしくて、「こは誰ぞ」と問へば、忍み聲になりて、「いみじき事聞えん。かう〳〵、昨日陣に著きたりしに問ひきて立ちにたるなめり。『誰ぞ』と、憎からぬ景色にて問ひ給へれば」と言ふも、わざとさ習ひ給ひけんをかしければ、これだに聞けば、出でて物など言ふを、「宰相の中將の德見る事、そなたに向ひて拜むべし」など言ふ。下にありながら、「上に」なと申せば笑はせ給ふ。これをうち出づれば、「誠はあり」など言ふ。御前に、「かく」など申せば笑はせ給ふ。

○詩をいとをかしう——齊信卿の朗詠よくし給ひしに、上達部に成りて昔のやうにもまゐり給はで、おも〳〵しくはくちをしからんと也。

○せうくわいけいのこびやう——朗詠云、蕭會稽之過二古廟一、託締二異代之交一、是朝綱卿の交友之序の文也。會稽の大守蕭氏、吳の季札が賢をしたひて、其廟に行きあそびし事也。

○いまだ三十のごに——未レ逮二三十期一古詩の詞なるべし。未レ勤二全文一。

一 清少のしらぬ也
二 宣方の也
三 清少の詞也
四 宣方也
五 宣方の詞、をかしき事をいはん也
六 齊信に朗詠をならひし事をいへり
七 清少にきかれんはかりに聖さるやうに習ひしを威す也
八 宣方の詞
九 イ、門方
一〇 かの宣方の朗詠せられは也
一一 皆は局に有りしとて出で合ふ也
一二 宣方よりのせうそくのさま也
一三 消息の詞也、參らんとするをと也

○さらにわろくもあらず——わろくもあらず、よくもあらずとふくめたる詞也。其故に佗しの事やとのぶかたのいへる也。

○ぢんにつき——齊信の着陣し給ふ也。

○かうなんいふ——清少かくのごとくいへば、其朗詠を我にをしへ給へと也。

○いみじくよくにせて——宣方の齊信のらうえいに似せて也。

○たちにたる也——局にたたずみうたひしとの心也。

○たれぞとにくからぬけしきにてとひ給へれば——彼たぞととへる清少のけしきのいとほしくて、此習ひて詠じたる事をあざりてかたるぞと也。

○宰相のとく見る事——清少の出でて物いふも、齊信のらうえいををしへし功德を見ると也。

○しもにありながらうへになど——常は清少の局にありても、后宮の御前にな内の御物忌なる日。右近のさうくわん、みつなにとかや言ふ者して、疊紙に書きておこせたるを見れば、「參せんとするを。今日は御物忌にてなん。」「三十の期に及ばず。はいかが」と言ひたれば、返事に「其の期は過ぎぬらん。朱買臣が妻を教へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、又妬がりて、上の御前にも奏しければ、宮の御方に渡らせ給ひて、「爭でかかる事は知りしぞ。四十九に成りける年こそ、さは

三かの朗詠はいかがきこしめしそとの心也
四清少の返事の詞也
五妻也
六番に宣方此清少の返事を申上げらるる也
七定子の御方に番おはしさして也
八清少前漢書をしりたるを御感の詞也
九宣方をさしていふ也

いましめけれ』とて、宣方は、『佗しう言はれにたり』と言ふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物狂ほしかりける君とこそ覺えしか。

○右近のさうくわんみつ何――右近衛將曹光とまで覺えて其名を忘れしさまも。諸官にかみ、すけ、ぜう、さくわんとてあり。近衛つかさは大將をかみとし、中少將をすけとし、將監をぜう、將曹をさくわんとす。さうくわんはさくわんとおなじ。

○其ごは過ぎぬらん。朱買臣が妻を――是宣方の年齢をたはぶれて言ふ詞也。三十歳は過ぎて四十餘五十歳にもあらんとの心也。前漢の朱買臣が妻、買臣の貧しきを疎みて去らん事を求めしに、買臣笑曰、我年五十當二富貴一今已四十餘矣。女苦日久。待二我富貴一。報二女功一と教へいさめし事也。前漢書六十四に朱買臣が傳あり。其事を云ふ也。

百四十九

一是より別段也
二宣方也
三中宮職也
四宣方也
五宣方の詞也
六疎遠の心也
七我に休所をも

弘徽殿とは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方に、うちふしと言ふ者の女、左京と言ひて侍ひけるを、源中將語らひて思ふなど人々笑ふ比、宮の職におはしまいしに參りて、「時々は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべき樣に、女房などもてなし給はねば、いと宮仕へ愚かにさぶらふ。宿直所をだに給はりたらんは、

給はり、懇にし給はば眞實に宮仕へせんと也
八女房連のあへしらひ也
九清少の詞也
一〇宣方の詞也
一一宣方のさま也
一二清少の詞也、そらおぼえていふ也
一三傍輩の女房にも清少のいはせし也
一四傍輩の詞也
一五清少のこゝは也
一六宣方のうらみ給ふことは也
一七清少の詞
一八左京と仲絶えしと也

いみじうまめにさぶらひなん」など言ひ居給ひつれば、人人「げに」など言ふ程に、「誠に人はうちふし休む所のあるこそよけれ。さるあたりには、繁く參り給ふなる物を」とさし應へたりとて、「すべて物聞えず。方人と頼み聞ゆれば、人の言ひ古したる樣に取りなし給ふ」など、いみじうまめだちて怨み給ふ。「あな怪し。如何なる事をか聞えつる。更に聞きとどめ給ふ事なし」など言ふ。傍なる人を引き搖がせば、「さるべき事もなきをほとほり出て給ふ。樣こそあらめ」とて花やかに笑ふに、「是もかの言はせ給ふならん」とていと物しと思へり。「更にさやうの事をなん言ひ侍らぬ。人の言ふだに憎き物を」と言ひて引き入りにしかば、後にも猶「人に恥ぢがましき事言ひつけたる」と怨みて、「殿上人の笑ふとて、言ひ出てたるなり」との給へば「さては一人を怨み給ふべくもあらざめる。あやし」など言へば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

○こきでんとは――弘徽殿ノ女御義子の事也。閑院太政大臣公季公の御むすめ、一條院の女御也。

○御とのゐなど――宿直也。御番仕る事也。中宮へ御見まひの事をかくいへる也。

○さるべき樣に女房など――清少などのあへしらひ給はねば、物うくて疎遠になりたると也。

○うちふしやすむ所の――彼うちふしがむすめ左京の事を秀句にいへる也。
○すべて物きこえずかた人とたのみ――清少は口さがなからず、我方人とたのみしにと也。
○人のいひふるしたるさまにとりなし給ふ――世の人も此事いひふるすに、それとおなじさまに清少の取りなしいひなさるると也。
○さるべき事もなきを――清少の詞には、更に聞きとむる事もなきにうらみ給ふは、様子こそあるらめと也。恨み腹立つをほとほりと云ふ也。
○是もかのいはせ給ふ――清少のをしへていはするとのぶかたのうらみ給ふ也。
○殿上人のわらふとて――殿上人も此事によりて笑ふ故、又清少に此うらみをいひ出でしと也。
○さてはひとりを恨み――殿上人も笑ふとならば、清少一人此うらみをふべきにもあらぬを、あやしくかこち給ふと也。

百五十

昔覺えて不用なる物　繧繝縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表損はれたる。藤の懸りたる松の木枯れたる。地摺の物花かへりたる。繪師の目暗き、几帳

一きぬのふし出でし也
二地摺也

の帷子の舊りぬる。帽額のなくなりぬる。七尺の鬘の赤くなりたる。蒲萄染の織物の灰かへりたる。色好みの老いくづをれたる。面白き家の木立燒けたる。池などはさながらあれど、浮草水草繁りて。

○むかしおぼえてふよう成る――昔の俤は有りながら、不用に成りくだりし心也。
○うげんべりのたたみ――繧繝縁疊。
○ぢずりの物――白き絹にはなだ色のこもんなどすりたる也。
○ゑじの目くらき――衞士、繪師、清濁二義なるべし。
○ゑびそめのはひかへり――蒲萄染薄紫也。紫は桂の灰をさす物なれば、其色のさめたるを灰かへるといふ也。
○浮草水草茂りて――誰取りつくろふ物もなき心をふくめたり。

百五十一

頼もしげなき物　心短かくて人忘れがちなる。堺の夜がれがちなる。六位の頭白き。虚言する人の、さすがに人の事なし顔に、大事うけたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心地悪しうして日頃になりぬる。風吹くに帆あげたる船。經は不斷經。
○夜がれがち――夜離也。

三はなだの色さめし也
四帽額也
五長かもじの年へて色かはりし也
六燒亡のさま也

一末のふけもあるべき心也
二イ、はやきに

○六位のかしらしろき――若きは末の昇進の類もあれど、老いたるはたのもしげなき也。

○人の事なしがほに――人の事を訪ひ取りて其事を成就せんとするさま也。

○經は不斷經――たゆむたゆむまじきのたのみがたき心なるべし。

百五十二

近くて遠き物　宮のほとりの祭。思はぬ兄弟親族の中。鞍馬のつづらをりと言ふ道。十二月の晦日。正月一日の程。

○宮のほとりのまつり――たとへば春日八幡など遠き所も、其儀式は宮中にてあれば、近くて遠きなるべし。

○くらまのつづらをり――九折ツヅラヲリ今鞍馬に七曲といふ道也。近き道をまがりのぼれば遠き也。

百五十三

遠くて近き物　極樂。舟の道。男女の中。

○ごくらく――阿彌陀經に西方過二十萬億佛土一有二世界一名曰二極樂一と說き、又阿彌陀佛去レ此不レ遠ともとける心なるべし。

一八雲山城云云

○舟の道――三四十里の道も風よき時は一日一夜にもゆく心にや。

○男女の中――男は陽、女は陰。たぐひことなる物ながら、夫婦合體の理遠くて近し。

百五十四

井は　堀兼の井。走井は逢坂なるがをかしき。山の井。さしも淺きためしになりはじめけん。飛鳥井「みもひも寒し」と譽めたるこそをかしけれ。玉の井。少將井。櫻井。后町の井。千貫の井。

○ほりかねの井――武藏也。

○山の井さしも淺き――萬葉「淺香山影さへみゆる山の井の淺き心は我おもはなくに」大和物語には淺くは人を思ふ物かはと有り。陸奥也。猶あまたあり。

○あすかゐみもひも寒し――催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみもひも寒しみま草もよし」花鳥餘情云、あすかゐのうたの陰もよしは木陰也。みもひもは寒水也。みま草は馬草也。一說飛鳥井は京にある清水也。二條萬里小路に有りと云ふ。

○せうしやうゐ――少將井と書く。烏丸の東、大炊御門の南と拾芥にあり。

○櫻井――山城水無瀨の近邊也。待宵の小侍從の舊跡ある所也。

○きさきまちの井――后町は常寧殿にありと拾芥に見ゆ。井も有りしにや。
○千貫の井――八雲にちぬきのゐとあり。

百五十五

受領は　紀伊守。和泉。

○受領――國司の事也。
○紀伊守――上國なれば從五位下也。和泉は下國にて從六位下也。官位令に有り

百五十六

やどりのつかさの權の守は　下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

○やどりのつかさの權守――環翠軒（尹橋從三位）の職原抄の私抄云、宿官とは官外記などの五位したるが、頓て顯職に任じがたきを、外國等にしばし任ず。これは官を宿す義也。職原抄云、權守者近代多是遙授也。環翠軒云、遙授とははるかにさづかる也。國の守は四位五位の者先づ任じて則ち任におもむくを、權守は其國へはおもむかず、これ遙授の義也。又曰、權守は地下の五位六位これに任ず。又春の除目の時參議雲客などの兼官になる事も有り。それは別事也。
○下野。甲斐。越後――およそ諸國に大國、上國、中國、下國とてあり。大國

一 叙爵する事也
二 受領の權の守也、前註
三 小檢垣也
四 庭のひろからぬ也
五 前におもひかくべきにもあらずといひし首尾也
六 布障子也
七 いひ付くる也
八 行きのたのみたき也
九 聞の家ほいふも更也と也
一〇 伯父也
一一 早也
一二 そこにすむべき人もなき所なり也

と上國には權守あり。中下國には權守なし。此草紙の五ヶ國は皆上國也。權守勿論有り。

百五十七

大夫は　式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人、思ひかくべき事にもあらず。かうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋のせばき家持たりて、また小檢垣など新しくし、車宿りに車引き立て、前近く木多くして、牛繋がせて、草など飼はするこそ、いと憎けれ。庭いと淸げにて、紫革して伊豫簾かけ渡して、布障子張りて住居たる。夜は「門强くさせ」など事行ひたる、いみじうおひ先なく、心づきなし。親の家、兄はさらなり。をぢ、兄などの住まぬ家、其さるべき人のなからんは、おのづから、睦ましうち知りたる受領。又國へ行きていたづらなる、さらずは女院、宮腹などの屋數多あるに、つかさ待ち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。

○大夫――侍の叙爵せしを大夫といふ也。環翠云、八省の丞左右衛門尉など五位に成りたる時、中務大夫、式部大夫など云ふ也。侍の面目也云云。
○式部大夫――式部丞は相當六位なるを、五位に叙して、叙爵したるを式部大夫といふなり。

三助字也
四それならずは也
五さやうの所を求め出でて也

○左衛門大夫――左衛門大尉は六位也。叙爵して、左衛門大夫といふ也。
○史大夫――左右大史は正六位上也。五位になりて史大夫といふべし。
○紫がはしていよす――伊豫簾をむらさきの革にてかけたる也。
○おやの家しうとは更也――是より彼門つよくさせなどいひし事の、心づきなきに付けて、住むべき家は假初にて、少し荒れたるやうなるがよき事をいふとて、そのしな〳〵をさま〳〵書きつゞけたり。
○おのづからむつましうう知りたる受領――自然したしく知りたる國守の家。又は其國守の任國へ行きて、留守に住む人もなくいたづらにあるなど借りて住むもよからんとの心也。
○宮ばらなどの屋あまた――宮達ある所を宮ばらと云也。伊勢物語にそこ成りける宮ばらにとあるにおなじ。源氏に宮腹の中將とあるは別の事也。
○つかさ待ち出でてのち――其家に住むべき程の官に至り、身の威勢付きて後にすむこそよけれと也。

百五十八

一これより別段也
二不全也
三水草ある也

女の獨り住む家などは只いたう荒れて、築土なども全からず。池などのある所は、水草ゐ、庭なども絲蓬皮りなどこそせねど、所々砂子の中より青き草見え、寂しげなるこそ哀れなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたう固め、きは〳〵しきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

○所々すなごの中より青き――朗詠ニ庭增二氣色一晴砂綠、又鑽レ砂草只三分許などいへるさま也。
○きは〳〵しき――急度する心也。

百五十九

宮仕へ人の里なども、親ども二人あるはよし。人繁く出で入り、奥のかたに、數多樣々の聲多く聞え、馬の音して騷がしきまであれと悲し。されど、忍びても現はれても、「おのづから出て給ひけるを知らで」とも、「又いつか參り給ふ」なども、言ひに差覗く。心がけたる人は、いかがはと、門開けなどするを、うたて騷がしう危うげに、夜中までなど思ひたる景色、いと憎し。大御門はさしつやしなど問はすれば、「まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひて應ふるに、「人出て給ひなば疾くさせ。此頃は盗人いと多かり」など言ひたる、いとむつかしう、うち聞く人たにあり。此人の供なる者ども、この客今や出づると、絶えず差覗きて、けしき見る者どもを笑ふべかめり。眞似うちするも聞きては、いかにいとゞきびしう言ひ咎めん。いと色に出でて言はぬも、思ふ心無き人は、必ず來などやする。されど、す

四それはさにこそあるまじけれと也
五見よき事也
六修理也
七前段に門よくさせなど事行ひたる心付きなしといへる首尾なり

一見まつる人、女房などつゞひしありさま也
二思ひ人などの言づるる也
三自然也
四逢ひ見る隙もやとこころかけし人のさま也
五門守の答也、客のおはすれはささずと也
六防の字也
七答ふる也
八家主のいひ付くる詞也

九よそ人のうらきくもむつかしきこと也
一〇句、此客人の供也
一一門守などのさまをさしていふ也
一二門守などのぞくさまを、供の人人まねし笑ふを、門守のきたらはと也
一三是より彼來とぶらふ人の事を云ふ也
一四健也、まゝなる人也
一五健なる人の詞也
一六イ、いぬる
一七眞實に思ふ人の事也
一八早歸り給へと也
一九篠也、追やる心也
二〇門守などの夜行する也
二一門守の心也
二二いひ事する也
二三門守をにくめる也
二四句
二五まましき親の事也
二六自由なるまじとふくめたり
二七句
二八可畏也、門さすをそれもなくて也
二九彼のかへる人の吹く也

ぐよかなるかたは、一五夜更けぬ。御門も危かなる」と言ひてぬるもあり。一六誠に心さしことなる人は、「はや」など、一七數多度やらはるれど、一八猶居明せば、一九度々歩くに、二〇明けぬべき景色を珍かに思ひて、いみじき御門を、今宵らいさうとあけ廣げて」と聞え二一ごちて、味氣なく曉にぞさすなる。二二如何憎き。二三親添ひぬるは、猶こそあれ。まして二四まことならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましうて、兄の家なども、げにきくに二五はさぞあらん。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内わたりの殿ばらなる人々の出で合ひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居明して、人の出てぬる後も、見出したるこそをかしけれ。在明などは、ましていとをかし。二六笛など吹きて出てぬるを、我は急ぎても寝られず。人のうへなども言ひ、歌など語り聞くままに、二七寝入りぬるこそをかしけれ。

○宮つかへ人の里なども——是より親なき宮仕へ人の里亭の事をいふ也。宮つかへする餘情にて、にぎはしきやうなれど、父母なきはたよりなく悲しとの心也。

○出で給ひけるもしらで——思ひ人のかの宮つかへ人に音信の詞也。退出をもしらで、とく見まはざりしと也。

○うたてさわがしう——夜中までさわがしと家主などの心もとなくおもふさま也。是も親なき人の里亭なれば、家守などの心に任せてつよく守るが佗しき事

をいふ也。

○なまふせがしけに思ひて——防の字也。彼とひ來てある人を防ぎていとはしげに門守のいふ也。

○このかく今や出づると——人出で給ひなばとくさせといひつけられし門守などの、客は出で給へるやとのぞきうかがふを、客の供人のわらひてまねなどする也。

○いといろに出でていはぬも——色に出でておもふよしなどいはぬとてもとも也。

○夜ふけぬみかどあやふかなる——夜更けて門の用心もあやふきに、とく寝て門ささせんとてねたるもありと也。イいぬるもありは、早く歸りて門ささせんとていにし也。此本可然にや。

○あけぬべきけしきをめづらかに——此の客の猶歸りて夜あかさんずるけしきを、門守がめづらかなる人かなとおもふ也。

○こよひらいさうとあけひろげて——古語未勘。

○おやそひぬるはなほこそ——親の守る人は、門守のむつかしきより猶つつましくこそあれと也。

○げにきくにはさぞあらん——兄などの聞くには、猶おもふ人に逢ふ事のつつ

ましからんと也。

○何の宮うちわたりの――なんでふ其宮かたの殿原禁中などの殿ばらの忍びて來逢ふ心也。

○人の出でぬるのちも――かの忍びてきし人の歸りたりしのちも也。

○人のうへなどもいひ歌など――ねいられぬほどに、かたへの人に人の上をかたり歌物かたりをもし、人のいふをもきくきくねいりたる也。

一女友たち也
二人の來る音する也
三ふとをり〳〵來かよふ人と也
四彼來たる人の詞也
五何とながめ給ふらんと、思ひながらと也
六女の答也
七圓座也
八女がた也
九來たる男也
一〇詞はいひたら

百六十

雪のいと高くはあらで、薄らかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端近う同じ心なる人二三人ばかり、火桶中に据ゑて、物語などする程に、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰など掻きすさびて、あはれなるもをかしきも、言ひ合するこそをかしけれ。宵も過ぎぬらんと思ふ程に、履の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、覺えなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひ聞えながら、何でふ事にさはり、其所に暮しつるよしなど言ふ。「今日こん人を」などやうのすぢをぞいふらむかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事を言ひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つかたの足はしもながらあるに、

鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にも言ふ事どもは飽かずぞ覺ゆる。あけくれの程に歸るとて、「雪何の山に滿てり」とうち誦んじたるは、いとをかしき物也。女の限りしては、さもえ居あかざざらましを、只なるよりはいとをかしう、すぎたる有樣などを言ひ合はたる。

○あはれなるもをかしきも――世の中の哀なる事面白き事などをも也。

○なんでふ事にさはり――何と言ふ事の故障にて只とまゐりしと言ふ也。

○けふこん人を――拾遺集「山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人を哀とはみん」兼盛のうた也。

○あけくれのほどに――昧爽文選夜明けんとてしばしくらくなる也。

○雪何の山にみてる――曉入二梁王之苑一雪滿二群山一謝觀が自賦の詞、朗詠にあり。梁孝王は漢文帝の御子也。竹苑をひらきて雪の朝は鄒生枚叟などを召してあそび給ひし事文選の註にあり。

百六十一

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、「是に歌よめ。いかが言ふべき」と、兵衞の藏人に賜びたりければ、月いと明きに、「雪月花の時」と奏したりけろこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌など詠まんに

一是より過ぎたる事の物語也
二イいみじう
三楊器
四誰にや、未考
五と也
六かの男のさま也
七女房はかりありてはの心也
八居明
九かの人のきたりしは面白きと也

五イ、給はせ
六村上の勅定也
ヒめづらしゆな
しと也

は世の常なり。かう折に合ひたる事なん言ひ難き」とこそ仰せられけれ。

○村上の御時――六十二代天暦のみかど也

○雪月花の時と――朗詠、琴詩酒伴皆抛レ我、雪月花ノ時最憶レ君。これ文集にて樂天の殷協律をおもひて憶レ君とつくれりしに、今の兵衛藏人はかやうの折も我君を思ひ奉るとの心にていへるなるべし。

○かうをりにあひたる事なん――袋双紙云、俊頼云、折ふしにかなひたる歌を詠ずるは、讀むにはまされる也。前齋宮歸京の時、供奉の人舟中にいねずしてある間に、郭公一聲鳴きたり。萬人新しき歌をよまばやとおもふ時分に、女房の聲して「淀のわたりのまだ夜深きに」と吟じたり。人々感じて忘れがたかりけると也。

一兵衛藏人也
二村上の帝也
三見て來よと勅
言也
四兵衛藏人歌也
五蛙をそへたり

同じ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりける程、ただすませおはしますに、炭櫃の煙の立ちければ、彼は何の煙ぞ。見て來」と仰せられければ、見て歸り參りて、わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけりと奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焦がるるなりけり。

○わたつみのおきに――沖を爐火にそへて、蛙の火にこがれたるをいはんとてよめるうた也。

一人形也
二髪也、びんづらゆふ也
三皇后宮へなるべし
四御鏡愛なりしと也

百六十二

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、みづら結ひ、裝束などうるはしくして、名書きて獻らせたりけるに、「ともあきらの大君」と書きたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

○みあれのせんじ――今昔物語云、御形の宣旨といふ人は、優にやさしくかたちもめでたかりけり。皇太后宮の女房也。註御堂の中姫三條院の御時、皇后宮と申したるが女房云云。愚案、後拾遺集の作者、大和宣旨と同人なるべし。作者部類云、中納言惟仲女。三條院皇后宮女房。大和守義忠爲レ妻之故、號二大和一。

春曙抄八終

枕草子春曙抄　巻九

百六十三

宮に初めて參りたる頃、物の羞しき事數知らず、涙も落ちぬべければ、よな〳〵參りて、三尺の御几帳の後にさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得さし出てまじうわりなし。「これはとあり、かれはかゝり」などの給はするに、高坏にまゐりたる大殿油なれば、髪の筋なども、中々晝よりは顯證に見えて眩ゆけれど、念じて見などす。いと冷き頃なれば、さし出てさせ給へる御手の僅に見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なく目出度しと、見知らぬさとび心地には、いかがはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞ守り參らする。曉には疾く など急がるゝ。「葛城の神も暫し」など仰せらるゝを、いかで筋かひても御覽せんとて臥したれば、御格子も參らず。女官參りて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きて放つを、「待て」など仰せらるれば、笑ひて歸りぬ。物など問はせ給ひ、宣はするに、久しうなりぬれば、「下りまほしうなりぬらん。さはは疾く」とて、「よさりは疾く」と仰せらるゝ。ゐざり歸るや、遲きと、開け散らしたるに、雪いとをか

一せんかたなくはづかしき也
二顯證あらはなる心也
三しひておもひおこして爲をみる也
四見習はぬ也
五后宮をほめ奉る也
六清少御前をとく歸らんと思也
七定子の御詞也
八何として樣向ならで、そはめても見えまゐらせんとの心也
九うつふしたる也

一〇格子をあゲぬ也
一一格子あけよとそゝのかす中也
一二女房達定子の御心をしりてあけぬ也
一三定子の御詞、清少退出したからんと也
一四されは早かへれと也
一五イ、かへるにや
一六后宮の清少をめす詞也
一七局主の詞也、宮づかへする身のさのみよるべき事かはといひる也
一八后宮の懇に思し召すに清少のうとからんはとの心也
一九清少を進め出すにと也
二〇イ急せは

し。「今日は晝つ方參れ。雪に籠りてあらはにもあるまじ」など、度々召せば、此の局あるじも、「さのみや籠り居給ふらんとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思し召す樣こそあらめ。思ふに違ふは憎きものぞ」と、只急がしに出せば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋の上に降り積みたるも、珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それには態と人も居ず。宮は沈の御火樋の梨繪したるに向ひておはします。上蔵御まかなひし給ひけるまゝに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人々、唐衣着垂れたる程也。安らかなるを見るも美しく、御ふとりつぎたちゐ振舞ふ樣など、つゝましげならず、物言ひゐわらふ。いつの世にか、左樣に交らひならんと思ふさへぞつゝましき。おうよりて、三四人集ひて、繪など見るもあり。

○宮にはじめて――これ清少の、定子の御方へまゐりし始めの物語也。

○よる〳〵まゐりて――ひるも侍らぬにはあるまじけれど、御前へは夜々まゐりしなるべし。恥づる故也。

○これはとありかれはかゝり――繪のいはれを、定子の仰せきかさるゝ也。

○たかつきにまゐりたるおほとのあぶら――高坏にともせし灯也。よの常の灯臺ならでひきゆゐ、髪などもよく見ゆる心也。

○いみじう匂ひたる――寒氣に定子の御手のあかみて、色のうつくしき事をい

一中宮の御かたの火鉢屋也
二事々しく也
三定子也
四長閑所裏也
五着座也
六イ、御ふみとりつぎ
七笑咲也
八清少もいつさやうにつかへなれんと也
九訓也
一〇奥へよりて也

ふ也。

○見しらぬさとびごこち――内わたりを見習はぬ里心にはと也。清少の身の事をいふ也。

○かつらぎ神もしばし――清少をしばしまてととめさせ給ふ詞也。葛城の神は形見ぐるしとて、晝の役をせでよるのみ橋をかけられし也。前註。清少のよるよるのみまゐりて、晝は退出するゆゑかくたはぶれての給ふ也。

○まてなどおほせらるれば――しばし格子をあけそと也。夜明けぬとならば、清少の歸るべければ、猶とどめさせ給はんとての事也。

○物などとはせ給ひ――定子清少に物問ふなど、ゆるさせ給はねば、程の久しくへたると也。

○ゐざりかへるやおそきとあけちらし――清少の御前よりゐざり歸るやいなや、格子を明けはなちし也。前に女官の是はなたせ給へなどいひし首尾也。

○此つぼねあるじも――後宮の御かたにて、清少のひるはやどりゐたる局のあるじ也。誰ともなし。

○いとあへなきまで――あへなきは、あぢきなき心也。新參の清少をあまりなるまで召しまつはすは、后宮の御心こそあらめと也。

○我にもあらぬ心ち――清少はづかしさに心ならず參上する也。

一車の前呵のこゑ也
二清少也
三すこしのぞく心也
四伊周公也、后宮の御兄也
五映の字也
六伊周詞
七物忌なれど雪の御見まひにと也
八后宮の御詞也

○れいのすびつ――后宮の御座をあたためんとて、いつもすびつをおかるゝ也。

○ぢんの御ひおけのなしゐ――沈の御火桶。梨絵は梨地のたぐひなるべし。

○上らふ御まかなひし給ひけるまゝにちかく――上臈の御かた也。御陪膳などに候し、中宮の御介錯などする人なれば、御前ちかく侍る也。

○やすらかなるを――清少のうゐ〳〵しきに、人々の宮づかへ馴れて、進退安げなるが羨しきと也。

○御ふとりつぎ――イ本御文とりつぎ、此本可然にや。御ふは中宮の御封歟。河海云、三宮各千五百戸。弄花云、戸は民戸也。民戸をよせらるゝ心也。それを封戸ともいふ也。愚按、今世の知行所の事也。

暫しありて、さき高う追ふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども、取り遣りなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳の綻びより、僅に見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雲に映えてをかし。柱のもとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、覺束なさに」などの給ふ。道もなしと思ひけるに、「手でか」とぞ御應へあなる。うち笑ひ給ひて、「あはれともや、御覽するとて」などの給ふ御有樣は、これより何事か勝らん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども、違はざめりと覺ゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御髪のかゝら

九何としておはせしにと也
一〇伊周公也
一一けふこん人をといふ歌の詞也
一二伊周公にまさる人あらじと也
一三昔の繪物語也
一四伊周のさき也
一五女房のなれて御返事申也
一六イ、あらがひかへし
一七清少の恥しきより也
一八伊周の憐也
一九后宮にもまゐらせ給ふ也

せ給ふるなど、繪に書きたるをこそ、かゝる事は見るに、現にはまだしらぬを、夢の心地ぞする。女房と物言ひ戯れなどし給ふを、聽へいさゝかも恥かしとも思ひたらず。聞え返し、虚言などの給ひかくるをあらがひ論じなど聞ゆるは、目もあやに淺ましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓物參りなどして、御前にも參らせ給ふ。

○とのまゐらせ給ふなりとて——實は伊周公なれども、まづ道隆公のおはせしとて、おち散りたる物を、とりおきなどつくらふ也。

○さすがにゆかしきなめりと——清少引き入りながら又見まゐらせまほしきは、我心ながらさすがに殿の御ありさまのゆかしきにやとて、御几帳よりのぞきしと也。めづらしき文體也。

○道もなしとおもひけるに——拾遺、山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人を哀とは見ん」

○物がたりにいみじう——伊周公のさまをほめていふ也。榮花物語五云、御年は只今廿二三ばかりにて、御形のとゝのほりふとり清げにて、色あひまことにめでたし。かの光源氏もかくやありけんと見奉る云云。是伊周公の事をいへるなり。枕双紙より後の物語なれども、しばらく引き用ゐる。

○たがはざめりとおぼゆ——此伊周の御さまの見事なるにて、昔物語に色々人のうへをほめし事もたがはずと思ふと也。

一清少をみつけて伊周のとひ給ひし也
二伊周の清少のかたへおはす也
三よそへかとおもへゆと也
四かねて清少の事きおよびしと也
五さきに几帳のはころびより、わづかに見いれし時の事也
六いたくはづかしき心也
七顔を見えじとの心也
八簾のすき間の影もや見えんと

○うつつにはまだ——現在にはかやうの御ありさまのみぬゆゑ、夢かとおもふと也。

○めもあやに淺ましきまで——目綾也。源氏總角巻に、めもあやに心づきなうなりてとあり。細流云、おどろかるゝ心也。孟津抄云、目も及ばぬなどの心也云云。こゝも目も及ばず、おどろかるゝ心なるべし。

「御几帳の後なるは、誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。「さぞ」と申すにこそあらめ。立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物などの給ふ。まだ參らざりし時、聞き置き給ひける事などの給ふ。「誠にさ有りし」などの給ふに、御几帳隔てて、餘所に見やり奉るだに恥かしがりつるを、いと淺ましう、さし向ひ聞えたる心地、現とも覺えず。行幸など見るに、車のかたに、聊か見おこせ給ふは、下簾ひき繕ひ、透影もやと扇をさし隱す。猶いと我心ながらもおほけなく、いかで立ち出てしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこき蔭とさゝげたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髮の怪しささへ思ふに、すべてまことに、さるけしきやつきてこそ見ゆらめ。とく立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が書きたるぞ」などの給ひて、頼にも立ち給はねば、袖を押しあててうつ俯し居たるも、唐衣に白い物移りて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、ろんなう苦しと思ふらんと、心得させ給へるにや。「これ見給へ。是は誰が書き